

碧

潮

全

龍

峽

本間文庫

文庫 14

D 11

最新版

大崎村月 龍川隨風序  
帝中我觀全  
定價四十二錢  
郵稅六錢  
田岡嶺雲新著

大好評

4



版 藏 房 山 齋 京 中

碧

潮

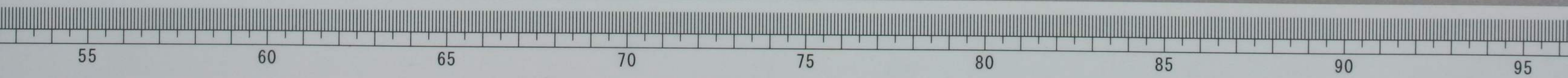
全

龍

峽

本間文庫  
文庫 14  
D 11

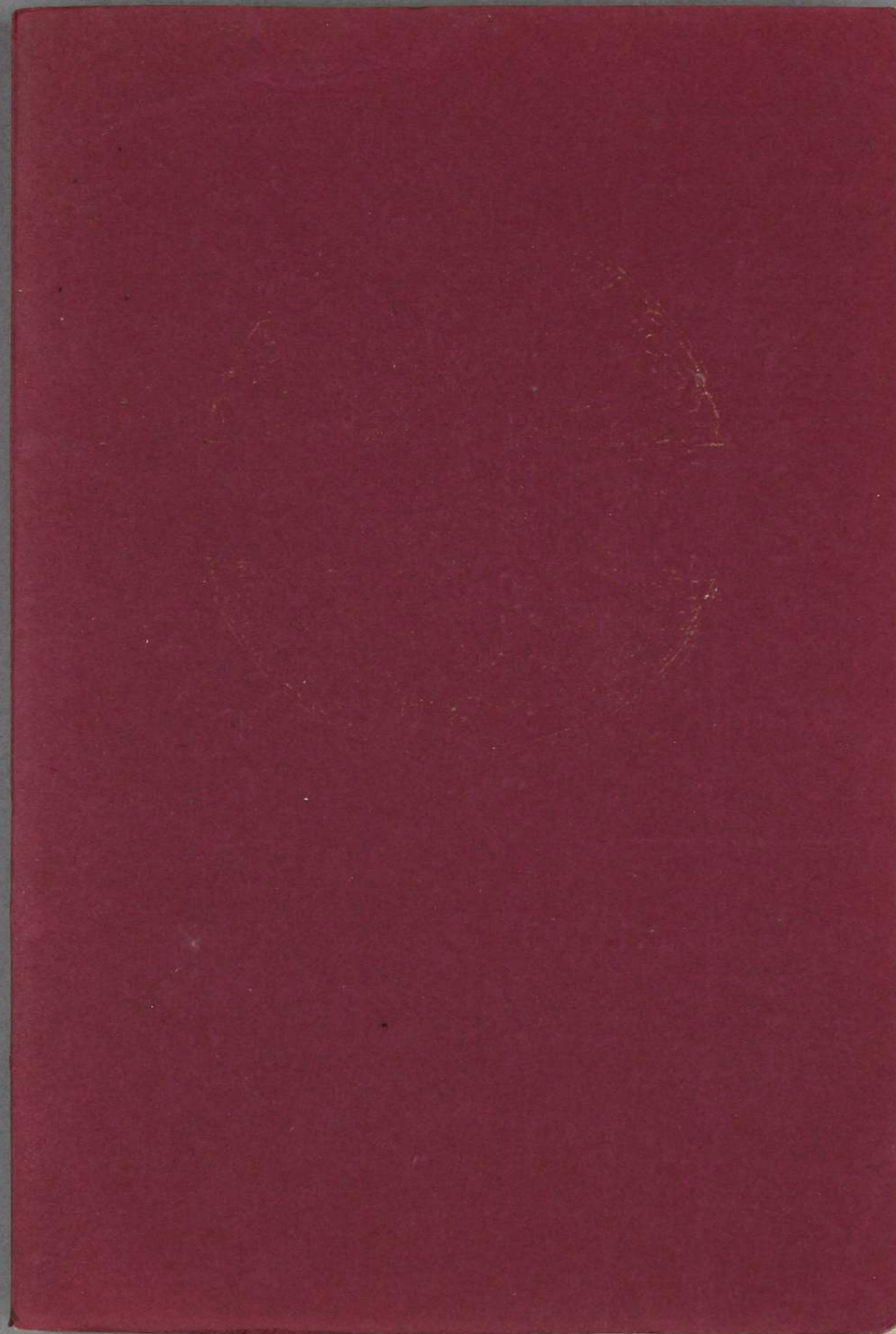
最新版  
大崎村 征川 風林  
帝中我觀全  
定價四十錢  
郵費六錢  
世國 繪畫新著  
人好詳





碧潭





文庫14  
D11





碧

嶺

文學士 樋口龍峽 著

序

余もと文藝の士にあらず。修めしところは  
拘立の理と、經世の學とにあり。加ふるに才  
短く、文に拙なり。多士濟々たる當代の文壇  
に立ちて、能く批評家を以て任む得べき器  
に非ざるは、不敏と雖も自ら知れり。唯性情  
の趣くところ、嗜好の存するところ、文藝の  
ことに關して全く世外の人たることを得  
ず。故に感ずれば則ち述べ、思へば則ち論ず。  
特に一代の思潮の變遷推移に至りては、自

家專修の學に關係深きがために、常に細心の注意を怠ることなし。去る三十四年の頃はひ謂ゆる新道德の思想が西歐より移植傳播せらるゝや、舉世これに風靡するの概ありき。然るに余の此思想に對するや頗る慊焉たる所あるが故に、當時これを以て我が思想界の危機となし、敢て自から揣らず、當代の名家に對して論争を試みき。爾來或は思潮を評論し、或は文藝を品隲し稿の積んで筐底に存するもの數十篇。乃ち中に就

きて十數篇を擇びてこゝに一書を爲しぬ。もとより盛代の文運に貢獻するに足らざるべしと雖も、或は以て他山の石たるを得るものなしとせむ。おもふに彼の危険なる思想は、論壇に於ては既に勢力を失へるに似たれど、しかも哲學は直ちに民心を支配せず、事實は理論に後れて存じ、今に迫んでなほその流弊煩る少からざるが如し。本書藏むる所の思潮評論の如き、數年前の筆にかゝると雖、此點より見れば、却て時世に適

切なるものなくんばあらず。幸に讀書界の一眇を得ば余が願足れり。

明治三十九年春三月

白山御殿山房に於て

著者しるす。

## 凡例

一、本書收むる所はおほむね嘗て帝國文學、大陽、新小説、文藝界、明星、心の花等の諸雜誌及び萬朝報紙上に掲載せるもの。これを本書に收むるに就きて各當事者の快諾を得たるは余の感謝する所なり。

一、本書の中堅は云ふまでもなく思潮評論にあり。文藝小觀之に次ぐ。筆のすさびに至ては、その明記せる如く附録たるのみ。

一、本書の上梓に際しては、余自から校正の事に當れりと雖、匆忙の際、魯魚の誤もしは脱落の少からざりしは寔に遺憾とするところ。その甚しきものは卷末に

訂正したれども、なほ遺漏なきを保せず。又句讀點の誤の如きは竟に訂正の煩に堪へずして己みぬ。幸にして後日改版の機を得ば、庶幾くは完きを期するを得んか。

# 碧潮

## 目錄

### 思潮評論

美的生活論を読む……………一頁

謂ゆる新學風……………二一

新思潮論……………三三—八三

リニツエンの魔風……………三三

新ロマンチズム……………三七

本能至上主義……………四一

包圍攻撃……………四五

單刀直入……………四八

長蛇の陣	五一
外面如菩薩	五四
美か醜か	五七
價值轉倒	六一
烏合の衆	六五
何の主張ぞ	六八
奴隸道德の排斥	七二
馬骨先生	七五
人天の契合	八〇
續新思潮論	八三—一三二
はしがき	八三
アフアマッドとアールリマン	八六

人文發達の三大時期	九三
情の醇化と愛の哲學	九九
文明史の縮寫	一一〇
七丘城の文明と神の御國	一一六
近代思想界の分野	一二三

### 文藝小觀

短歌の詩的價值	一三三
批評と經驗と	一七一
崇高と可笑と	一八四
紫とみたれ髪	一九七
方丈記とそが人世觀	二一四

思潮評論

樂詩一体論……………二三八  
心の音楽……………二四八  
戦後の文壇……………二五六

筆のすさび

歌舞の曲……………二九八  
譯文二節……………三〇四  
配所の月……………三二三



### 美的生活論を讀む

(櫻牛君に與ふる書)

高山君足下、足下が該博の學殖と天稟の才筆とを以て批評界に立つや、論議縱横才華燦爛、情思兼ね備り、殆んど間然すべきなし。論ずれば悉し、争へば降し、群小口を噤んで走り且つ僵る。孤鴻ひとり空を翔るの概、實に文壇の偉觀たりき。既にして命を受けて西土に航し、深く文明の源流を極め、旁ら南歐に遊んで、雅典の舊趾を訪らひ、七丘城の古都を尋ねんとするや、不幸二豎の犯す所となり、未だ征途に上らざるに、雄圖空しく蹉跎し、湘南の清濱に病を養ふの人となる。宿望僅に達せんとして、又忽ち壞る。豈に人世の恨事に非ずや。余足下の昨今に想ひ到る毎に、暗涙の禁する能はざるものあり。



高山君足下、余の足下に於るや、親交あるに非ず。只同學の先輩として一面の識あるに過ぎず。而かもなほ足下の西遊を耳にし、又その病狀を聞くや、常に一喜一憂の止むべからざるものあるは何ぞや。嘗に同學の一俊秀たるを以ての故のみならず、又以て卓越せる文藝の評家として、あらず、文明批評家として足下を俟つが爲なり。

憂ふべきは文壇の現狀なるかな。悲むべきは當代の思潮なるかな。狹隘なる主觀主義あり、茫漠たる客觀主義あり、淺薄なる國家主義を云ふものあり、輕浮なる社會主義を口にするものあり。個人主義を説くものあり、人道主義を喋々するものあり。然れども只是れ云ふのみ、唱ふるのみ。眞に之を知り、眞に之を信じて而る後之を推奨するもの幾人ぞや。試みに彼等に向て人生の旨趣を問へ、文明の意義を質せ、能く答へ得るものあるべきか。たまく之あるか。只々因襲的ならんのみ、

移殖ならんのみ。英に帝國主義あり、我亦之なかるべからず。獨に社會主義あり、我亦之なかるべからず。是れ彼等が思想の旨目的繼承を代表すべき恰好の形式に非ずや。此の如くにして一代の思想は惑亂せり、正邪混交せり。保守主義は進取主義と争ひ、佛教は基督教と争ひ、專制主義は社會主義と衝突し、一伸一縮、一盈一虚、當代の民衆をして適從する所なからしめんとす。豈に思想界の危機に非ずや。豈に寒心すべきの極にあらずや。此時に當り、人文發達の史に通じ、又思想界の現狀に明なるの士奮發一番、闔國の民衆の爲に開悟轉迷の努力を爲すに非んば、思想界の前途亦殆い哉。學者は理義の穿索に専念して世情に疎く、又一世を敵として奮闘するの熱血を缺き、熱血の士救世の念ありとすとも、惜むべし。思索冥想の力に乏し、詩人的情熱と哲理的頭腦とを兼有し、而も文明史家を以て任ずる足下、何ぞ進んで此重任に當

らんとはせざる。余が足下を目するに文明批評家を以てして足下の爲に喜憂する所以のもの實に足下が此重任に堪ふるの人たるべきを信するが故なり。之れ余一家の望たるに止らず、恐くは同人間の興望たるが如し、足下の責職も亦重からずや。

「汝自身を知れ」疑もなく是れ人世の第一義なり。然れども自己の眞價を知らざるもの、從てその天職を辨へざるものは管にモリエールが喜曲の主公のみに止らざるなり。人各天稟あり、之を棄つるを天を褻すと云ふ、聰明なる足下は自から能く知るべし。乞ひ問はむ、吾人が足下に擬する所は足下をして天を褻さしむるものなるか。

足下よ、余をして憚なく言はしめよ、足下は感情的の人なり。然れども「我が袖の記」の足下は又實に時代精神論の足下なり、智的人なり。燃ゆるが如き情熱に兼ねるに冷靜なる推理力を以てす之れ余が沈痛

なるべき批評家を以て足下を待つ所以あり。足下よ、余を以て妄に感情を賤むものとなす勿れ、感情の價値は余も亦知れり。人世に光明と春風とを與ふるものは感情に非ずや。慈母の愛は醫學の及ばざる所によくそが愛兒の疾病を知り得べし。さはいへど智に導かれざる愛は却て愛兒を殺す事あるに非ずや。神は愛なり。然れどもさながらなる愛は神に非ず。全智に伴うて初めて神なり。主我的なる極端の主觀主義が批評に適せざるは抑も之が爲にあらずや。曩に足下が書を作て嘲風君に寄するや、早くも足下の主觀主義に傾けるを疑うて、その弱點を批難したる批評家ありき。而も吾人は之れに賛する能はざりしなり。所以は如何、吾人は飽までも「文藝評論」の足下が健在を信じたればなり。文明史の著者が健在を疑はざりしが故なり。人は單獨の生活に非ず、又決して心的のみの生活にあらず。されば境遇の推移と身

體の變化とはその精神上に大影響あること些の疑問を容れずと雖  
足下は狹隘なる純主觀的人たるには餘りに智的人たるを思ひ  
しが爲なりき。

高山君足下、足下の美的生活論が出づべき由は余嘗てよりきゝぬ。そ  
の名を聞いて既に豫期する所ありき而かもその豫期はわだなりき。我  
が豫期せし所の違へりしは毫も憾なし、只恐る彼の批評家をして先  
見の明を誇らしめんことを、又恐る足下の論議は却て時弊を長せし  
むるの憂なきかを。

謂ふ所美的生活とは何ぞ。糧と衣とより優りたる生命と身体とに事  
ふるの謂なり、本能の満足なり。人性本然の要求を満足せしむるとこ  
れなり、何が故に美的と云ふか。その價值絶對なるが故なり。これ足下  
の説く所にあらずや。足下は云ふ、吾人の目的は云ふまでもなく幸福

なり。而して幸福とは詮ずる所本能が満足のみと。幸福は果して本能  
の満足にすぎざるか。足下何ぞその論據を明にせざる。足下は眞にし  
か信ずとすども、これ吾人々類一般の所信なるか。幸福は果して本能  
の満足以外に存せざるものなるか。特に怪しむべきは足下の謂ふ所  
本能の意義なりとす。足下の言ふ所は世の謂ゆる本能に異なり、人類  
はその性質に於て下等動物に大同なり、巧妙なる言辭を棄て、赤裸  
々に告白するあらしめば、必ずや人生の至樂は、畢竟性欲の満足に存  
するを認むるならむと説くを見れば、恐くは本能とは性欲なるべし。  
吾人々類の幸福は竟に性欲に止まるべきか。余頗る疑ふ。吾人に智的  
道徳的要求ある事は足下亦肯なふ所。而して何を以てか之を本然の  
要求に非すと云ふか。その快樂が甚だ淡きが故を以て足下之を卻く  
可ならんか。足下はその論の根底を以て、只足下が信ずる所に置くが

如し。若し人ありてその所信を主張して、人性本然の要求は嘗に性欲のみならず、智的要求も道德的要求も亦然りと云はゞ、足下は何を以て之れを否定し得べき。此の如くにして美的生活論は満足せり。此の如くにして性欲満足論となりぬ。これ豈に幸福主義にあらずや。快樂主義にあらずや。性命説にあらずや。何ぞ故らに新奇なる名目を附して人を愕かすの要あらん。その立論は理由を與へざる足下の信條に過ぎざるなり。獨斷に過ぎざるなり。これ豈極端なる主觀主義にあらずや。感情論にあらずや。

足下は道德的判斷の價値を論じて謂へらく、道德は至善を豫想す。一切の道德的行爲は至善の意識と、これに遵うて外に現はれたる行爲の能く目的に合ふべき事を要約となすと。然れどもこれ道德的行爲と徳論とを混同せしものに非ざるか。道德的行爲に於て動機の重ん

すべきは勿論なりと雖、必しも至善の意識を要すべきに非ず。至善の意識とは何ぞ。究竟之れ道德的意識を檢査して推理的にその旨趣を論斷せし理論のみ。愛國者にして國に殉ずる事が當然の道なる事を知らば、その行爲の道德的たるに害なきなり。何ぞ必しも至善の意識と云はんや。何ぞ必しも道德の原理を知れと云はんや。これ我が爲すべき所なり。これ人道なり。此の如くして足れり。足下は楠公の死を以て、管公の思賜の御衣を拜せしを以て、鳥の鳴くが如く水の流るゝが如しとなす。足下如何なる證權によりて當事の諸公に四恩の觀念なかりきと斷せしか。若しそれ目的論の智識と、至善の意識と、何が故に道德的行爲に缺ぐべからざるものなるかは、余が逆まに足下に問はんとする所なり。足下説あるか。希くは與り聽かむ。

足下又道德と智識との價値が相對的に過ぎざるを説く。洵に然り。然

れども、その辨證の法何ぞ奇妙なる。足下は言ふ、道德の一方便に過ぎざるはその極度の無道德に存するを見て明なり、道德は善を奨勵す、而して戮力を要す。戮力とは障害を排するなり、善の障害は惡念なり、善を行ふもの既に惡念を豫想すとせば彼は多少惡人たるなりと、此の如くにして足下は道德の價値を疑へり。然れども戮力を要する道德は何故に賤しむべきか。善を行はんが爲めの内心の戮力必しも惡念の排斥なりと見らるべきか。吾人の見を以てすれば戮力は必しも惡念の排除に非ず、戮力は道德の満足を得んが爲になさるゝにあらざるや。只これ満足を得んが爲めの方便のみ。満足の爲の戮力、何ぞ高價なりとせん。満足なき所即ち苦の存する所。苦を去て樂につく。豈人性本然の要求に非ずとせんや。足下が以て絶對の價値を有すと爲せる性欲の満足と雖、戮力なくして買ひ得らるゝものならんや。げにや足

下の云へるが如く、智識は疑問の集積のみ。一疑僅かに解けて一疑新に生ず。しかも吾人は疑問の集積せる宇宙に生を受け、理性の力を賦與せらる。たとひ終極の解決は直ちに得難しとすども一疑解け去りてこゝ暫くの満足を買ひ得べくんば、座して疑問の爲めに安心を得ざらんにいづれや。

高山君足下、足下は謂へらく、吾人の本能なるものは云はゞ種族的習慣なり。幸にして後代に生れし吾人は、無念無爲にして満足を享受するを得と、あゝ果して然るか。吾人甚だ惑ふ。鳥は無心にして歌ひ勞せずして満足すと、眞か。蜜蜂の飛ぶや満足し、和樂して飛ぶものなるか。あらず。生物學者の説を信せしめよ。彼れはその種族の維持の爲めに、その生存の繼續の爲に、營々として終日勞するにあらずや。鳥は欣々として飛び、嘻々として歌ふと云ふか。あらず。彼等の飛ぶや、餌を覓め

て性欲の満足を得んが爲めなり。是れ亦戮力にあらずや。彼等たゞ満足して勞せずとするは、竟に詩人が想像に止るに非ずや。よし、かりに彼等に勞なくして樂あり、本能に満足するに止るとすとも、吾人に於て果して如何。姑く進化論の歸結を許せ、吾人は悠久の時代を経て下等なる生類より轉展進化せしものなり。その下等生類より上進するに從て或る性能は退き、或る性能はいよゝゝ發達し來る。人類に於て尤も退きしものは、驢騾の一部と本能とこれなり。尤も進みしものは、腦とそが靈妙なる作用となり。動物は本能的に天候を卜知するを得るものあり。吾人の之を知るや、智により、天文により、數理による。動物は本能的に、食餌の良否を辨じ、人は勞して而して之れを知る。彼に疑問なし。安んじて命に從ふ。此に思想あり、智識あり。憂愁長へに存ず。悲むべきか、喜ぶべきか。本能的な生活獨り絶對的の價値を有すとせば、人

間の命運も亦憐むべからずや。天には光、地には暗、あゝこれ空想の迷に過ぎざるか。パールの谷は、竟に涙の泉なるか。本能の最も少き人類は大宇宙の繼子なるか。個中眞意あるが如し、否か。美的生活論は本能的な生活論なりき。然れども、足下はその嘲殺せる智識及び道德の爲めに活路を與へて曰ふ、若し本能以外の事物と雖、その價値の絶對と認めらるゝものは、亦美的たるを妨げずと。是に於て道德その物に絶對的の價値ありと認むるものにとりては、その生活は美的たり。智を求むるものにとりても亦然り。智識と道德と、相對的の價値あるに過ぎざるものに精進するの徒、是に於て初めて生色ありと云ふべし。足下の才筆、擒縱何ぞ自在なる、活殺何ぞ自由なる。寛大はこれに止まらざりき。儉吝、錢貨を貯ふるの外、他事を知らざる守賤奴も、亦足下の大慈大悲により救はれたり。あゝ美的生活なるかな。先天的盜癖あるものを

して盗ましめよ。先天的殺人犯者をして血を雨らしめよ。色情狂をして獸欲を縦にせしめよ。彼等にとりてはこれ美的生活たるなり。絶對的價値あるなり。貧奴錢に殉じ、實業者利に殉じ、かくて各自家の要求に満足せよ。究民は食を得るに道なく、貧者は衣なきに苦しむ。而してその自家の満足を得たるものゝみ、胸に王國を見るあらむ。かくて美的生活は個人主義なり、不平等主義なり。殘忍ならずとせんや。淺し薄ならずとせんや。足下よ、寛大極れる美的生活主義は、果してよく一般人類の幸福たり得べきか。各人にとりて目的は幸福なるべし。しかも此主義は各人自家の幸福を與へ得て、衝突闘争なからしむるを得べきか。吾人と云ふ勿れ、人世といへ。

高山君足下、足下願くは余を以て足下の意を悉さるものとなす勿れ、たとひ紙背に徹する底の眼光なき迄も、なほ余は足下が立言の眞

意を了せざるにあらざるなり。然れども苟も世道人心の爲めに謀らんとせば、當にその論議の弊の極る所を三思せざるを得ざるべし。足下の言説は智識に溺れ、道德に耽り、而して人生の歸趣を閑却せる冠履顛倒のものをしてその昏睡より覺めしむるを得む。然れ共聰昧相半する一代の民衆の爲めに蒙を啓かんが爲めとしては、少しく過ぐる所なからずや。足下は云ふ道德も極る所は無道德にありと。又云ふ、誤て萬物の靈長と稱せられてより、人は漸く其動物の本性を暴露するを憚かり、求めて虚偽の生活をなす。究竟これ知と徳との爲のみ。二者果して何の用ぞと。這般の言實に至理の存する所にして、又危險の伏する所に非ずや。余が美的生活論を讀みて憂ふる所是なりき。自家の小憤を行るを以て能事畢れりとする、賤むべき文士をして之を云はしめよ。余はむしろその聰明を過賞するに吝ならざるなり。足下に

して之れを云ふ。余頗る恐る。足下願くは之れを願へ。  
 足下はまたウイーを説かざりき。よし足下の説をして非難なきもの  
 たらしめよ。道德をして方便にすぎざらしめよ。なほ吾人はその如何  
 にして美的生活に到るべきかに感ふなきか。余が足下の説を讀みて  
 感ずる所なほ多し。然れども今は姑らく措き、翻て足下と共に憂ふる  
 所あらんとす。

高山君足下、足下自ら云ふ、吾人の言甚だ過ぎたるものあるが如し。然  
 れども時弊に憤る者の言は、自から此の如くならざるを得ざるなり  
 と。之れあるかな。余は足下の説が甚だ過ぎたる所ある所以を知れり。  
 然れども、足下謂ふ所時弊とは何ぞ。道德を云ふもの、徒に拘々又缺々、  
 人を以て天を律せんとするが爲めなるか。然り思想界の一部、確かに  
 如是弊實の存するを見る。然れども之れを全般に察せよ。時弊は餘り

に理義の詮義に煩はしきにあるか。道德萬能の謬信にあるか。余が看  
 る所を以てすれば、時弊は寧ろ知識的要求の弱小にあらずや。寧ろ道  
 徳の缺乏に非ずや。當代の弊は腦病にあらずして食傷にあるが如し。  
 知に走ると云ふか。彼等の知は生硬の知也。之を得るや嚙むに非ずし  
 てのみこむなり。理解するに非ず摸倣するなり。徳煩はしと云ふか。彼  
 等の徳は徳に非ざるなり。徳の談義に過ぎざるなり。足下の言ふ所の  
 如きは僅かに小部分のみ。惜むべし。足下の時弊を見る餘りに狭かり  
 き。

彼は理を好むの人なり。之を諫むる理を以てせよ。彼は情に走るの人  
 なり。和むるに情を以てせよ。時弊を救はんと擬するもの。須らくかゝ  
 るべきなり。摸倣の知識と卓上の徳論と、もし思想界の弊なりとせば、  
 足下何ぞ之に教ふるに眞の理と眞の徳とを以てせずして、彼等をし



て突飛、知徳の域を超絶せる至美の生活に遊ばしめんとはする。急劇の變、彼等をして白癡と化せしめずば幸なり。惜むべし足下の云ふや餘りに高かりき。

既に摸倣の民なり。高潔の理想なく幽遠の理義なし。その趣味や平凡なり。下劣なり。肉欲の満足するや能事了る。彼等は戀愛を口にす。而かも足下の云ふが如く身体と生命とに事へむが爲めに非ず。その解説の爲に身命を犠牲とするが如きは彼等の知らざる所なり。心中あり自殺あり。小新聞の三面記者先生之れが記載に忙殺せらると雖、その死するや金につまればなり。その情死や餘義なさの結果たり。此輩の心事何ぞ樂地につくにあらんや。何ぞ美的生活を全うすと云はんや。此の如くにして足下本能至上主義を説く豈危険ならずとせんや。足下何ぞ趣味の高上を教へざりし。惜むべし足下の説や未だ悉さゝり

き。

既に空談の民なり。盲從思想なり。繼承思想なり。足下及び竹風氏等が獨の天才ニーチエの説を評するや、彼等の多くは忽ちニーチエニストたり。而もニーチエの懷疑思想が如何なる點に立論の理由を有するかは彼等の知らざる所なり。

その深邃なる洞察力が如何に現代文明の弱點を捉へしかは彼等の關知せざる所。彼等は天才が煩悶苦學の餘に得來りたる妙想を以て茶話の漫言と同一視し、讀下一番直に了し得たりとなす。笑ふにたへたらずや。此の如くにして理に飽くと云ふか。吾人は云ふ所を知らざるなり。而して足下此民衆に教ふるに知識相對價值論を以てす。足下の眞意を誤らざるもの幾人ぞ。惜むべし足下の之を云ふや餘りに早かりき。

高山君足下、余が見る所の時弊は、此の如し、足下の所謂道學先生の弊も或は少からざらん。然れども彼の智識模倣主義の弊も亦極まらずや、人は云ふ現代何ぞピルヅングス、フ井リステル多きやと、吾人をして之れに加へしめよ何ぞクルツールフ井リステルの充滿せると足下何ぞ椽大の筆を揮うて彼等を難せざる。彼等に酬ふる何ぞ蒲鞭にして足らんや。敢て足下に問ふ、高教を惜むなくんば幸なり。頃者宴遊あり余此見を持して同人に語る。黙するものあり、肯くものあり、適ち足下を知るの士、三伍私語するを聞く。云ふ、ワス、フヒロツフヒ、イスト、イスト、ワス、マン、イスト、足下の近狀悲むに堪へたりと、余何の語たるを解せず、附記して足下に告ぐ。

よ。

炎風霖雨交も到り近日の天候頗る人に可ならず。足下願くは自愛せ

謂ゆる新學風

○文、藝界の近時、輕佻なる個人主義の跋扈する何ぞ甚しき、狹隘なる主觀主義の流行何ぞ盛なる。唯我主義の聲なり、惡しき感情の叫なり。唯我主義何ぞ咎めむ。感情何ぞ厭はむ。人は古往今來一面に於て唯我的なるに非ずや。神の愛は人を罪惡に濟ふにあらずや。賤むべきは淺薄なる唯我の聲なり、ハイカラ文士の唯我なるかな。惡むべきは矯飾せる感情の叫なり、サタンの惡しき感情の叫なるかな。○あゝ感情の叫、あに恐るべく親むべきの極に非ずや。時として天使の福音たり。時としては惡鬼が咒文たり。大恩教主が衆生濟度の本願なり。理想にあくがるい詩人の心なり。一旦の知己に感じて又功名を論せざる國士の意氣なり。喜ぶべからずや。黒龍江畔支那人を殲し

たる魯人の心なり。血に飽ける猛獸の情なり。模倣せる移殖せる而して危険なる生硬の思想を振り回し、蒙らしむるに奇怪なる文字を以てして、鬼面人を感し、只自家の快をやり、一代の人心を攪亂して、恐れざる文人の狂熱なり。恐るゝに堪ふべけんや。

○模倣なるかな。模倣なるかな。藝術の作品を模倣する者は著作権の侵害者として法律に刑せらる。學術を盗み、主義を盗むもの、知らず如何の罰にか當るべき。然り吾人は敢て盗むと呼ばむ。學理を奉ずと云ふか。何ぞ一度は之を理解し、批判して自己藥籠中のものと爲さる。然らずして、聽く即ち傳ふ、恰も鸚鵡が人語をまねるが如く、猿候が人の動作に倣ふが如くんば、作品の模造、權利の剽竊と相去る幾何ぞや。

○嘗て我國民をもてお祭りのと罵りたるものありき。吾人は當今の

文壇を評して神興主義と呼ばんとす。必しも敏神の念あるに非ず。お祭りの熱にうかれ、さし機嫌の興に乗じ、神躰を奉じて狂するのみ。これ神興連の舉動にあらずや。學理を奉ずるにも非ず。主義を躰するにも非ず。只自家の快を縦まいにせんが爲に、鬼面を被りて狂奔する所、眞におみこし連に似たらずや。彼等に訓言あり、曰ふ、世間の喜ぶ所、俗人の敬ふ所のもの、仰で以て神符とせよ。只是のみ、自家がよくそを論議すべき學殖と技倆とありや否を問ふことなきは無論とす。

○先に橋牛子あり、次て竹風氏あり、共に獨の鬼才ニ「チエ」を論評す。二氏の學殖もとよりその適任なるべし、吾人敢て議せず。只これより後、「チエ」「アニス」は、お神興進の奉ずる所とありぬ。一にも、「チエ」「二」にも、「チエ」之を口にせずんば、文士ならぬかの有様なり。「チエ」萬歳の世なるかな、しかも無意味なる萬歳の聲なるかな。かく

て熊公の萬歳を叫ばしめよ、かくて八公の萬歳を吼えしめよ、吾人はその間に價值の輕重を知らざるなり。他の方面に於ける社會主義萬歳の聲と共に、勞働者萬歳の流行語どもに、後年のコメヂストが爲に好個の資料を獻するを得べきなり。彼等の文學に忠なる衣と食とより優るべき生命と身軀を擲て、喜曲の爲に犠牲たらんとす。豈に驚くべきか。いせの渴仰者に非ずや。

○萬物流れ萬法移る。變遷と開展とは宇宙の大法なり。思潮の變移亦この埒外に脱するを許さず。平穩沈靜は思潮の貯水の如し、久しからずして腐敗を免がれず。鬭争は萬物の父なり、唯理主義をして一世を支配せしめよ。茲に唯物説起らん。兩説鑄をけづり論争結んで解けず。人に信仰なく定見なく民衆適歸する所なけむ。是に於てか懷疑説出でむ。懷疑説又思潮を凝滯せしめて、是に新學説成らむ。此の如きは思

想發展の形式として歴史の教ふる所に非ざるか。一代の思想沈滯腐敗の時に當り、天傑人を降して鬭争破邪の任に當らしむ。ニーチェの如き實にその人か。此人や破壊の命を佩びて人園に降る。哲學と云はず、科學と云はず、歴史となく、宗教となく、凡てを壊り盡さずんば休まざらんとす。彼の精進や不退轉なり。勇猛や絶倫なり。神の知に兼ねるに悪魔の情を以てす。神の知なり、故に能く事物の底を洞察してその弱點を衝く。悪魔の情あり、故に根底まで打破せずんば止まず。思想の滯滯を破り之に活氣を興ふるものは彼の思想ならずや。然れども能く彼の思想を消化し得る讀書力なくして之に觸れんか。孩兒利劍をして身を誤らすんば幸なり。借問す、ニーチェア、ニステンよ、卿等は眞にニーチェの説を知るとなすか。その思想界に於ける地位を知ると云ふか。知るどは文字を讀むの謂に非ざるなり。さいかぢりの義に非

ぶるなり、卿等の高襟を去り、卿等の虚飾を退け、而る後、卿等の好むなるアルツィマンシリツヒに吾人に答へよ。

○神輿連諸氏よ、我れ過てり。足下等より答を得んことは、なほ死せる千松を待つが如けん。我は狂奔にいそがはしき卿等に無益の問答を望みたる不明を謝せん。夢が浮世か、浮世が夢か、をば互の見に委せん。とにも角にも卿等と吾人とは夢とうつと境を異にするが如し。さらばよ、神輿連諸君。ルヴネーザ、ヴォー、ムートン。我は去て眞摯なるべき、所謂ネオ、ロマーンチツケル諸氏に趣かむ。

○新ロマーンチズムとは何ぞや、單に形式主義に反抗するの謂か。一切の科學を否定し、哲學を排斥するの謂か。抑又帝國文學の一記者が言ふが如く、ニイチエを説き、トルストイに讚するの謂か。最後のものは、是か博愛主義と個人主義とを合せて本尊とするの意にあらす。

や、觀音と八幡一齋に合せ、祭りて奉戴する、お祭りに非ずや、神輿主義に非ずや、既にお祭りのみ、一時の喧囂のみ、長きものは神明の夫れが十五日に過ぎず。宵祭りの雨に終らぬば、まだしも幸なり。最初のもの、是か利器を提げて時勢に抗す、先づその利劍が徒に人をあやめざるかを一考せよ。中間のもの、眞か、何ぞニイチエと共に本能無意義主義を云はざるや。徒らに本然の要求を云々するの愚を學ばんとするや。

○ベダントリー、フランセーズに反抗して文藝の爲に萬丈の氣焰を吐きたるは、前世紀の始獨の少壯文士が舉動にあらざりしか。所謂ロマンチズムはかくて文學中心主義なりき。藝術もて人生の中核たらしめんの主義なりき。知らず、新ロマーンチツケル諸氏、卿等の謂ふ所、新學風とは何ぞ。若し諸氏の意が形式主義、實用主義の弊に堪え

す、して、爰に、文、藝、中、心、主、義、を、主、張、し、理、性、と、感、性、と、の、調、和、的、遊、戯、の、中、に、安、立、の、地、を、求、め、ん、と、す、る、に、止、ら、し、め、ば、即、可、な、り、何、ぞ、極、端、な、る、個、人、主、義、を、標、榜、す、る、の、要、あ、ら、ん、何、ぞ、本、能、的、生、活、と、云、は、ん、之、れ、理、性、の、蔑、如、に、あ、ら、ず、や、之、れ、科、學、哲、學、の、否、定、に、あ、ら、ず、や、  
 ○若し然らずして、人生を擧げて懷疑に走らしめんとするか、何ぞ更に奮發激勵科學の根本的弱點を擧げて、之を破壊せんとはせざる、何ぞ哲學の虚妄を論じて、之を究地に追迫せざる、理の以て由るべきなく立つべきなく、只波瀾を喜び、反抗を樂むとせんか、狂のみ暴のみ記せよ、巧利は今に於て時代の大イドルたるを、感覺的昏睡よりさめよ、而して汝は國家の中に存するを悟れ、必要の鐵鎖は汝を縛するに非ずや、(Schiller)然り人生は此間に於て解釋の道を求むるの外なきなり、理性は命じて曰く、我に理由を與へよと、理性的存在にして理性を

否定すと云ふか、否定とは何の義や、空氣を吸うて、空氣外に生きん事を望み、水に棲んで水を滅せむとす、吾人は癡狂院設立の爲に更に誅求に苦まざるべからざるを憂へんなり。  
 ○本能至上主義なるかな、人性本然の要求は、本能の満足なるか、本能なるもの果して何ぞ人類ありて以來、史に於て六千年科學によりて三萬年宇宙は無限なり無究なり、比し來れば、三萬年亦昏睡の間にあらざるや、況んや六千年何の意義かある、此の如き本能を以て、人性の本然とす、愚も亦甚しからずや、(Nietzsche)新學派の氣焰、先生何ぞしか、  
 叫ばざりし、之れ天才の聲なり、此の如くにして極端なる個人主義甫めて立するを得ん、純主觀主義初めて意義あるを得む、此の如くにして萬事非なり、此の如くにして萬事是なり、諸先生よ、現時の文壇果して大反抗の氣魄ありやと問ふ事を休めよ、諸先生寧ろ自から皆

否皆是を咆哮する大氣焰なきかを怪めよ。

○純主觀主義なるかな。自稱氣焰家なるかな。かくて學術は要なきなり。かくて哲學は贅物なり。讀書の勞なきなり。思索の要なきなり。只自家の氣焰を吐け之を第一義となす。淺酌低誦の餘興可なり。「解し難き理に逢着して究するとき自家ひとり慰むる底の申譯亦可なり」むつかしき事をやめよ。之を輿の手となす。理の極めて解し易くさまで勞せざる書は讀で可なり。之によりて本然の要求を得る事あればなり。理義の高尙なるを味はんとして爲に多大の勞を爲さんよりは寧ろ理義解せずして勞なからんを可とす。人世は貸借の外に超越すれども苦樂のさし引勘定に止まればなり。是れ美的生活論を誤解するもの。當に云はんといふべき所ならずや。

○樗牛子の美的生活論の旨意のある所吾人了す矣。然れどもその説

くや條理果して得たりとするか。その本能的な生活論何ぞ卑しきや。何ぞ無慈悲なるや。然れ共もし深くその由て來れる所を究め、その目的の那邊にあるかを見、而る後之を一代の俊才が胸裡鬱勃たる不平を訴ふる抒情の文とし見ば、吾人は只子が爲に泣かんかな。人生の險難なる何ぞ甚しき。人間の命運何ぞ悲慘なる之を想へば吾人は樗牛子に向て正面に理を争ふに忍びざりしなり。我は反省を促すの外爲す所を知らざりしなり。是を以ての故に、我を意氣地なしと云ふか。我は忍ばん無氣焰家と云はんか。我黙せん。理を解せずと云ふか。我斷じて服せし。

○自稱氣焰家をして美的生活論を唱へしめよ。我は此時正にその矛盾を罵らんとす。弊の極る所を憤らんと欲す。

\* \* \* \* \*

△彼は、理の人なり。理を求め、止まず。理に魅せられて、彼は、人生の歸趣を忘れぬ。理性何の爲ぞ、人は何ぞや、彼は、睡れるなり。世に此の如きものあり。彼をして、美的生活論を讀ましめよ。

△彼は、求道の人なり。道を求めて、止まず。他道を走るものあり。彼れ、忍びざるなり。己に、つが、ん事を、獎む、聞か、れざるなり。怒て、之を、罵りぬ。彼は、目ざす所に、近けり、而して、己に、聞か、ざりしもの、既に、茲に、ありき。彼は、人生の目的を、忘れしなり。彼をして、美的生活論を、讀ましめよ。

△彼は、情の人なり。山に登らんとす。安きを、擇んで、是に向ひたり。道は、狭かりき。彼に、從ふもの、甚だ、多し。或は、荆棘に、傷き、或は、谷に、墜ち、墜たるもの、互に、生を、争ふて、修羅の、巷を、現じぬ。彼は、既に、山嶺に、あり、知らざるなり。彼等は、生を、求めて、生を、失ひぬ。あはれ。

△彼は、天才なり。能く、時機を見たり。彼は、俊傑なり。能く、時務を知れり。

衆人を導きて、樂地に遊ばしめんと企てぬ。彼の命運は、悲むべし。暗黒となりぬ。是よりの後、彼は、情と理との間に、迷ひぬ。之を、彼が、思想の系圖に、求むるに、彼の、祖父に、多感、多恨の人ありき。狂して、死しぬ。

### 新 思 潮 論

其 一

#### リユツツエンの魔風

千駄山房の、猛將、筆陣を、撒して、西睡に、下り、早稻田の、老雄、亦、論鋒を、收めて、育英に、隠れて、より、批評界の、波瀾、久しく、揚らず。世は、徒らに、筆端の、しがらみ、墨汁の、餘沫、淺薄、無意義なる、小せり。合に、非ずんば、走獸影なうして、空しく、銃聲を、聞きたま、く、歩武堂々、數千萬言の、立論を見、る。ことなきに、非ずと、雖も、しかも、一代の、思潮に、觸るゝもの、に至ては、



ただ、甚だしく、文藝界と云はず、思想界といはず、人は小康に安んじて、徒らに泰平を夢みにき。

花落ち紅葉散じて春秋うつること十餘、思潮流れぬ。時は經ぬ。こゝ聖代の三十四年、明皇の御宇、夏八月、行人あへぎ、草木うなだるゝ三伏の候。おもひきや、はしなくも喚聲、文壇の一隅に揚りて、反響四方に起り、久しき沈滞こゝに破れて、評壇忽ち活氣を帯び來らんとは、知らず喚叫何の聲ぞ。そもいづれよりか來れりし。

之を思潮の變遷に看るに、近世に於てペーコンを先驅として起りたる經驗派と、デアカルトに由來せし唯理派との幼稚素朴なる論戰結ばれて解けず、遂にヒュームが懷疑說となりて、人心歸適するに所なかりしとき、大哲カントの批判哲學書出で、能く兩者の長短を補綴し、疑義を解決して、思想界統一の基礎を固め、フヒヒテ、シエリングを

通じてヘーゲルに至り、理性哲學の霸業成り、之ととも、その克己的道德も亦一世を風靡せし觀ありき。然れども、世に萬年の帝王なく、萬物流れ、萬法轉ず、鬭争は一切の父母。一疑釋け去つて、疑義更に生ト、カント派哲學の攷究いよく盛にして、學者の見解再び區々。その純理の方面に論争の起ると共に、實踐的道德的理論も亦動搖し、初め倫理思想は復懷疑的狀態を呈し來れり。

想ひおこす、希臘のむかし、思想界の混亂その極に達するや、懷疑的思想は彼のソフニスムスを生み出したることを。

又想ふペスタロッチ、コメニウス等が教育主義を受けて、哲理的文學の横行せしとき、これが反動として感情的文學起り、二者鎬をけづりて、戦正に酣なりし時、ルソーのローム、ナチュレル(自然人)説出でたることを。彼れ自然をもて理想となし、經驗をもて師傳となし、ひたす

自然に還れと叫んで本能的活動を推奨し、史的発展を無視し、良心を賤しみ、先哲の聖訓を蔑視したり。ゲーテがメフヒストフエリースに假りて描きし所のもの正にこれ。

思想の變轉に伴ふて起りしもの之を先にしてソフホストあり、之を後にしてルツソーありき。知らず次で來るべきは何者ぞ。

ルツソー、死して後百年、怪星一夜レツケンに墜ちて、鬼才を生じ、よ  
り、一陣の狂風リユツ、エンの野に起り、本能主義が再び全歐の草木  
を風靡すること二十餘年。今や遙かに絶東に及んで、我騒壇を動かし  
そめ新ロマンチズムの叫となりて、將に萬丈の光焰を放たんと  
すと傳ふ。強弩の末勢、魯縞を穿つ能はずと云ふことを休めよ。これ一  
代の思潮に對する反動の聲にあらすや。誰か計らん、こゝに久しき低  
氣壓は、爲に強風豪雨を呼び來つて、一大波瀾を生せんことを苟も思

潮の推移に着目せんもの、何ぞ之を雲烟過眼視するを得んや。

其二

### 新ロマンチズム

新學風の聲は帝國文學の雜報記者によりて先づ舉りぬ。されば、その  
由て來る所は實に樗牛竹風二子のニイチエ論にあるが如し。然りと  
雖も、一は紹介なり、他は批評なり。未だ自らニイチエ主義を標榜する  
ものあらざりき。

當時帝文記者は叫んで曰く、嘲風、樗牛、竹風、等期せずして殆んど同時  
に、一種の新ロマンチズムとも稱すべき學風を思想界に鼓吹せんと  
す。之と共に、記者等の筆端漸く氣焰を生じ來て、現代學風に慊焉  
たるを明にし、學者を難じ、教育家を嘲り、當代を目しては倫理教育全

盛の時代となし、淺薄なる形式主義方便主義が跳梁する社會となし、我が學者の輩の價値を疑うては、その明快確乎たる結論の民衆に教ふべきものなきを痛罵し初めたり。然れども、これなほ新學風の先鋒とし見るべきに非ざりき。

謂ふ所新學風の急先鋒はそも何ぞ。高山樗牛の美的生活論これなりき。吾人が甫めてニーチエの説に似かよひし本能至上主義の聲を耳にせしと、亦實に此にありしなり。しかも我が此に對する見解は大に他に異り。是を以て直にニーチエ主義宣傳の叫となさず。只だ爛眼なる樗牛子が、我が思想界の一隅に蟠まれる時弊に憤る所あり。故らに奇矯の言を爲し、に過ぎずと思へりき。されば、我が樗牛に告げしものものは、敢て理義の論争を試みしに非ずして、好個批評家の資格ある樗牛子をして、徒らに自ら下してかいなでの論客の群に入り、一時

の感慨に激せられて、一代の人心を指導すべき文明史家の本分を忘るゝことなからんを望み、その反省を促すに止りしなり。さは云へ又一方に於ては、人間究竟自然の隷たり、時代の子たり。意志の自由を叫ぶと雖も、自由の本能を誇ると雖も、畢に境遇の左右する所たるを免かれざるを信ずる我は、聰明なる樗牛子をして、かゝる立論を爲すに至らしめし理由を想うて、人間の命運を嘆ずるを禁じ能はざりしなり。

然るに、帝文記者は是を解してニーチエ的本能主義の唱道となし、以て天溪と争へり而して樗牛獨り冷然たり。謂へらく、ニーチエは天才、及ぶべからず。我をして長へに我たらしめよと。よし。我亦帝文記者の輕卒に殉じて、敢て妄りに累を病餘の才人に及ぼさんとを希はず。只幸に帝文記者の言により、美的生活論は直に移して以て記者の説と

爲すを得べく、ニーチエの宣傳と見るを得べく、又謂ふ所新學派の論たり得べきを知り得たるが故に、今は姑く新ロマンチストの論として之を評論し、併せて之に對する他の評議を伺はんと欲す。この時此際、我は懸念なく、忌憚なく、縦談横議するを得む。あゝ何等の幸ぞや、讀者願くは一篇の美的生活論の爲に、反復絮説するの愚を咎むる勿れ。これ謂ふ所新學風の急先鋒たるを思へ、ニーチエ主義の繼承たるを思へ、而して實に時代思想の反動として重要な意義あるを思へ、彼の妄りに自ら高うして、美的生活論の如きは識者の一顧を値せずとなし、而かも自ら精神界の原動者を以て居るものゝ如きは、その愚覺に及ぶべからざるなり。讀者願くは煩を忍んで我が云ふ所に聽け。

## 其三

## 本能至主義

美的生活論、あゝこれ何等の叫ぞや、樗牛子は自らそのニーチエに由來するを云はず、然れども虚心に公平に觀察するときは、その本能を尊で知識と道德とを斥くる所、何ぞニーチエの説に彷彿たる。謂へらく、吾人は何の目的をもてこの世に生れ出でたるか。そは吾人の知る所にあらず。されど、既にこの世界に生を稟けたる後の吾人の目的は言ふまでもなく幸福なるにあり。幸福とは何ぞ。吾人の信する所によれば、究竟これ本能の満足なるのみ。謂ふ所本能とは人性本然の要求たり、世の道學先生如何に巧妙の言辭を弄して辯ずども、如何に高遠の理義を附會すども、もし赤裸々にその所信を告白するの勇氣あら

しめば、必ずや人世の至樂は、竟に性欲の満足に存するを自認せむ。これ人性本然の要求たるが故のみ。如是人性本然の要求を満足せしむるもの、これを美的生活と云ふ。何が故に美的と云ふか。その價值絶對なるが爲なり。道德と知識とは、人類の特有にかゝると雖も、そは唯吾人が本能の満足を得んが爲に必要なる方便にすぎず。その價值を論せんか。前二者は相對的の値あるに過ぎず。後者のみひとり價值の絶對を誇るを得べし。彼はエキストラシクナリ。此はイントリシクツクナリ。世の道學者の爲す所、彼に絶對の値を認て、此が本然の要求たるを忘れ、先後を顛倒し、輕重を誤り、漫に知識を衒ひ、道德を誇り、而して知徳の共に本能の満足を得んが爲の方便たるを知らず。人生の歸趣に至ては茫然として思ふ所なし。朝露、かげろふ。人間五十年の短き生涯が、是の如く匆忙の間に勞し去らるゝを見ては、吾人豈に惆悵

たらざるを得んや。蓋し今の世にありて、人生本然の幸福を求めんには、吾人の道德と知識とは、餘りに煩はしく、又餘りに迂遠なるに過ぐ。人類の誤て萬物の靈長と稱せられてより、人は漸くその動物的本性を露呈するを憚り、自ら求めて、若くは不知不識の間に、そが本然の要求に反して虚偽の生活を營むに至りしなり。その此の如くならしめたるものは、實に人間をして萬物の靈長たらしめたる知識と道德とに外ならず。知と徳と、畢竟何の用ぞ。且つ夫れ道德は、至善を豫想す。しかもこれ道德的行爲の事實に非ざるなり。況やその善なるもの、之を爲すに戮力を要す。戮力とは何ぞ。惡念の排除に非ずや。善既に惡を豫想すとせば、善なるもの竟に殆からずや。戮力を要する道德は、賤むべきかな。本能の満足、すなはち美的生活に至ては然らず。その價值やイントリシクナリ。絶對なり。依るなく拘るなく、渾然として理義の

境を絶す。是れ安心の宿る所、平和の居る所、生生存續の勢力を有して宇宙發達の元氣の藏せらるゝ所、人生至樂の境、之を去て何れにか求むべき、人に知欲ありて真理に着到せむを希ひ、道念ありて善徳を修せんと勉む、是等欲望の達せられたる所、亦一種の快樂あるや論なしと雖も、しかもその快や極めて淡く、その樂や極めて輕し、月明の下高樓の上佳人を携へて芬芳の室に入り、名手の樂を聞くの至樂に比して果して如何、夫の道學先生の如き、もし眞に世道人心の爲に謀らんとせば、須く今日の態度を一變せざるべからず。」

是實に美的生活論の大要也、此に對する世評辯難はいかなりしか、請ふ是より述む。

## 其 四

## 包 圍 攻 擊

信言は美ならず、美言は信ならず。その美ならざるが故を以て、その告白の赤裸々なるの故をもて、一喝直に之を斥くるものに至ては、共に論ずるに足らざるなり、大道廢れて而して仁義あり、智慧出で、而して大偽あり、是れ豈に大膽なる危言にあらずや、豈に危険なる文字にあらずや、然れども此大膽、また危険なる説と雖も、その裡面に伏在せる眞意義に於て、また一面の眞理を包藏すとせば、その外觀の醜なるが爲に、恐るべきが爲に、その用を棄て、顧みざるが如きは、抑も腐儒の見にあらずや、美的生活論の出づるや、辯難攻撃一時に雨下し、評壇近時の一偉觀たるを失はず、しかも、その多くは、之を外側より、表面よ

り観察して、殆ど取に足らざるが如く考ふるに似たり。或はその大膽に喫驚して、一言の下に嘲殺し終るものあり。或は馬骨人言の如く、直にニ―チエが威力意志説の本壘に肉薄して、暗にその盲目的反動たるを罵るものあり。或は又その主旨に參して、之が改修補綴を試みるものあり。されど、その反駁や、左袒や辯護や、攻撃や、殆んど凡て謂ゆる文士の間に入り、思想界の重鎮をもて自ら任ずる學者若くは教育家の之を論ずるものあるを聞かず。これ我が帝文記者と共に怪訝にたへざる所なり。知らず彼等、その立論の奇矯に驚きて、空想家の粗笨なる感情論、一顧に値せずとなすか。文藝界の事、對岸の火災、關する所にわらずとなすか。本能主義が年少血氣の徒に歡迎せらるるとも、道德の九鼎爲に輕重を問はるゝに足らずとなすか。一陣の狂風、教育の巨木に累なしとするか。はた鷺鳥の足下に飛立つ迄、悠々自若たる近視

眼的沈着なるか。此の如くにして道德の事、教育の業、萬全なりとせば、兩者のこと亦氣樂なるかな。美的生活論に對して最初に出たる論難は大阪朝日紙上、浩々歌客氏の夫なりと聞けど、我れ未だ知らず。我が知れる限にては、夫れ長谷川天溪の夫か。天溪子の説は高山氏と全然その立場を異にし、正面より樗牛子が説を解釋し、眞に美的生活の名を値すべきものを説けり。樗牛子の説に對しては、その自ら云へるが如く、時弊に激して故らに奇矯の言を爲せしが如き所あるが故に、之を正面より解釋して論せんことは、我が賛せざる所なれど、さは云へ、この所説がいたく或る大教育家(?)の賛同を得たりと聞けば、試みに先づこれより聽かむ。

單 刀 直 入

天溪は先づ樗牛が謂ふ所本能の意義を疑へり。げにやその本能と呼びし所のものは、吾人が心理學、又は生物學上用ふる所の夫に異なるはもとよりなり。若し通常の意義における本能たらしめば、而してそれを極めて廣義に用ひしめば、豈に獨り論者が云ふ所、性欲のみに限らんや。知的欲求も亦本能に出で、道德的欲求も亦之に本づく。何の理由ありてか一を揚げて他を排すべき。若し又極めて狹義に嚴密に解して人類が動物的存在として、獸類と共に通じ有する物質的、生理的根基に出でたる性能の義たらしめば、何故にそが獨り絶對的、イントリンシクの價値を有して、智徳の欲求が相對的、エキストリンシクの

價値を有するに過ぎざるか。説く者之が論據を明にするを要す。加之美的生活論が、その立論の全般に涉り、此他幾多の理論的陷缺を有するはもとより明なる所。竹風が如何に強辨すども、如何に曲解すども、竟に争ふ可らざるなり。然れどもおもふ。これむしる樗牛が論を正面より解するが爲の弊のみ。樗牛の此論は宙外が云へる如く、時弊に對する風刺の文なり。危言なり。險語なり。樗牛に對して争ふべきは、その危言の果して當を得たるや否やにあり。なか／＼に時弊を長せしむるなきかあらぬかにあり。さもあらばあれ、文壇の一隅、思想界の一部、確かにかかる危言を値すべき弊實は即ち之れあり。知識と道德との價値は我決して疑はず。然れども此どもに本能、嚴密なる意義に於ける本能も亦あながちに却く可きに非ざるを信ず。世の道德を言ひ教育を云ふもの、動もす



れば二者を揚ぐるに過ぎてひたふるに後者を壓せんとす。樗牛が諷せんとし罵らんとするもの實に茲にあるが如し。此の點に就ては我れ樗牛に與す。されば寸を矯めんとせば尺を曲ぐる亦止むを得ざるや論なしと雖も、しかも現代に於ける、より大なる弊はむしろ知と徳との侮蔑にあるが故に、我は文界の小部分に横はれる弊を矯めんとして却て一代の大害を助成せしむるを憂ふること切なり、天溪は然らず、あくまで正面より論究して、更に眞に美的の名を値すべき生活とは何ぞやと問ひぬ。

彼れ樗牛に同トて、忠臣や、義士や、節婦や、孝子が道德的の行爲は、敢て道德的意識の顯著なるものありて然るにあらざる。そのかゝる意義ありて之を爲すと云ふが如きは腐儒の見のみと斷せしかど、又一方に於ては人間が知的道德的理想に向て精進するものなるを信じて謂へ

らく、この知的道德的理想を追求する人間の行爲が殆んど直覺的になさるとき、こゝに其外觀が美的として、現はれ來ると。さればその美たる所以は、只形式たり。その實質を叩けば理論たり。眞に美的の名に負かざる生活は、寧ろ人間本然の要求を斥けて理論的要求に向ふ邊にあり。樗牛が説の根本的謬見は、習慣的無意識的となれる人間の行爲を見て、之を本能に強解せし所に存すとなせり。知らず樗牛之に首肯するや否や。

其 六

長 蛇 の 陣

げにや、道德的または知識的理想を追求して、不退轉の精神飽くこと、を知らず、習竟に性となりて往く所爲す所、殆んど可ならざるはなく、

又その間殆んど戮力の意識なき圓融無礙の生活は眞に美はしき生活なり。孔丘が七十にしてこの欲する所を行へども則をこえずと云ひしが如きは是か。洵にこれ道德的行爲の極致倫理的の理想境實に理義を脱するが如しと雖も、しかも又不斷の戮力常住の工夫の結果ならくのみ之を直覺的となすは則ち可而して遂に本能至上戮力侮蔑の旨に合はざるを如何。

天溪が論の全からざる理の未だ盡さざるは此に止らざるなり。彼れ偏に知徳の理想が現はるゝ表面の形式を以て美的となし之に満足すと雖も、只だ外形の美のみを以て云はゞ豈獨り知徳の理想のみに止らんや。詩人がその空想の上に築きたるユートピアに憧憬して、人を忘れ世を遺れ而して毫も悔むなきも亦美的ならずや。宗教家が人間の八苦を見て穢土を厭ひ天人の五衰を悲んで淨土を求め圓滿

無垢なる當來の彼岸にあくがれて一向專念にたゆむなきも亦美的ならぬかは。何ぞ必しも知的と云はんや。豈に必しも道德的と稱せんや。藝術的宗教的理想を追ふもの亦皆然り。

彼此一切皆人性本然の要求に本づく而してかの戮力の輕侮は毫末も與らず焉。況んや又これ價值の絶對なるが爲めと云ふが如き、特異なる意義に於ける美にあらざるや勿論なり。

然れども此の如きは理やゝ到る者あるが如にくして愈々美的生活論の主旨に遠かる。宜なり樗牛が其才筆を弄して獨り嘯くや。曰ふ情激する時語逼らざるをえず。理絶するとき。理明なるを得ず。幾微言外にあり。囁嚅として唇頭に上らず。「理の精しからざるを怪む勿れ。精ならざるは粗ならんが爲のみ。若し偏に理を争はゞ吾れ不肖なりと雖も、豈に學究先生の後に落つるものならんや。千萬言唯意のまゝの

み。何等大膽の辭ぞ。何等の高心ぞ。これ實に數年の前、日本主義の別働隊として、國家至上主義を唱へたる人の言なり。曾て倫理學の著者たりし人の言なり。而して今現に本能至上主義を云ふものゝ言なり。此の如くにして千萬言はわろか、一石の記述に數百卷の書を造ると眞に易々たるべし。此を以て矛盾なりとなし、その論の不完を辯護する遁辭なりとなすは、そは聽くものゝ勝手たるべく、讀むものゝ隨意たらん。只故らに理を盡さずと自白する人の言。何ぞ之に向て理義の論争を要すべき。

其七

外面如菩薩

樗牛子の説を以て未だ理を悉さざるものと爲し、本能至上説が更に

確乎たる基礎を有すべきを云ふもの、久保天隨子あり。

天隨は樗牛の論を以て、その故らに新奇の文字を用ふるに拘はらず二千年の昔、支那に於て早く既に莊周により唱道せられたる、性命の説に異らずとなしぬ。さておもへらく、人世の目的が本能の満足にあるや勿論なり。さばれかゝる満足は如何にして之を求め得べきものなるか。唯だ只だ本能の満足と云ひ、本然の要求と云ふ、漠として討ぬるに由なきに非ずや。樗牛の意を推究するに、その本能なるものは種族的慣習なりと云ふを見れば、而してそは吾人の祖先が盡瘁により、生れながらにして吾人の有する所のものなりとせば、そは必ずや吾人が能力の範圍中にあるものたるべしと。

かくして天隨はおもしろをかしき例證と論理とを経て、外觀上稍やグリーンに似たる能力説に到達せり。曰く、心靈の内部深奥の所に存

する靈慧(ローゴス)は、最大能力を意識せしめ、やがて先天的觀念の形相を爲す。本然の要求はこゝに基礎を置き、以て必ず到達するを得べきなりと。天隨の理想は他に非ず、最も確固たる基礎に立ち、最も完全なる方便を假り、絶ざる活動を以て無限の進程を趁はんとするなり、而してその最も完全なる方法を見出でむが爲に、知識を斥けず、又必ずしも道德を無視せずと云ふ所多とすべし。

美的生活論がその知識を賤み、道德を蔑如するに拘はらず、又一方に於てはグリーンが能力説や、自由意志説や、最大快樂としての善の解釋の面影を偲ばしむる所なきに非ずと雖も、これ究竟皮相の類似のみ、似て而して非なるものたるのみ、天隨が美的生活論を與へて解釋したるは可なり。かくしてその最大能力の自覺に根すとせしは可なり。然れどもこれ樗牛が論の主旨に戻るや甚だし。天隨の説が樗牛に

反すると否とは問ふべき限に非ず。されば、その謂ふ所最大能力と云ふもの果して何ぞと問はば、恐らくは漠たることなほ樗牛が本能と大差なからむなり。我れ今之に向て更に辨すべき必要と時とを有せざるなり。

此他宙外子あり、蝶二子あり、共に樗牛子の説に對して辨じにき。皆穩健の論、今更めて聽くを要せず。我は去て、直に登張竹風子の論に赴かむ。竹風はニーチェ宣傳の先鋒、新ロマンチックケルの隨一人。美的生活論をもて直ちにニーチェが説となし、八面の敵に向て奮闘頗る力む。天真爛漫の態度、却て喜ぶべし。請ふその説を聽かしめよ。

## 其 八

## 美 か 醜 か

竹風子はあくまで樗牛の論を以てニーチエに起因すと爲せり。然り彼の美的生活論に於て、無題録その他のアフオリスメンザンムルンダ(?)に於て、吾人は確かにニーチエと同調なるものあるを認む。若し果して然りとせば、美的生活論は疑もなく論理の悉さいる、言説の到らざる、不條理の文字なり、不完なる立論なり。天溪の疑へる、宙外の難せる、もとより至當、竹風の之に對して争へる、却て兒戯に類すと云ふべし。されど樗牛は自から然らざるを辨ず、よし、樗牛をして長へに彼たらしめよ。而して竹風の美的生活論は如何。

竹風に從へば、謂ふ所本能とはニーチエが自由の本能なり、權力の意志なり、此の如く解し來れば、美的生活論に云ふ所の本能の意義は明瞭にして、理路の疏通は初めて見るを得べけむ。されどこれ精神の絶体的自由を主張し、人類の根本的本能が自由の本能即ち權力意志な

るを證するに非ずんば、許すべからざる事にあらずや。ニーチエの空想は之れを肯定しぬ。詩人の空想に止らば可なり。之を以て人に説き之を以て世に推奨せんとならば、少くとも先づ一應満足なる論證を爲すを要す。その理由如何と云ふか。極めて簡單なり。吾人は本能と共に理性を有するが故に、自由の本能と同トく他の本能を有するが故に。

吾人が精神の絶体的自由を有せざるや明けし。多く論ずるを須ひず。情内に激するとき、理明なるを得ざるにあらずや。病革りて年老いて死に瀕するとき、壯時の如き意氣を有する能はざるにあらずや。

吾人に權力の意志の存することは我れ亦了せむ。然れども亦生存の意志あるにあらずや。人生の第一義は生存の意志にあらずして權力の意志なりとは、ザラップスツラに於てニーチエが云ふ所にあらずや。

されど、遂に之が充分なる理由を能ふること能はざるにあらずや。竹風何の理由ありてか之れを云ふものぞ。若し科學の教ふる所より云はば、生存の意志そのものこそ、一切生類の（ニーチエが好むなる動物的通性よりは猶廣き）根本的井ルレなるに非ずや。科學は要なしと云ふか。無限なる宇宙に比し來て滄海の一粟にも若かざるは吾人なり。萬古不易の天則あり。吾人は之が束縛より脱すること能はず。これ科學の教ふる所。而してなほ我はこれに従ふを欲せずと云ふか。これ談理の外なり。空言のみ、謾語のみ。只自己の偏狹なる信條なり、迷信なり。此の如くにして、はじめて世に眞なるものなく、一切の事悉く許さるる事を得む。その時之を口にするもの、決して權力意志のみを根本となして、他を貶するの權能を有せざること、亦知るを要す。

高山氏はその本能至上説を美的と呼びぬ。その價值絶体なるが故に

竹風解して曰く、亦ニーチエに従へるのみ。彼思へらく余は我が美しと見るものゝみを、さして美なりと呼ぶ。余に向ては余が官能に媚び、余が自我心に服するものゝみ美なりと、美的生活論と稱する。亦之が爲のみと。何たる執我の審美眼や。されど、生活論に用ゐらるべき美の詮議が、美學の夫に關るなきは言ふを要せず。多謝す。竹風君、我は君によりて如上の意義に於ける本能生活に名くべき名稱を知り得たり。曰く、醜的生活論。余に媚ざるが故に。余が心に服せざるが故に。敢て問ふ。可ならんか。

其 九

### 價 値 轉 倒

道德を修め善を致さんには戮力を要す。善を致さんがための戮力と

は何ぞ、惡の排除に非ずや。善既に惡を豫想すとせば、その善なるもの亦殆からずや。戮力を要すべき道德は賤しむべきかなど。是れ樗牛子の説なり。此點に關しては、ニイチエを借り來らすとも、理路一貫せるに非ずや。只その戮力を要するもの果して賤むべきか。謂ふ所本能の満足と雖も、戮力なくして得らるべきか。疑問たるのみ。

竹風子は然らず。以爲らく、これ亦ニイチエの惡心説を以てするに非ずんば、解するを得ずと。惡心説とは何ぞ。自由の本能がその満足を得ざるが爲めに、外に向けらるべきを移し來て、逆まに自身を虐待するを云ふなり。彼れ此説によりて、凡ての辭讓的、同情的、博愛的、さては、我的の道德を目して惡心の果なりとし、良心を賤しとなし、かくして竟に價值顛倒説を爲しぬ。竹風若此説に與すとせば、何ぞ本能の満足が此の戮力なうして得らるゝかを明にせざる。自から當然の責を塞

がすして、却て難するものを反駁す。暴も亦甚しからずや。

又疑ふ、各人が自由本能の勢力を逞うするの曉世は、まさに如何なるべきかを、自由本能とは權力の意志にわらずや、各人自家の勢力擴張にわらずや。奴隷道德に反對せる君主道德にわらずや、各個人が他を臣妾として、自から君主たらんの類にわらずや。各人悉く君主たるべき、君主の意義何くにかある。是れ竟に空想に止りて、人に世に推奨する能はざるものに非ずや。而して世の是に聽かむを強ふ。笑ふにたへたらずや。

更に又思ふ、權力意志説既に君主道德説を伴なふ。試に想像せよ、こゝに一人の高尙なる猛惡心を有する獅子心の超人出ぬと。自由本能を有する他の者は、その超人の掠奪に甘んじ、その壓制に屈し、こゝに超人以外のものは皆奴隷的屈辱に甘せざる可からざるに非ずや。我を

して美的生活論と同一の論鋒を用ひしめよ。君主道徳にして奴隸的屈辱を豫想すとせば、君主道徳も亦殆からずや。是の如き君主道徳を伴なふ權力意志説も亦賤むべき哉。

看來れば、竹風の美的生活論に對する辯解は、なか／＼にその破綻を大にするに過ず。是れ豈に胸に七孔を穿て混沌を殺したる倏忽の好意に類するなきか。竹風の才を以てして、何ぞ機敏なる樗牛と共に、情切にして、理故らに拙、幾微言外にありと説くの優れるに就かざりし。又何ぞ、我は同トきものを求む、人の異を咎めんやと論ずるの、寛且つ巧なるを擇ばざりし、我れ竹風の爲に憾とせん。

人は頻りに人世に切なれと叫ぶ。されば如是不條理なる自由本能説、畢竟我世に何の用ぞ。然りと雖もこれ正面の解なり、反面の解釋とはいかに。曰く詩人世を憤るの聲なりと。是あるかな。而して我は實にそ

の聲の危険なるをあやぶむこと更に切なり。

其十

### 烏合の衆

本能至上説が未だその大膽奇険なる聲を放たざりしとき、謂ふ所新學派の諸氏頻りに疾呼して曰く、形式主義、方便主義の弊既に極れり。空談術學の風も亦その極に達したり。倫理教育の假聲、その全盛を誇るの時にあらずや。而して姦邪愈よ横行するの時に非ずや。國民の趣味益す墮落するの時にあらずや。畢竟これ何の爲ぞ。彼等僞學の徒、たゞ口耳の學を弄して、而して人世に切ならざるが故に非ざるか。吾人は卓上の談理に壓さぬ。更に人世に切なる者あらんを希ふと。何ぞ云ふ所の痛切なりし、吾人は翹望して、新思想が民衆濟度の早からんを



待ちぬ。果然、驚くべき思想は來りぬ。矛盾と獨斷とに富める、狂暴にして人世に切ならざる、本能至上説は實にその先驅として來りしなり。嗚呼美的生活論、これ險惡無慈悲なる個人主義の聲なり、横暴貪邪なる本能至上の叫なり。巧妙なる言辭を裝へる獸人の假聲なり。一言をもて蔽はんか、巧言美歌人を陥るるニムフなり。無邪氣なる童男童女の犠牲を喜ぶミノタオル也。泰山鳴動して鼯鼠出づ。之猶可なり。吾人は救主の來迎を渴望して惡鬼の跳躍を見る、誰かなは忍ぶべしとす。るぞ、借問す新學派の諸氏、卿等が等硯を鼓して學者を罵り、道德を嘲殺し、教育を罵殺して歡迎したる新理想、今はた何の狀ぞ。四面の攻撃既に本營を破壊し了れるに非ずや。卿等人を欺き世を欺き併せて自己を欺くなくんば倖なり。その人世に切なれと言ふ者何くにかある。知らず卿等の大脳なほ健在なりや。否やを、新學派をもて任する諸氏

また揚々として公言すらく、從來の文士旗幟の鮮明なる者なく、隊伍の整然たる者なく、兵法の神を欺く者なく、只縦横無盡に奮進せしのみ、未だ旗鼓堂々として大牙の指す所、千兵靡然として進むが如きものあらざりき。然るに、今や學者の敵にして藝術家文の味方たる、ニ―チエは有力なる援軍として到りぬ。宜なるかな、幾多氣鋭の士争てそが麾下に集らんとすること、戰軍は鮮明なる旗幟を得たり、烏合の衆は激烈なる指揮者を得たり。亂令之より新なるべく、想ふに花々しき合戦の早晚人を驚かすものあらんと、抱負想ふべし。而してその抱負、今果して如何、文藝中心を叫ぶものあり、道德教育を蔑如して學者を罵るものあり、本能至上、性欲至樂を説くものあり、おもひの陣立、隊伍、右往又左往、げに有がたき霸業なるかな。矛盾不合理を旗幟とすとの謂か。あさはかの感情を指揮者とすとの謂か。かくして烏合はむ

かしながらの烏合なり。かくして本尊が思想の幾變轉は彼等の關する所にあらずとするなり。

ニーチエが思想の少くとも三變せしとは論を俟たず。然れどもこれが彼が一生の思想變化の事實なり。人世の事實なり。而して個中亦當然の理由の求め難きにしも非ず。今の之を祖述し標榜する者に至ては然らず。打て一丸となし、以て八面に當りちらすに過ぎざるなり。矛盾扞格厭ふ所にあらず。理否問ふ所に非ず。矯激自ら喜び、危言一時を快うす。謂らへく、一代の氣風に反抗して所信を枉げず、快何物かこれに若かんと。たゞ快をこれ求むる、これ彼等の志にあらざるなからんや。

其十一

何の主張ぞ

ニーチエが會心の友たるドイツセンはニーチエを評して云ふ。彼が喜ぶ所は斬新快心の擧にありき。たゞ唯快をこれ求む。平凡と平和とはそのたふる所に非ざりき。彼が一代の所説の人格的根基はこゝにありと。故あるかな。彼を祖述する新學派の徒、亦快心これ求めて其他を知らず。矛盾と不條理と、厭ふ所にあらず。一步又一步、知見を積み理路を辿り、成功を永遠に期する科學的研究の平板なる態度はその忍ぶ能はざる所。幽を闢き、玄を拘し、複雑微妙なる觀念の海底を探りて、理性の満足を求むる哲理的思索の煩瑣はその堪ふる能はざる所。小我を没して大我に入り、動物的本能を制抑して、理性の命に聽き、慈眼一切の人類を同視して、理想的樂園を建てんとする道德的戮力はその好まざる所。平和を惡み、波瀾を喜び、狂熱自ら任じ、奇矯人に驕り、たゞ反抗を試みて偏狹なる小我一時の快を貪らんと欲す。たとへ旗

職の鮮明を誇ると雖も、號令百出、遂に烏合の衆たるを免がれざるは  
 もとよりのみ。  
 彼は人類の目的を以て幸福にありとすれば、此は幸福を云ふものを  
 目して厚世利用の徒と罵り、巧利の賤むべからざるを唱ふと見れば、  
 一方には是を蛇蝎視するものあり。新學派諸氏が、旗鼓堂々隊伍整正  
 と稱するものは、此の如きのみ。文藝中心を云ふものあり。學者を陋と  
 し、智徳を賤しとし、歴史を無視して、小如是觀に甘ずるものあり。本能  
 に執着して人獸無差別を叫ぶものあり。綜合し來つて何等の主張か  
 ありとするぞ、而して人世に切なれと呼ぶ。棒腹絶倒にたへたらすや。  
 されど、よし。彼等頻りに時弊を云ふ。理を好まざるものに向て理を争  
 ふはむしろ迂なり。翻て彼等と共に時弊を觀察せん。  
 我は新學風を標榜する諸氏に問はん。

基督が博愛主義を奉ずるを以て自ら文明を誇り、而して人道を無視  
 し、弱國の無辜を屠り、婦女を姦し、國土を掠め、財寶を奪ひ、偉人を追放  
 し、天才を迫害するもの、隆盛を極むるの世にあらすや。此の如き世に  
 對して威力意志説を推獎し、君主道徳を唱道す。何の切なる所かある。  
 寧ろ時弊の贊嘆にあらすや。害毒の補助にあらすや。卿等識之乎。  
 殘忍酷薄なる虎狼の群中に居り、激烈なる國家競争の間に立ちて、國  
 体の尊を維持せんとす。貔貅百萬、艦艦幾千、猶ほ且つ足らず。而して二  
 十万噸の製艦費に、國民なほ誅求にたへずと稱するに係らず。美服温  
 袍曰くお祭り、曰く歓迎、曰く紀念祭、宴遊又宴遊、酒池肉林の樂に費消  
 するは毫も惜まざる國民にあらすや。至尊偏境に大轟を駐め給ひ、軍  
 國の事に軫念し給ふとき、宰相なほ美人を擁するの時にあらすや。私  
 通姦淫新聞種の大半を占るの世にあらすや。性欲尊崇の現代にあら

すや、而して本能至上説を推奨す。此の如くして一世の時弊を如何。卿等識之乎。

渡良瀬川一流の灌漑に衣食せる數千可憐の民、水田實らず、食足らず、水車音なうして龍骨空しく朽ち、老幼をして飢に泣き、壯夫しをて路頭に迷はしめ、而して身は闔國の金穴たり、從五位肩書に光り、孫の如き愛妾十を以て數ふるもの、獨り人に驕るの世にあらずや。收歛の吏富に誇り、惡徳の御用商人、爵を誇る。舉世自我の貪慾なる満足をこれ願うて、貧弱を蹂躪するは現代の事にあらずや。而してニ―チエ的個人主義を唱道す。此の如くして時弊を如何。卿等識之乎。

其 十二

奴隸道德の排斥

見來れば謂ふ所新學派の説、何ぞ淺薄なる。何ぞ殘忍にして冷酷なる。その本能至上説と云ひ、權力意志の説といひ、君主道德といひ、毫も一代の氣風に反抗するものにあらず。むしろ時弊の辨護のみ。惡徳の奨勵のみ。彼等と共に、は時弊を論せんか。時弊は餘りに明白なり。我れはた厭さぬ。唯だ新學派の諸氏に、諒げむ。若し一時の快を貪るに意あらずして、眞に人世の爲に憂ふとせば、卿等須くその輕佻なる態度を一變せざるべからず。徒らに時弊に媚びて、俗衆の憐を買はんよりは、退て深く哲人道を説くの本旨に想ひ到れ。大聖釋迦と云はずして可なり。救主基督と云はずして可なり。ソクラテーズ足れり。孔夫子足れり。老莊揚墨亦妨げず。要はその眞意の那邊にあるかを察し、如何にその人世に切實忠誠なりしかを知り、併せてその功過を詳かにするにあり。卿等須らく猛省する所あれ。

さはいへど、新學派の説亦あながちに排すべきにあらず。之を處世の原理として、人世の主義として、民衆指導の教義としては即ち否なり。然れども我國現時の學風に對する、思想界の一部に流行する偏狹固陋なる學弊に對する者としては、即ち可なり。寧ろ大に肯綮に中りて痛絶快絶なるものあり。哲學史の研究の爲に、自由思索を束縛し去られ、折衷又折衷何等の結論を與へ得ざる學者あるにあらずや。些末なる事實の考證にのみ是れ急にして、歴史が指示する人世の大事實を等閑に附し去れる史家あるに非ずや。濫讀これ事として徒らに書齋に終り、人世の歸趣は嘗て思ふ所に非ず。或は文藝の花に酔ひ、或は自然の樂を享受するを忘るゝ者あるにあらずや。忘るるもの敢て咎めずと雖も、他の之に安慰を求むるものを目して學者に非ずとなし。百方迫害を試むるものすらあるに至りては、吾人豈に平なるを得んや。

新學派の諸氏、彼等を痛罵して餘さざるもの、諒とすべきにあらざるか。思想の盲目的繼承に對して、個人の絶對自由を説き、歴史を蔑視し、天才を歓迎し、奴隸道德を斥くる、豈によからずや。只この一部の學弊を罵らんが爲に矯激の語を放ち、爲に一代の民衆を誤り、年少客氣の人の子を賊するあるを恐るゝのみ。吾人が彼等の險語を排するの意實に此に存す。

其 十三

### 馬骨先生

馬骨先生なるものあり、何くの人なるを詳にせず。諧謔諷刺の健筆を揮つて、ニーチエを評し、暗に新學派の妄を破す。人は痛快を賞す。或はこれあらん。人は熱血の文字と稱す。或は然らん。人はその穩健妥當を

云ふ。我れ知らざるなり。恐くは馬骨能くニーチエを解せん。我れ亦ニーチエが書を読み。或は史家の評を聞き、彼に對して些か見る所あり。而して馬骨の見に異なり。されど、今ニーチエを論じて馬骨と争はんことは、我願にあらず。また當眼の目的に合はず。只一事の言はで止べきことならぬものあり。

上下三千歳思潮の流れ幾變遷。迂回曲折のうち、同じきあり、異なるあり。杆格矛盾また頗る多し。何々主義と云ひ何々説と云ひ數へ來らば恐くは煩にたへじ。されど之を列擧するは思潮の變移を見る所以に非ず。その矛盾や無意味なる反動にあらず。その起るや由て來る所あり。その衰ふるや亦因て來る所あり。その意義を訪ね、その由來を究むる、是れ思想の推移を観る者の當に勉むべき所なり。

馬骨のニーチエが説を評するや、曰く、惡時代精神の權化なり、盲目的

反動なりと。惡時代精神の權化とか、或は然らん。されど、盲目的反動なりと云ふに至ては、斷じて不可なり。馬骨おもへらく、ニーチエが説をもて時世の反動なりと云ふが如きは皮相の見のみ、よせては返へる岸邊の浪のたゞわけもなき反動のみと。されど思へ、返りてはまたもよせくる浪さへも亦去來すべき理由あることを。引力の理法がその勢力を逞うするが爲にあらずや。況んや思潮の反動をや。馬骨先生もし思想界の事を論せんとならば、哲學史の抜き読みは不可なり。イスマスの枚擧は足らず。更に一隻の人眼を憐ひ來れ。

メンシリツヒエス、モルゲンレーテなどに著き、ニーチエが懷疑説の生れし理由は云ふを俟たず。そはカント派の先天哲學の霸圖僅に餘業を保つと雖も、異説粉々として統一なき思想界の現象は、明かに之に答へて餘あるべければなり。

何をかニ―チエが個人的反動の原因とはする。乞ふ少しく眼界を大にして時世を見よ。

五十年のむかし、ルイ、レイボウは宣告して曰く、社會主義は死しぬと。然れども今はた何の状ぞ。社會主義全盛の時代にあらずや、而かも平凡淺薄なる多數主義全盛の世にあらずや。衆愚結んで黨を爲し、多數の力を恃みて少數の弱者を壓し、個人の權能は無視せられ、政治は凡人の集會によりて決せられ、賢哲機を知り、深く民衆の爲を慮りて雄圖を劃せんとするも忽ち衆愚の壓し去る所となるの世にあらずや。而して一面に於ては、個人競争の時代既に漸く遠かり、團体的競争の時は來ぬ、フェル、アインや、トラストの競争時代となりぬ。國家競争の時代は來ぬ。見ずや、帝國主義は到る處に歓迎せらるゝことを、此の如き世に於て、ニ―チエの個人主義は出でぬ。君主道徳説は出でぬ。矯は

則ち矯なりと雖も、衆愚の爲に壓し去らるゝ個人の苦悶の聲にあらずや。天才發憤の聲にあらずや。その君主道徳説は帝國主義が平等主義一視同仁主義に反對する叫にあらずとせんや。その他思想界宗教界の現状を見よ。十九世紀末の文明は當然此の如き反動を催起すべき理由あるに非ずや。此をしも盲目反動とせば、何かは盲動ならざるべき。近時個人の絶体自由を云ふもの、之を先にしてスチルネルあり、之を後にしてニ―チエあり、又キエルケゴードあり。知らず、馬骨、此等數者皆盲目的反動となすか。其説の危険を云ふ、妨げず。其説の不條理を難する、可なり。彼我時を異にし、狀を異にす、其適切ならざるを云ふは可なり。獨その重要の意義を看過するに至ては盲目のみ。

人 天 の 契 合

さもあらばわれ、我れ、極端なる個人主義を惡む。彼等は叫んで個人と云ふ。されど思へ、個人畢竟何物ぞ。哲學これ何物ぞ。宗教これ何物ぞ。文學これ何物ぞ。一切の人文を擧げて竟に社會的生存の果にあらすや。人類幾世幾千年の所産にあらすや。我が文學と云ふ勿れ。我が人世觀と云ふ勿れ。我が世界觀と云ふ勿れ。我が道德と云ふなかれ。先世の遺物我に結で一体たるに過ぎざるにあらすや。祖先が(種族的)遺産たるが故に、本能ひとり貴ぶべしとは何たる妄語ぞや。おなじき意義に於て知識貴ぶべきに非ざるか。道德貴きに非ざるか。文學もまた此の如くにして貴ぶべきに過ぎざるに非ざるか。

人は哲學的動物なりとや。我敢て拒まじ。人は政治的動物なりとや。我また否定せじ。人は本能的動物なるかは、獨り肯せず。これ竟に一切の他の動物的生存より、特に人類を異別する能はざるが故のみ。とまれかくまれ、吾人は社會的生存としての個人を認めてその他を知らず。此の如きものを呼でソシウスと稱す。個人を離れて社會なく、社會を離れて個人なし。自然の理法か人間の宿命か、兩者融合し來てソシウスあり。人間と呼び人類の一員と稱する。たゞソシウスの別名のみ。ソシウスの發展開達は、やがて人文の開發なり。そこに文學の花開き、そこに哲學の果はむすび、そこに人世の春秋あり。此を離れて個人の絶對を主張する、これ人獸の交尾を希ふ所以なり。此に就ていよく、向上精進する、これ人天の契合を求むる所以なり。彼を求めんか、鬪争とはにつきず。悲慘悽其なる澆季の世に到るを得ん。此を希はんか、小我



は忽ち大我の中に没入して、差別を絶し、平等を絶し、圓融無礙の大自然力を得べく、大慈の理想、心泉に宿りて、暗黒々裡光明あり。春風長へに到りて甘露地に満ち、松嵐濤聲悉く美妙の樂たり。絶大の文學初て見るを得べけむ。豈に獅子心の超人を希ふを須るんや。豈に北歐の悲調にして止まんや。

恨むらくは人間宿罪あり。心性乖離して容れず。情智交も分れて合せず。我が世に不斷のなげきあり。こゝに個人主義の險語あれば、かして社會主義の惡聲あり。鬭争絶ゆるなく、煩悶長へに存す。鬭争煩悶長へにつきずして、哲人の恨極らず。希望の星光依稀たるが如し。されど見よ、白日明月天心にかゝり、理想吾人が胸中に宿る。此を追ふて撓まらず。屈せず。以て無限の進程を趁ふ。快何ものか之に若かん。豈に一時、一部の腐儒の氣風に反抗して揚々たる小快を思はんや。新思潮を口に

するの徒、何ぞ當眼の小憤に拘々たる。冀くは悠久なる人世を思へ。我れ是を以ての故に、謂ふ所新學風に憾あり。眞摯なるべき人世の爲に憾あり。

(をばり)

## 續新思潮論

(思想變遷の社會的過程を論じて、)

近代の個人主義的傾向に及ぶ

### (一) はしがき

摟指ふれば早や三年の往事となりぬ。リュッツェンの魔風遙かに扶桑の濱に及び、情は功利の毒手にさいなまれ、冲天の客氣は空しく秩序的なる常識主義に壓せられ、不平の念、虚榮の心、胸裡に鬱勃としてや

るに所なきを苦しめる現代の年少を煽動し、思想界の分野亂れにみだれて、群雄各覇を稱し、毫も統一なきに乘じ、縦横無盡にその領域を侵掠し、一舉その本壘を覆さんと企てしことありき、或は本能至上主義と云ひ、あるは美的生活と呼び、或は君主道德と稱し、個人絶對を唱へ、價值顛倒を叫び、威力意志を標榜し、大聲壯語、甘言媚容、頗る多感なる客氣の徒にかなひ、一時の隆盛を擅まゝにし得たりと雖、あり、これもと烏合の衆に過ぎざりき、その主張は畢に學界一部の弊竇に對する無謀の反動に過ぎざりき、性欲や、本能や、よし人生本然の要求たるべしとすとも、そは終局に於ける自家破滅の危険を伴ふを免かれず、道義や、宗教や、亦人類本然の要求たり、而して同時に自家の完成と、發達と、自族の繁榮と進化とに適する要求なり、時に盛衰あり、汚隆ありと雖、その根柢は牢乎として、抜くべからず、看よや、不平の旗風一時強

うして、勢さしにも猛なりしが、譬ふればこれ一團の鬼火、やがては消えて跡なきが如く、雁燕去來一再ならなく、蓆旗空しく溝壑に委せられ、鉦螺鼓聲昨宵の夢となりて、徒に六百五十回紀のお題目に壓倒せられ終んぬるを、邯鄲一場の春夢、さめてはかなき最後の様は、かねて預想せざりしに非ざれども、熟ら顧みれば、又我が文壇の浮薄輕跳なる、轉た悵惘のおもひに堪へざるものありき、さは云へど、流石に眞摯なる研究者、批評家は未だ全くこれをして一夜のお祭り騒ぎに終らしめず、桑木博士のニイチキが倫理説を評せるあり、獨立評論誌上ニイチキ、研究の聲を聞き、近くは抱月氏の思想問題あり、我が竹風君のニイチキ、宣傳者の責務として之と論争するあり、些か人意を強うするに足るものなくんばあらず。

彼の美的生活論の囂しかりしときに當り、予も亦新思潮論一篇十四

章を萬朝報紙上に草して、卑見を述べたることありき。されどそは主として、ニーチ<sup>ニ</sup>が本能主義の宣傳に對する世評と、その我國に於ける適否利害とに關しての論議に留まり、進みて歐洲近代の感情主義もしは個人主義的傾向そのものに對しては、言ふ所あらざりしなり。今やこの問題が再び文壇に云爲せらるゝを機として、爰に這般傾向に對する懷抱を叙せんとす。續新思潮論と名けし所以は即ちこゝにあり。

(二) アフラマツドミアーリマン

文學は社會の反映なり、あらず、一切の文明實に社會の自傳なり。豈に獨り文學とし限らんや。藝術の作品は作家その人の趣味、理想、性格を語り、哲學は究竟思索家そのものゝ人物を代表す。おなじき意義に於

て、慣習や、法律や、美術や、道德や、さては宗教に至るまで、あらゆる文物が能くその當代の社會的狀態を吾人に告白すること、なほ一塊の土石が地球の過去を示し、一片の枯骨が人類の歴史を教へたるがごとし。故に一隅を掲げてよく三隅を揣摩するの明あるものは、這般文物の變遷に鑑みて、直ちに時勢推移の眞諦を悟るを得べし。然れども彼の慣習美術あるは制度が、その當年の社會を語るや、深淺あり、高下あり、親疏あり、又方面の相異あり。希臘の造形美術が如何に優美に、如何に高尚にして後代の希求し得べからざる巧妙を縱まゝに得たりき、とも、その變遷はヘレネス族が政治的活動や、はた法制やに關して、竟に吾人に教ふる所なかるべく、羅馬の法制がいかに完備に、いかに精緻にして、七丘城が榮華の夢に残存し、今に於てなほ世界制服者の桂冠を誇るとも、その研究はタチプス、キルギリウス等が天才の技巧や

ラチン民族の空想や趣味や、に就て、毫も傳ふる所あらざらん。されば人文の跡によりて、その社會を恫怳せんとするものは、豫めその人文の種類と、その社會との關係に就きて、再考三思の用意なくんばあらず。

抑も社會とは何ぞや。人類の集合なり、統一なり。然れどもその謂ゆる集合や、物質の集積にあらず、沙石の積んで山をなし、分子の相牽引して物躰を爲すと同じからず。此は盲目なる引力の天則に律せられ、彼は自由なる心意の合同によりて統一せらる。若し此をもて物質的法則の配下に屬すとせば、彼は正しく精神律の制約に遵ふものと云ふべし。故に能く察するものは社會をもて單に人類の集合となさずして心意の聯合となし、謂ゆる文明をもて總躰心意の化現と觀ず。既に心意の聯合なり、既に總躰心意の化現なり。是を以て吾人は人文の推

移を看て、一面之を心的諸機能の勢力消長の關係に由來すとす。これ當然の論也、不動の鐵案、奪ふ可からざるなり。爰に吾人は漫然心的諸機能と云ひぬ。されどこは一言の辨なからざるべからず。個人心理學は、先世紀に於て長足の進歩を爲せり。ダーニズムと共に一般の學術、特に精神科學の基礎を全然變更せしめたり。直覺的内省的なりし從來の研究法は一變して生理的實驗的となりぬ。智情意三元をもて全心界を蔽へり。とせし説は既に古りたり。感覺は智情何れに屬すべきかは疑問となりぬ。欲望は三元の外に立ちぬ。感官は畜に五六に止まらず。衝動は所屬の地なうして久しくさまよひき。或は三元の對立を認めず、その何れかに歸納せしめんとして情を揚ぐるあり、智を揚ぐるあり、意志の心理學を建設するものあり。研究いよ、精にして糾合統一の策益難きに似たり。然れども智情意

三元が主たる心的機能なることは疑ふべくもあらず。特にその教育學に應用せらるゝに當りては、なか／＼に必要な所あり。況んや彼の總躰心意の科學たる超心理學(社會心理學)の進歩は、未だ個人心理學の隆盛に比肩すべくもあらざるのみならず、又その客躰として一定の肉躰を有せざるをもて頗る趣を殊にする所あり。されば今人文の發達、ことに思想の變遷と、その文學に及ぼせる影響とを以て社會的現象となし、總躰心意變遷の過程よりして觀察せんとするに當り、三元を以て心的機能となし、欲望を以て情に屬せしめ、意を以てたゞ選擇裁決の作用と見做す。是れ斯學の現況が然らしむる所、又止むを得ざるなり。

如上の見地を以て思想變遷の史に蒞む。こゝに吾人は何物をか見るを得べき。

ツアラプスヅラがゼンド、アエスタを通じて現はれたる、イラン民族が宗教觀は吾人に教へて曰く、世異はアフアマゾド及アーリマンてふ善惡二坤の戰場なり。人類の墮落や、災厄や、及び一切の惡徳の跋扈は惡神勝利の表示なり。その精進や、祝福や、およびあらゆる善徳は善神勝利の示現なり。件の二神の鬪争は、悠久の歲月を経て終局善神の最後の勝利に歸し、惡神こゝに亡滅して、人類は新なる光の下に改造せられ、永劫の祝福を贏ち得て、圓滿なる理想郷を現出するに至るべし。善惡二神の鬪争は吾人知らず。然れども、げにや鬪争は萬物の父なり。眞理は闇黒なるヘラクライトスが思想よりも古し。成壤は天地の大法なり。人に生死あり、物に生滅あり、國に盛衰あり、文明に消長あり。水火相闘ひ、海陸相闘ぎ、生類は生存を競ひ、人間は自然と戦ふ。唯心論は唯物論と對峙し、正説は反説を喚起し、私欲は良心と争ひ、理想は竟

に現實と相容れず。私欲と云ひ執我と云ふは個人的主觀的なる感情の變形にあらずや。良心と云ひ理想と云ふは普遍的客觀的なる智の面影にあらずや。然り、吾人は思想變遷の大過程の根本に於て智情二元の深く潜在するを認む。此の如く觀じ來れば、思想の推移はやがて智情二元の勢力消長の史たらずんばあらず。詩人的哲學者たるプラトンは智を以て帝王にたぐへ、勇を以て武夫に擬し、情をもて農夫に比しぬ。情の執我的個人的傾向を有して、ともすれば私欲に偏し易く、盲進的なるが爲めに、智によりて導かれ制御せらるべきものなるを暗示せるものにあらずや。シヨールペンハウエル亦嘗て意志を以て盲目なる駿馬とし、智を以て之を御すべき騎士に喩へたり。而してその謂ふ所意志は畢竟發動性の義に近きものたるが故に、こゝに吾が謂ふ所の情即ち欲望及び發動的なる衝動をも含めること前に述べ

つるが如き情をもて盲目なる駿馬となすに同トク、又以て情の暗黒方面を指示するものと見るを得む。此の如く情の盲目的にして、主我的個人的なる所おほく、動もすれば惡徳に傾き易き所彼のアーリマに類せずや。之に反して智の光明あり合利的なるは、彼のアフラマツドに似たらずや。若し果して善惡二神が智情二元に配し得べくんば、イラン民族が宗教觀は移して以て思想變遷の過程を代表せしむべき恰好の形式たるなからんや。

### (三) 人文發達の三大時期

夫れ情は活動的にして智は靜止的なり。彼は綜合的にして、此は分析的なり。前者は生理的機根深うして、肉體の狀態に依立する所おほく、その羈束を受くること大に、後者は輕快にして靈性を帯び、生理狀態

の拘束を受くる所甚だ少し。故に彼は盲目的にして此は合理的に、彼は積極的進取的なるに反して此は消極的保守的なり。彼は自己の快苦に照して一切を判断せんとす。隨うて弊は主我的個人的なる所に在り。此は普遍性を本として萬法を攝理せんとす。故に、沈滞無氣力の缺點ありて活動に乏しきの憾なきにわらず。情は、譬ふれば、血氣盛にして空しき戀にあくがる、青年の如く、智は冷靜にして白眼世を見る仙骨の隱士に似たり。更に之を經綸の才に喩へむか、情は活動を喜び飛躍を楽しみて、統一の才に富める亂世の奸雄に比すべく、智は、秩序を重んじ是非を辨じて、監理の能に長ずる治世の能臣に較ぶべし。若しそれ兩者相調和して一身に兼ね備はらば、寔に建國の英主、治世の明君たるを得て、始めて聞然する所なきに遮幾からむ。之を社會發達の過程に徴するに、彼の原人を去ること未だ甚だ遠からざる蠻人

に在ては、その身軀といふもに心意も亦早熟のなり。情に鋭くして知見は極めて少く、感官に鋭敏にして推理の力に乏し、故に未來を慮るの念はほとんどなく、自己の利害を打算すること能はず。その行動は主として情の向ふ所のまゝなり。況んやその情なるもの、亦極めて粗野劣等の状態にあるが故に、肉感を貴び肉欲を重んじ、偶々喜怒哀樂の情や、深きものありとも、そも亦直接間接にかの肉感、かの肉欲に連關するより來るが如し。此の如き人類より成れる社會に在て、その社會的活動も亦感情のまに、移動するは、理の當然にして怪むを須むず。故にその社會の心意状態は、もし然か呼び得べくんば、情、即意の形式によりて表示せらるゝを得べし。此を感情、主治時代と稱す。此の如きは社會進化上第一期に屬するものにして、通常蠻人の社會に於てのみ見らるゝ状態なれども、時としては或る事情の下に、智の統制力

非常に減退し、思想信仰の社會的威權地に落つるに際して、一變象として文明の進みたる社會にも亦稀に此状態を見ることあり。個人の智識漸く進み社會的結合は強固となり協力作用の度や、大となり、多少人文の發達を見るに及びては、各人ひたふるに情のまゝに行動することなく、且つその情なるもの亦漸く高等且複雑となるに従ひ、合理的分析的秩序的なる智の力は、盲目なる情を抑制して、その放縱なる活動を専らにするを得ざらしむ。個人既に然り。その社會的活動の狀態亦之に準ず。此時代に於ける社會意志決定の方向は一に社會的智識と、おなトき感情との勢力の強弱に依る。換言すれば智の能く情を制するとき、意志決定は則ち合理的となり、情の力よく智を壓するとき、則ち情的着色を帶ぶ。之を智情共治時代と名く。即ち社會發達の過程に於ては第二期に屬し、第一期に屬する原始時代を

除くときは、過去及び現在の殆んど凡ての社會は此状態の中に進退せるものなり。第三の時期を名けて智情融合時代と稱す。社會發達の最後の時期にして、又理想的時代なり。此階段に到るや、情の淨化はその極に達し、智の教ふる所は情亦おのづから之に融和して、その間ほとんど乖離間隔なし。形式によりて表示せば智即情、情即意なりと云ふを得む。此時代に至れば社會心意の上に在て、智情二元はまたく圓融相即なり。社會的認識の指示する所、即ち社會的感情これに従ひ、意志決定の方向は情的にして又知的なり。史上の事實としては、古來何國何代の社會と雖も、恐くはこの圓滿無礙の理想的時代に到達したるものなかるべし。雖吾人はかゝる理想的狀態の實現を認むべき充分の理由を有す。社會發達の過程とそが進化の方向とはその理由の一なり。情の



醇化と社會的人格(ソシウスの)發達との事實は、その理由の二なり。況んや、社會に在ては、此理想的時代の實現未だこれなかりきと雖、個人に在てはその事實の存在するに於てをや。彼の心の欲する所を行へども自ら規矩を越ゆることなしと云ふが如き哲人の境地はこれなり。思はず勞せずして畫く所は天下の神品たる名工の技巧の如きことなり。民族精神と云ひ社會心意と呼び或は時代精神と稱するものは、理論上より云はゞ全ソシイ(全社會)の總躰心意なりと雖、民族心理學上の事實としては、實は、多數者の心的契合なり、廣義の合意なり。然らば即ち個人心意上這般事實の存在は、やがて如上の豫想に對する理論的必然を示すものにあらずや。

以上陳べ來れる社會心意發達の過程に於ける三時期と、その間に行はるゝ智情二元の關係とは、これ實に人文發達變遷の根柢に横はれ

る事實的必然なり、如何ならん文明の形式と雖、詳らに之を觀察せば必ずやこの根本的過程を反映せずんばならず、吾人は今や進んで古來の文明、特に最も直接に總心躰意の反映たる思想變遷の中に、如何に此根本過程が行はれ來りしかを攷へむと欲す。

#### (四) 情の醇化と愛の哲學と

光明は東方より、語極めて簡にして意實は長し。げにや朝暉の東天に先づ現はるゝが如く、古代の文明は東洋より起りにき。黄河の文明は更にも云はず、インダス、ガンヂスの文明も亦姑らく之を措くとすども、ニール河畔に於けるハム民族の文化、オイフラテーズ河邊、セム民族によりて建てられし數古國の開明が、業に既にその隆盛の頂に達せしころ、現世文明の母郷を以て許され、僅に七百年の生氣ある歴史、

能く文明の史を縮寫すと認められ、哲學の搖籃を以て稱へらるゝ希臘は、なほ暗黒中に眠りつゝありき。ヘレネスをして懶眠より覺醒せしめ、之に文明の萌芽を興へしものは實に、此等東方諸國の文明なりしなり。

此等東洋古代の文明は實に吾人の驚嘆を値して餘あり、よしその藝術的技巧は希臘人の優美渾熟を企及し難しとすとも、四千餘年前の産物として數々の大金字塔を有する埃及の開化、二千の壯牛を屠りて天神祭壇の犠牲とせる英主ラムセスが治世の隆盛は想見するに餘あり、況んやマヌの法典を有し、ラーマーヤナ、マハーバータの大詩篇を産し、特に冥想的思索力は、六大哲學と空前絶後の大佛教とを誇り得る印度の文化に於てをや。一國の文明優に西歐二千歳の精神的文明に對抗して遜色なかるべく、禹域五千歳の斐然たる文明亦

以て優に一大文明史を爲すに足るべし。然れども、惜むらくは東洋の文明は參商各孤立して、その間に有機的發達の關係なく、また現世紀の文明に對しては殆んど異邦の人、風來の客、相關せざることを、是を以て人類の思想ことに現世紀の思潮を窺はんとして、その發達推移の史を考へむが爲には、頗る不便なる所あり、かるが故に希臘以後西歐を支配せる思想文物の變遷のみに就て、彼の根本過程が如何に現はれつゝありしかを究めんとす。豈にこの鶴髮の文明を閑却するものならんや。寔に止むことを得ざるが爲めのみ。

トロヤは奏樂の中に建てられぬと聞けど、文明は斷トて一夕の産物にあらず。史上の希臘は七百年に過ぎざれども、彼の光榮ある文明到底この僅々たる歲月の所生とし見るを得べからず。その小亞の海岸に碁布羅列せしミレトスその他の多數の殖民地は、彼等の商業的交

通どもにも、バビロン、アッシリア、波斯、ホエニケ埃及等の東方の文明を輸入し、自主自由を喜び進取的氣象に富めるアリアの特性と、特にヘレネスの長所なる美的趣味とを以て、それを改造したるもの即ち希臘の文明なりと云ふを得べし。

希臘の文明はそもいづれの時に起れりや。歴史が正確に吾人に語る所は西歴紀元前八世紀より以上なること能はず。その以往の事は神話、傳説等が正史の事實と相錯綜して離る可からざる關係を有するが故に、吾人は只此等美はしき神話傳説の彩霞を通じて有史以前の希臘を髣髴の間に物色し得るに過ぎず。況んや史上に現はれたる希臘人は、その傳説的祖先なる、ドイカリオンの子ヘレンの名にちなみて、自らヘレネスと稱せしものなるが、なほ以前に於て古希臘の土地に住せし人民あり名をペラスターと呼びぬと傳ふ。此兩團の人民が

同一なるアリア民族に屬することは史家の概ね認むる所なれども、その果して同一の部族なりやあらずや、及びその交代の時代はいかにの問題に至ては、全く疑問の中にあり。此等知識の缺乏は吾人をして希臘の文明がその初め全然東洋より移殖せられたるものなりやはたその幾分は純希臘の名を値するに足るものありやに關して決然たる裁斷を爲す能はざらしむ。然は云へ又一面より考ふるに、彼の神話や傳説や、民族心意發表の最も原始的のものたるに關らず、その傳説的史傳はツェクロープの埃及より藝術、學問、宗教的智識を齎し來りてツェクロペアの建設者となりしを語り、又アルゴスの建設者は五十の女子を將て亦埃及より來れるダナウスなり、テーベの建設者たるカドモスはホエニケ人にして文字の輸入者なりと語るを見ては、東方先進の文明がいかに古くより如何に大なる影響をヘレネスに

與へしか、想見するに堪へたり。加之希臘傳説の最古のものとして知られたるホメーロスの二大詩編が、トロヤ戦争を中心とせる叙事詩にして、而してそは紀元前殆んど千二百年の作と傳へられ、或はその最古の産物と見るべき神話中にすら、東方セム民族の神格が混在するを見ては、吾人はいよいよ、エクス、オリエンテ、ルクスの意義深長なるに驚かずんばあらず。

希臘の文明はその始めよりしかく東方先進文明國の影響を受け吾人をして轉たヘレネスに特有なる文明の有無を疑はしむと雖、しかも仔細に考察するときは、その移植せられたる文明も一たび希臘人の手を経るや、ヘレネス特有の天才は忽ち之をヘラス化して、新なる光明と活氣と優美とを賦與して、全く別種の文明たるの觀あらしむ。希臘の文明と稱せらるゝものは、實にこの驚くべき希臘化の天才よ

り來る。

ドドナのツァイスを至上神として崇拜せしベラスゲーに就ては、その既に原始的野蠻的狀態を脱し、狩獵時代遊牧時代を過ぎて、農業に衣食し、その都市を城壁によりて保護するを知れりとの事實以外、吾人は何等の知識なしと雖、之に代りしヘレネスの特質や、その社會的狀態に就ては、歴史は詳かに吾人に語る。その語る所に依れば希臘人は天性快活にして、自主を貴び、自由を重んじ、美を愛するの念極めて強く、又極めて友情に厚き人民なりき。此等諸の性質は相依り相助けて謂ゆる希臘文明の特質を鑄冶せり。就中ヘレネスが美に對する感覺の鋭利なりしことは、儔を前代に空らし、類を後世に絶す。希臘の文明が後昆に残し、勢力は、文明の凡ての方面に於て實に著しと雖、殊に典雅にして雄渾を具備せる造形美術と、その究理的精神の活潑自由

なるより來れる哲學の偉觀とは、今に至て二千年、なほ能くその勢力を失はず。彼等は宗教を東方の文明より得たり。然れどもその陰鬱なる厭世的の面影は毫もその跡を止めしめず、忽ち化して美的樂天的のものとなり終らしめき。彼等は美術をセム人に得たり。然れども能くその怪奇不自然を脱し得て、典雅温籍にしてしかも壯麗の致姿を失はず。以て無比の美觀を呈し得たり。彼等は哲學をハム人に得たり。然れども能くその宗教的迷信を離れ、純乎たる冥想的思辨を縦まにするを得て、しかもその特得の美的形相を賦與せりき。希臘文明の特質は、要するに情の醇化はとんどその極致に達し一切を美化し得たるの邊にあるが如し。

社會發達の初めに於ていづこ如何なる國民か能く神話製造者にあらずし。然れどもいづれの神話か能く希臘のそれの如く美的なる

ものありし、モリッツが神話をもて空想の言語となし、詩的作物なりと斷せしは、特に希臘の神話に於て適切なるが如し。希臘の神話も亦他のアリヤ族のにひとしく、自然現象の人格化に起ると雖、東洋アリアのそれの如き、たゞおそるべき自然の威力を表示するに止らずして、同時にその親しむべく愛すべき側面を有せりき。アポローはもと日光の化神にして、希臘諸神中最も多く社會的生活に色彩と影響を賦與したりしものゝかるが、シリヤ地方の拜日教に見らるゝが如き威赫的性質をば有せずして、そのおそるべき性質は能く親しむべき性質中に解消し盡されぬ。烈日の光とその熱とは一切の生物を腐敗破壊せしむる力を有すれど、之と共にまた生類化育の力あり。前の一面のみを見たるものは、東方の拜日教的神話なり。此の二者が圓滿なる調和を爲すを認めしは、美感に鋭き希臘人の神話なり。かくてアポロ

一は智の神、光明の神として全希臘の崇拜を受け、デルフォイの神殿に、その奇しき神託を通トて、天上の祕密を人間に暗示せり。宙にアポロ一のみならず、希臘の諸神は僅少の除外例の外皆この一見矛盾なる両面の特性を併有して、以て美はしき神話の錦繡を織りなせり。換言すれば神話中の性格の矛盾も、醜なる側面も、怪なる側面も、希臘人特有の富膽なる想像力に化せられて、悉く美の型中に熔け去れりしなり。

古ヘレネスの神話的作詩中、吾人はもとより原始的なる粗野なる感情の發現を認むることなきに非ざれども、始終を通トて、達觀すれば、情の醇化、即ち智と情との圓融相即がほとんどその最高調にまで達したるものあるを見るべし。而して件の希臘人が一切を變化する空想の力と、鋭敏なる美感とは、一面にはアリアンが先天的特質より來

り、一面には明媚なる風光と、温和なる天候との、自然的境遇の影響より來り、兩者圓滿なる調和を現じ得て、東方の光明の下に、驚くべき文明を爲し得たり。若し文明發達の流が希臘以降現代に至るまで、時に汚隆はありきども、一貫一系を爲せり。とせば、希臘の文明は、情の文明なり、否、情智融合の文明なりと云ふを得べく、その最も偉觀を呈せしペリクレス時代に於けるアテネ一の社會は、殆んど第三期の理想時代に近づきたるものあるを想見せしむ。この醇化せる情は社會的活動の方面に在りては高尚なる愛情の流露なりき。然り希臘人の友情はその文明と同トく、前後無比至醇のものなりしなり。げにシモンツが云へりし如く、ヘラスのシヴリーは、その動因を婦人の愛よりはむしる友情の中に求むべく、握手せる友情は、希臘人にとりては、恰も婦人の理想化が中世封建時のナイトに於けるが如きものありき。此高

尙ふる愛情は詩人的哲學者プラトーンを得て愛の哲學となりぬ。

(五) 文明史の縮寫

更に一轉して希臘の哲學を考ふるに、こゝにも亦東方の光が遍照するを見るべし。タールレスは哲學の始祖と稱せられ、西洋哲學史の開卷第一頁を飾れるもの、而してこのタールレスもピタゴラスもプラトーンも共に教を埃及の僧に受けぬ。イオニア派の哲學もヒタゴール派も、エレア派も、はたヘラクライトスの哲學も、今日に傳はれるはその斷片零墨のみにして詳細を知るに由なく、埃及その他の哲學思想また委曲を得がたきを以て、兩者を對比して、具さにその異同を驗すること能はずと雖、その東方の光に負ふ所多きは極めて明白なり。特にプラトーンが輪廻説の如きは埃及の宗教觀より來りしこと固より

疑ふべくもあらず。

イオニア哲學の素朴なる獨斷的なる世界觀はさらにも云はず、一般に希臘の哲學は客觀世界の説明を以て生まれり。此哲學の榮えたりし時に當りては希臘民族の活動正に盛にして、國連日に隆盛に向ひ、外は波斯との戰爭に勝ち、内は文物の愈完成に向ひし時なるを以て、活動の元素たる情は主として外部實行的方面に向て働き、内面的思索的方面にその頭をもたぐるの餘裕なく、智は獨り客觀世觀の素朴なる説明を樂しみて満足せしが如し。然れども物極まれば勢必らず變じ、月は盈つれば則ち虚く、外寇の憂既に絶えて内患門牆の闕ぎ漸く萌し、アテネー、スパルタの盟主を争へるのみならず、各都市内部の腐敗も亦漸く生じ來れり。是に於てか哲學的思索は客觀界の説明より歸りて、實行的倫理的方面に向はんとするに至りぬ。而してその魁

をなせしものは詭辨派なりき。彼等の早急なる、客觀的説明の智識を移して直ちに人世に及ばさんと試みぬ。然れども素朴なる世界觀の知識、何ぞ能く人世の煩悶を解くを得むや。彼等は惑ひ初めたり。智の遂に爲すに足らざるを見たり。此に於てか、彼等は知の不能を認識して主觀のなか／＼に憑むべきを見たり。其極遂に世に普遍の眞理なく、人は各その信する所に従ふべし、各人にとりては自己は宇宙の尺度たるべしと極論する詭辨派の哲學は生トたり。詭辨派は實に素朴なる智に對する情の乖離として見るべく、思想界の感情主義なり。希臘の人世觀に取りては第一期の主情時代に恰當し、當年の思索界全體より云へば第二期に於ける情の勢力を代表すと見るを得べし。人世觀の上に、詭辨派の情に對して智の勢力を代表せるものは、ソクラテス一派の哲學なり。されど詳かに云はゞ情と智との融和を企てた

るものなり。此派の哲學の中心問題は、その人世觀にあり、倫理見にありて、論理學又は純正哲學の部分は、件の中心問題を解釋せんが爲めの準備に過ぎざるが如し。此意義よりせば、ソクラテス派の代表はプラトーンなりとす。東方より繼承せる哲學的潮流は、プラトーンに至りて全く希臘的となれり。希臘の彫塑術の特色たる、圓滿平等の相はその謂ゆる實想中に遺憾なく表現せられたり。その謂ゆる愛の福音はこれ豈に希臘人の理想に哲學的衣袂を施したるものにあらずや。たとひその輪廻説は埃及より受け來りし思想なりきども、這般争ふべからざるヘレネスの特色は、彼の哲學をして純希臘的なる名を專にせしむるに足れり。思想界に於ける智と情との調和は、一篇のジュムボジオンに於て名殘なく描出せられたり。アリストテレスの哲學は系をプラトーンに繋ぐと雖、同じく實際的方面を重んずと雖、之



をプラトーンの詩的なるに較ぶれば、形面上的分子の著く増加したるを見るべし。後者を以て智情相即の姿ありとせば、前者は再轉して智の勢力の隆盛に還りたるが如き趣きあり。然らば一たび第三期の理想的時代に入りし二元の關係が、何故に再び第二期の狀態に退歩せりや。慮ふに二面の因あるに似たり。その内因は二氏の人格の相異と詩的なる愛の説の理論的陷乏の補充とにわりて、外因は東方特に印度的文明の影響にあるに非ざるか。

マケドンの統一、歴山の遠征を経て、その死後政治的状態の濕亂せると共に、社會的状態は再び新なる過程に歸り、之と共に哲學も亦主情時代となりぬ。エピクロス派その他の幸福主義は即ちこれなり。懷疑は無統一なる思潮界の表號なり。スケプヂチスムスが一切智識の放棄はやがて主情時代の適例にあらずや。幸福論より更に懷疑説に至

れる希臘思潮は、再轉して現世主義の反動たる新プラトーン派を出して後、全くその系統を絶ちき。

希臘の文明は、要するに文明史の縮寫なりき。その社會的状態は吾人之を説かざりきと雖、該民族の特質と自然的境遇との稀なる適合は、二千年の古時に於て、社會的生活の極致に接近したる趣あり。その反映は神話の詩篇に現はれ、造形美術の空前の發達に現はれ、社會發達の過程はその全文明、ことに思想遷の史に名殘なく明示せられたるに近し。吾人は、決して、ヘレネスが美の觀念を以て、完全無垢のものとなさず、又その倫理思想をもて、後代に絶せるものなりとせず。然れども、此両者が希臘に於ては、巧に相調和せられて、神話に現はれ、美術に寓し、愛の哲學に潛み、彼の特に希人にするしとせらるゝ善美合一の思想が、啻に理論として止らずして、現實にそのおもかげを残した

る無比の大觀に至ては、何國何代の文明か能く之に若かむや。予が希臘の文明を説いて、その長きに失するの嫌を敢てせし所以は、實にこの甚深の意義を明かにせんが爲なるのみ。

(六) 七丘城の文明と神の御國と

始めは武力により、中ころは教權により、終りは法律によりて、三たび天下を統一したる七丘城の文明は、その固有のものを永むれば只法律あるのみ。文藝も哲學も美術も、旨として希臘の文明の繼承に過ぎざりき。ヘレネスの閑雅優美なるに反し、ラテン民族はその強固なる志操を以て優れりき。彼は空想的にして美を愛し、此はあくまで實際的にして實利を喜ぶ。彼を以て情に配せんか、此は即ち智に比ぶべし。既に情的なり、故にその文明は藝術と詩歌とに於て無比の發達を遂

げ、既に強固なる志操を有して實利を喜ぶが故に、その文明は法律に於て空前の進歩をなし得たり。而し民族が文明の特質は根本よりおのづから異りき。

羅馬は實際的國家なり、實利を旨とする國民なり、強き意志を以て勝りたる民族なりき。個人の心理的事實は姑らく措き、國民心意にありては、そが意志の決定は主として情智二元の勢力消長によりて、あるは情的となり或は智的となること、先きに述たるが如くんば、強固なる志操を以て勝りたるラテン民族が智を貴べるは當然なるべし。然れども、既に實利を重んずるが故に、その智は究竟現實に拘々し、經驗を離るゝ能はざる底のものにして、純理的冥想的の智にあらず。されば羅馬の宗教が、外形に於てヘレネスの夫に似たるに拘らず、その背後に常に現實的功利的暗影の之に伴ふあり。儀式徒らに繁褥を極め

て、内面信仰の情熱なかりしは、亦理の見易き所なり。哲學亦是に等しく、形面上的探究の如きは羅馬人文の中にありて毫も進歩せず。否、むしろ抛擲せられたり、僅かに希臘哲學の一部が流行したりと雖、これらはた羅馬人の實利的傾向に投合せし倫理學のみに過ぎざりき。要するに羅馬の人文は實利思想の文明なり。以て僅かに羅馬の文明の名を止むるに過ぎず。餘他の文明は希臘の夫の繼承、否、模倣に外ならず。而して羅馬の文明史上の功は、自家獨有の文明を爲し、が爲ならず。實にその武力によりて希臘の文明を世界に後昆に傳へたる點にありと云ふ可し。

宗教既に然り、哲學既に然り、文學も美術も希臘の繼承の外は、別に羅馬的なる特有の產物絶へてあらざりき。ひとり建築術は希臘以外の特長なきにしも非ざれど、その特長はやがて羅馬人の風尚を曝露し、

他の文明とあなじく、實用を主とせるに止まり、美的元素はその第二位に退けられ終んぬ。それ情は活動の力なり。而して羅馬人の活動は武力的、經略的の方面に費消せられたるが故に、その他の方面に向うて活動すべき餘地あらざりしは、自然の數なるなからんや。

羅馬帝國の末路に至り、やい注目すべき現象は生じたり。信仰の形に於ての情は、實利的の形に、ついでなれたる智に反抗して起りぬ。基督教と羅馬帝政との衝突、これなきに、こゝに始めて意義ある社會過程を羅馬の文明中に見出し得べし。人生本然の内面的要求なる實質的、原因、その羅馬帝國の國是との關係は、爰に説くの要なし。唯吾人は、久しく現實的智識の壓抑に忍びたりし情の反動を此に認むるを要す。強弩の末勢とは云へ、東羅馬帝國が極力無慘の迫害も、遂に基督教徒を如何ともし能はざりし所以のものは、又以て二元の對立的性質が

如何に根抵の深きかを示して餘ありと云ふべし。

歴史は反覆し、文明は成壞す。東羅馬の末路に起りたる、新民族の勃興と人種の大移轉とは、舊來の文明を其根本より盪搖せしめて、新なる文明の進路を開展せしめにき。然かも事實は濶歩せり。歴史は思想に先ちぬ。新活動の出現は將に來るべかりし新文明の爲に荆棘を開きたりと雖、根帯深き舊文明は未だ俄かに瓦解せず。またも照せる東方の光は、羅馬帝政主義の殘果を促して、七丘城の古都に教權の根ざしを固めしめ、新舊兩文明の氣運動搖の中に、法王政治の花は開落せり。わい基督教、固これ博愛主義、人道主義の宗教に非ずや。羅馬帝國の武斷的國家主義の衰亡に乗、此に反抗して能く克ち得たる文明にあらずや。その人心を結合統制すべき力は必ずや内部信仰の力ならざるべからず。潜在的感情統一ならざる可からず。然るに底事ぞ一朝廢

殘の羅馬帝國の古都に入るや、早くも其強制的威力なる國家主義に俗化せられたらんとは、穢土の風土何ぞ能く天上の國神の都を建つるに適せんや。宜なり新機運が暗黙の中に推移するにつれ、法王權の花、早く五衰の花を帯びて、神の教徒らに人園の塵に汚れしこと。

さもあらばあれ、法王政治は舊文明廢れて新文明未だ起らざる中間の時代にありて、唯一人心結合の中核たりき。その一時國家の上に立ちて、權力を持し得たる所以は此にあり。然れどもこれもと内部的統一にあらず、智情の圓融相即にあらずして、智的形式中に枉屈せられしものに過ぎざりき。表面的統一にして二元の危き結合に過ぎざりしなり。

法王權を中心として、危き統一を續けたる過渡の時代に於て、智は竟に基督教的哲學以上に達する能はざりき。父老哲學は信仰歸依に基

きて、基督教と他の宗教の調和を謀りしに過ぎず。訓釋的學は純正的學の見地より、基督教の合理を證せんと努めしもの前者は無能に終り、後者は信仰の爲めに智を枉屈せんとして亦達せず、却て理信乖離の端を開き終んぬ。共に之れ智を以て教權の奴婢となさまくせしもの、智は遂に自由なる思辨に遊ぶこと能はざりき。

此時に當りて情は一面實行的生活的方面の活動に勞れ、他面信仰の中に吸収せられて、亦同じく最高の活動を爲すを得ざりしなり。故に希臘の初代の如く傳說的神話的詩歌に向ひしも、到底ヘレネスの優美典雅なく、彫刻、繪畫、建築の如き霸絆藝術中にその游戈を試みしのみ。文學としてはダンテの神曲あり。中世の情的活動に於ける異數とす。

法皇權の治下にありては、前に述べたるが如く、智情ともに充分の活動

を爲すを得ず。鬱屈せる勢力豈に爆發の機なからんや。果然智情ともに法王權に反抗して立てり。文藝復興と宗教改革と即これ。情と智との危き結合なる法皇の教權、因循姑息、形式主義、傳説主義なる羅馬教會及その哲學は、件の兩運動の爲に敢なく粉碎せられ終りたり。かくて中世の文明は終を告げぬ。かくて近世の赫耀たる新文明は起りぬ。

### (七) 近代思想界の分野

萬法は流轉せり、時勢は推移せり、局面は回轉せり。宗教改革の餘波は三十年戦争となり全歐を擧げて一時悉く其渦中に入らしめぬ。此の如き社會的變動の結果は萬般の活動姑らく滯止するが常なるに拘はらず、將に伸びんとして久しく屈したる活動力の潜勢は、毫も之が爲に妨げられず、北歐新興諸國の國勢は駭々として進み、智識の進歩

特に自然科学の進歩は有史以後誠に前代未聞なりき。此自然科学の大進歩はほとんど總ての舊思想を根本より動かして、其の世界觀人世觀をしてまったく刷新せしむるに至りにき。思想をして一切の傳說的因襲的威權の束縛を脱して、自由の空氣を呼吸するを得しめたる、自然の觀察に本づける經驗的知識を重んずるに至りたるは、其の争ふべからざる結果なりき。

此大變化の影響は直ちに思想界に及びて、哲學の上に現はれぬ。先づ起りしものはベーコンを祖とせる經驗派の哲學にしてその名の示すが如く經驗的知識の重んずべきを見て、因襲的傳説を斥け、その研究法はスコラ派が唯一の論法たるアリストテレスの演繹論理を離れて、歸納的論理に基くべきを主張せり。疑もなくスコラ哲學に對する反動にして、自由討究の思想と經驗の推重とはその主たる特質

なりと云ふ可し。

此英國思想と相對して、大陸に於てはデカルトの唯理説ありき。唯理派亦スコラ哲學の反動として、傳説を斥け、自由討究を重んじたるは經驗派に等しと雖、後者が知識の根元を經驗に求めしに反して、前者は之を純粹思惟に求めたるを異れりとす。即ち經驗派は知識を外に求め、唯理派は之を内に求む。換言すれば彼は認識を客觀にありとなし、此は主觀にありとなす。兩派の異なる所は實に認識の問題なりき。此の方面よりのみ觀すれば、共に純粹思索の事なりながら、經驗派は智を代表し、唯理派を情は代表すと見るを得べし。

英の經驗派と大陸の唯理派と、相對峙して譲らず、互に鎗を削りて戦ふこと百五十年、遂にヒュームが懷疑説となりぬ。懷疑説は即ち思想の混亂統一なきより起り、主觀的、個人的、感情的主義なり。さればヒュー

ームが懷疑説は遙かに希臘の詭辨派と相呼應し、その哲學史上の地位亦之に同じ。希臘哲學に在ては此懷疑的傾向を脱して再び智に還りしはソクラテスなりき。經驗唯理二派を調和して批評哲學を建設せしカントの地位はソクラテスの夫にひとし。希臘の哲學も近世の哲學も、智に始まり、懷疑(情)に流れ、再び智に歸りたる過程に於て符節を合するが如し。ソクラテスの哲學がプラトーン、アリストテレースを通じて希臘思想界の霸權を握りたるに等しく、カントの批判哲學、理性哲學はフ・ヒテ、シェリングを経てヘーゲルに大成し、近世思想界の盟主として、天下統一の霸業を成し、哲學史上絶代の壯觀を縦まにせる、何ぞ夫れ盛なるや。加之希臘に在りてはア氏の死亡とともに、やがて凋落衰枯の悲運を呈せるに反し、理性哲學は更にシヨールペンハウエルを得て形而上的方面に更に一層の隆運を誇り、ハルト

マンなほその殘壘を守りて當代の重鎮たるに至ては古來思想界の覇者誰かよく比肩せんや。  
 哲學上の盛觀と相並びて、能く歐洲人心の推移を代表し、社會發達の過程を示せるは文學なり。唯理説の一世を風靡せし餘勢は文學に及び哲學的文學一時流行せり。然れども文學はもと情の領域なり。おに久しく理智の横行を許さんや。反動は忽ち起りて感情主義の文學となり、情は智に對抗してその頭をもたげたり。哲理的文學と感情主義の文學との對峙は經驗派と唯理派との對立に似たり。その極、彼に在てはヒュームの懷疑説を生じ、此にありてはルーッソーの自然主義を出しぬ。

ルーッソーはもと文藝の人にあらず。その自然主義を唱へしはベスタロッチ、コメニウス等が教育主義に對する反抗の叫なりき。懷疑説

によりて倫理の標準はその立脚を失し、文學にありては感情主義の流行あり、人心歸適する所なく、社會的狀態は紛糾を極めたるに當り思想界の懷疑説と相並びて自然主義の現出せしは當然の數、怪むを須むざるなり。ルーッソーの理想はロムム、ナチュレルにありき。彼のエミールは即ちこれなり。歴史的威權を蔑視し、聖典を抛擲し、ひたふるに經驗を重んじて自然に歸らんとせるは、正にこれ當年の思想混亂中に生れたる情の煩悶の叫にあらざるや、而も吾人を以て見れば自然派はなほ感情主義の一變形のみ。

然れども自然人は遂に之を現實に覓むべからず、人心は煩悶に安んじ得ず。是に於てか去てその安慰を希臘の文學に求めたり。古典派即ち出でぬ。感情主義の横行は文藝の世界なりとは云へ、智の遂に忍ぶにたへざる所、その情智の調和圓滿なる希臘の文學に赴きしもの寔

に所以あり。恰もこれ認識論上の主觀主義と客觀主義とが、カント哲學の中に調和せられしに相應す。古典派の泰斗ゲーテ、シルレル等がカントの美學を奉せしは、實は此内面的關係の密接なるに依らずんばあらず。

世に萬世の帝王なし、學界の霸權あに長へに理性哲學に在らんや、中世の文明を打破するの契機たりし自然科学の進歩は、十九世紀に入りて更に／＼に進歩せり。その特に著き勢力は實にダーウソンの進化論なりとす。此生物學上の大発見は、精神科學を根蒂より顛覆せんもの運命を受けて生れたるに似たり。春風春雨能く花を綻ばしめ、春雨春風またよくこれを誘うて去る。自然科学の進歩を機縁としてさしも、の覇業をなし得たるカント哲學の大系統も、今や再び自然科学の巨人によりて蹂躪せらるべき運命に入れり。生物進化論と生理學の進



歩とは從來の冥想的内省的心理学の誤謬を指示して、その改革を促したり。爾來心理学は一變して實驗的時代に入りぬ。一切の精神科学に基礎たるべき心理学既に此の如し。獨斷的内省的心理学上に立せられたる認識論の價值は忽ち下落せり。フェルナンブトジュステールは震撼せられたり。その倫理見の標準何ぞ半乎たるを得む。道德の標準は又もや疑問の暗雲中に潜みぬ。かくて再び人心は歸依の所を失ひぬ。中世の殘物基督教の教義、亦自然科学の爲に破られて統制力を失へり。思想界は混亂せり。群雄各覇を争うて業未だ成らず。是に於てか思想界は又再び社會過程の第一期に近づけり。此新なる感情主義は個人主義の形に於て現はれたり。カスバル、シュミットの「唯我獨尊」はこれなり。キエルケゴードの宗教哲學は是なり。而してニーチエの超人主義、本能主義、君主道德主義も亦これなり。此三者の思想いか

に極端なりども、妄りに盲目的反動と呼ぶ勿れ、妄りに狹隘なる倫理見より邪道視するなかれ、亦これ一部民心の反映にあらずや、社會心意變遷の必然の過程にあらずや。之が批評は決して倫理見上の成心よりすべからず。社會發達の根本原理のみ獨りよく此が判者たるを得べけんなり。

此近世思想史上第二の懷疑なる、主情的個人的精神の勃興と平行して文學的嗜好も亦變遷せり。古典派の反動はロマンチズムとなり、再轉して傾向主義となり、三變して新自然主義となりぬ。此新自然主義は思想界の個人主義感情主義本能主義と密に連關せること、なほ古典派のカント哲學に負ふ所あるに同じ。彼の放浪主義神秘主義の如き此派に屬す。

嗚呼民心は今復た懷疑の雲に閉されつゝあるなり。アフラマツド

文藝小觀

とアールマンとの戦闘は未だ結ばれて解けず。誰かよく二神をなだむるものぞ。何の時にか天上の平和は来るべき。



## 文 藝 小 観

### 短歌の詩的價值

上世は邈たり、紀記の叙述いとおぼろげにして、我が民族の祖先が如何ならむ形をもて其の敦朴なる詩想を表白したりけむかはさだかに知るに由なけれども、之を他の國民の詩史に徴して攻ふるに、其始に於ては蓋し極めて單純なるまた未だ一定せざる律と調を備へたる數句の律語に過ぎざりしなるべし。彼の世に傳ふる素尊が八雲たつの御歌の如きは、想ふに當時存せざりし數多き詩形の一たりしのみならず、只此体が我民族の性情に適へる所ありて、能く他の諸體をして悉く之に歸適せしめ、延いて後世の歌人をして此域外に逸する

を得ざらしめたるは、事實上疑ふべくもあらねど、直にかの御歌をもて我が國歌の濫觴なりと推せむは速断に過ぎたり。如何なる理由ありてか、此昧が獨りよく他を壓して殘存するを得たりしか何故に雄渾瑰麗なる萬葉調の長歌は、此矮少窮屈なる三十一文字の短歌を排して、いよゝゝ發達する能はざりしか。這般の問題を究めんことは、國歌發達變移の史を學ばん人にとりて、頗る重要なる又頗る興味ある研究なるべく、我等亦是に關して、些か卑見なきにあらねど、之を詳に論せん事は我が當眼の目的にあらず。今はたゞゝゝ此短詩形が人文發達せる現代の人心に對して如何ばかりの詩的感興を惹起し得るか、換言すれば現代に於ける三十一文字の短歌の詩的價值如何に就きて述ぶる所あらんとするのみ。

素尊が當時より歳を閱することほどゝゝ三千年。時は移りぬ。世は進

みぬ。人心の開發、人情の相異、桑滄の變も管ならざるは云ふを待たじ。然かも此長年月の間、大變遷の中、短歌は依然として我國詩唯一の形式たりき。春は花、秋は紅葉、螢飛び交ふ夏の夕、雪滿山をうづむる冬の朝、時にふれ物につけて、歴代の才人等は其錦心蘭腸にあふるゝ感興を托するにたゞ此あはれなる詩形を以てして恨みる所なかりしが如し。されど、こは我を等してさばかりの疑を抱かしむるに足らず。疑ふ所は實に少壯歌人の態度にあり。

詩形改良論は屢唱へられき。新体詩は種々の形に於て試みられき。然れども論議は直に實行となる能はず。少數作家の試験はやがて一代の摸表となる能はず。短歌はさながらにして流行せり。歌人は七道に洽ねく、駄作の三十一字日々月々の新聞雜誌に滿載せられ、月並の歌會は到る所に行はれて、閑人消閑の手づさみたり。めでたしと云

ふべし。然り、若し所謂歌人てふものが、悉く當今の進歩せる學識なき人々なるか、さらずとも徒然をまざるゝ老の樂に過ぎざらば、我等は之をもて太平の余象として、誠に之を慶賀せむ。されど、世に謂ふ所少壯歌人の中には、純乎たる文學的素養ありて、歐米諸國民の豊富なる詩想を伺へる者あり。さらずとも、文學の何たるを解せるものから、なほこの窮屈なる三十一文字の詩形に甘んじ、之をもて我國民的詩歌たるに足れりとなすものゝ如く、好んで自ら小天地に踟躕して而してその充分に自己の詩想を託する能はざるを嘆ずるに似たり。愚も亦甚しからずや。彼等の中、ともすれば、新体の短歌と稱し、改良の和歌と唱へて、不調漫律の句を案出して得々たるものあり。或はさながらに舊調を踏襲して甘心するものあり。それすら業餘の心やり、一時の即興ならばこそあれ、之をもて完全の詩形となし、他に推獎するもの

あるに至りては、むしろ滑稽に類せずや。今この幾度か繰返されたる問題に就いて敢て卑見を述べんとするは、抑も之が爲のみ。聰明なる批評家は既に數多たび此問題を討究しき。さりながら其言ふ所實に詩としての短歌の形に就ても、しは數理的に論究して、和歌の命運既に末なるを斷ずるに止まりき。若し短歌の缺點にして、單に之に止まらしめば、予がこゝに述べんとする所は、全く蛇足なるべし。我が論の主旨は此に非ずして、彼にあり。形式論に非ずして、實質論なり。數理的論究に非ずして、心理的考察なり。言ひ換へなば、心的活動發表の形式としての、短歌の詩的效果を討ねむとするなり。善美合一論は古希臘の哲學者間に有力なる説なりき。美的鑑賞をもて智の作用に屬すとせし學者は嘗てこれありき。されど、近時の學説は之に異り、美的鑑賞の力もて、情の方面に歸せしむるが普通なり。ハ

インリヒ・フォン・シタインの如きは、美學は情に就ての學なりとまで斷言せりと覺ゆ。氏が論はよし過ぎたる所ありとすとも、少なくとも詩を以て多少昂揚せる感情の發表なりとせんとは、殆んど異論あらざるべく、特に抒情詩に關しては、一人として之を拒むものなかるべしと信ず。されば、今短歌を以て、其抒情詩たるが故に、ステッケルの言へるが如く、人の心的即ち内部性命の活動にして、感情の表白なりとなし、感情の心理より追究して、そが復雜にして且智的活動の盛なる現代の人心に對していかばかり詩的興味を喚起するを得べきかを考究せんとするは、決して不當に非らじ。されど、こゝに一の注意すべき事項あり。我が短歌の抒情詩なるとは、浴ねく許されたる説なりながら、猶美學もしは西歐の詩体に親しからぬ人々をして、疑を抱かしむることなしとせず。こは其等の人々も、和歌史中の大半を領せる戀歌

の抒情詩たるを非認するにはあらねど、風景又は花鳥草木など、自然の事物を咏じたる歌をもて、叙事の詩とすすが爲なり。げに表面に現はれたる所より觀察すれば、これ等の短歌は、只景物を叙し、花月を叙するに止まるが如しと雖、仔細に其裏面に伏在せる作者の情懷を認め此情懷こそ一首卅一字の小律詩を咏ト出さしめたるものなれと知らば、此等の短歌と雖、ハルトマンが所謂繪畫的(即抒情的)叙事詩にあらすして、叙事的抒情詩もしは純正抒情詩の一類なると、容易に了し得らるべし。かるが故に、余は姑く短歌を以て悉く抒情詩と見做して論せむと欲す。

情の研究は近代に始まりしが故に、其性質に關しても學者各其見を異にする所多く従て不明なる所多しと雖、大體に於ては一定せるものなきにあらす。其略一致せる所の説に基きて、短歌の詩的効力を論

らふも亦可ならずや。情と智的活動とは、實際に於ては殆んど區別する能はざる邊ありと雖、抽象的に考察せば決して同一には非ず。心理學者が情調と名付くるものに至りては、常に感覺知覺にさへ隨伴し來るが故に、其間に於て相衝あるべくもあらねど、複雑なる情緒に至りては、智的活動と方向を異にする事多く、從て美的感情は、智的活動と常に同調なると能はざるが如し。ミルトン論の著者が、文明即ち人智の進歩は詩境を狹隘ならしむと説けりしは既に古りたり。幾人か之が妄を唱へて今はさばかりの偏見を抱くものありとは覺えざれど、此説また頗る當れるふしなきに非ず。文明の進歩、人智の發達は、吾人をして古代の人々を動かしたる如き、些かなる感情に動かされしめず、又其かみ優美なる人心が夢みてし、今よりすれば科學の爲に、明かに破せられ終りたる如き、幼稚なる原始的想像の中に、限りなき美

を見出づる能はざらしむ。さらば此詩的想像をして、舊時の魔力を失はしむる點に於ては、文明非詩的論も全然虚偽たりとは云ふべからず。現今の心理學は之が解釋に究るとなきなり。所謂情調は、感覺に寓し、寫象に寓し、從て總ての智的行動に隨伴すれども、此は客觀的性質を帶び、やゝ不變的傾向あり。彼は主觀的にして、時々刻々その主觀の狀態と共に變化し、認識の所生にわらずして、生理的背景を具するの差あり。簡單なる情調に於て、既に然り。進んで美的感情の如きものに至りては、いよゝゝ智的活動と背反乖離する所あり。感情の勢力強き時、智的活動は其明確を缺き、智的活動の正に旺盛なるとき、感情の流頗る緩なるを法とす。さりながら、智力の進めるものは感情の力が劣等なる智力のものに及ばずとは非ず。否、却つて其智的活動の休止し、もしくは疲勞せる瞬間にありては、情の昂揚する事一入強き所

ありと雖、之を相對的に、即ち同一時に於て觀察するときは、兩者の消長は逆比の關係を現するを見る。されば能く原始的人心、換言すれば、野蠻人、兒童及多感なる婦女子の心情を激せしむるに足る事實、もしは詩歌と雖、文明人士の心、または優等なる智力を有するものに對しては同一の勢力を及ぼし難きことあり。是を以て、原人の心に限りなき快感を惹起するに足るものと、開明人の心に對する夫とは趣を異にするが常なり。若し、古代の詩歌と近世のそれとを比較研鑽し、若し、人心の美的嗜好の變遷を看來るときは、容易に此事實を認め得べし。例へば、西歐の古詩特にヒュメノンに見らるゝ反復法、バビロニアの頌歌に於ける同一詩想の異なりたる表白、エダの讚歌に現はるゝ如き形容語句の連鎖、さてはかのホメーロスの詩篇に著るき反復法の如き、近代の詩人に珍重せらるゝ修辭法に非ざること、は、前陳の事實が

詩歌の形式を通じて現はれしものと見るを得べし。然れども、其顯著なるは詩想に於て之あり。今ことごとくしく例證せずと雖、西歐の詩に通ずるものは、何人も此事實に心づけるならん。また古代の神話はその當時有せりけむ程の感激と興味とを、現代の人心に與ふるを得ざるが上に、縦ひ之ありとも、古今頗る趣を異にするは争ふべからざる所にして、亦上述の理由よりして解釋し得るなり。情は又生理的心理學により明となれるが如く、一面精神的活動に屬すると共に、他の一面に於て生理的基礎を有し、従つて我身に執着する所あり。此我身に於ては、其幼稚なる觀念に於ては有漏の我身に於て、有形の我身に於て、心的開發及道德的意識の發展と共に、漸く變じて廣汎となり、高尚となり來る。プラトニーニツシエリーベの如きは、最も高尚なる意義の我殆んど客觀的旨趣を有せる我に執着する情即ち



愛なりと云ふを得むか。

前に述べたる情の性質に關する二條件、即智と情との勢力消長の關係及情の執我的傾向は、實に本論の二大前提なり。今此兩前提より推論して、短歌の詩的効力を論せんと欲す。

我が卅一文字の短歌が抒情詩なると、及び詩特に抒情詩は人の内部生命の活動にして、感情の表白なる由は既に述べつ。然らば即ち短歌も前述二條の要約に規せらるべきは自ら明かなり。されど、作家自身の感情の興奮の狀態と、其作品によりて讀者の心裡に喚起さるべき情とは、ひとしなみに論ずると能はざる所あり。情そのものが、由來我に執するの傾あるが故に、作家にとりては其胸裡にさはげる情波の一部を咏出づるのみなりとも、之によりて其全部を喚起して感興を大ならしむるを得む。讀者即ち鑑賞者にありては然らず。作家と同様

なる心的狀態に在らざるが爲めに、作品を讀みて享樂し得べき詩的快感は、其作品の上に現はれたる限り、もしは其れに類せる自家従前の經驗又は想像を喚起するに止まるべきのみ。是を以て、抒情詩の批判が最も主觀性を帯び易きは、嘗て屢聞きぬ。されば抒情詩の作家は他の間接叙法に因る詩歌に異り、自家と同一なる心的狀態を鑑賞者の眼前に浮べしむる事頗る困難なり。これ抒情詩一般に就て言ひ得べき所にして、短歌にありても亦然り。然るに我が短歌の如きは、僅かに卅一音の小詩形、五句の小律語にすぎざるが故に、作家の享樂せる美的快感の極めて小部分を表白し得るに過ぎず。隨うて、之によりて鑑賞者の享受し得べき快感は極めて小にして、又極めて臆ろげなるを免れず。未だ詩的活動の盛ならざる原人の情は、いさゝかなる事物にも動かされ、一揚一抑極めてうつり易きこと、兒童に於けるに同じ

故に短少なる詩形に現はれたる作家が感興の小部分と雖、能く素朴なる原人の心を動かすを得べく、且そが簡單なるリズムも、亦能く彼等の心律（リズム）に適應して、之を鼓舞し、依て以て吾等には想像し難き程の感銘を與ふるを得む。我が短歌がその始めに於て、能く他の數多存じたりけむ諸詩形を壓するを得て、古代に於てはたえて他の新詩形を要求するの必要を見ざりし所以のものは、亦一面の理由をこゝに有するには非ざるか。

敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花の一首、よく我が民性をつくすと稱せらる。然り、幸か不幸か、げに我が國人はよく花を愛で、能く花に似たり。その三日見ぬ間に咲きてちる移ろひ易き點に於て、その艶麗人を驚かしむるも、忽ちさむる色に於て、されば、由來情に動き易く、赫々たる華美の事業を好めども、持久の念にとぼし、其樂天的

の性質、一たびは左、一たびは右、動搖又動搖、活動の波長、太だ短かうして、昨は落下、百丈の瀑布に似るも、今は止水、動かぬ盆池の姿に似たり。故によく春花秋月をよるこべども、非情の萬物に、永劫の觀相を見出で、争鬪混濁の人の世に、淨土の光を求むる、幽遠深邃の思慮あるに、非ず。生別失戀に身を忘れて、悲むことを、知れ共、天人の五衰に、現世の無情を觀取し、常樂の彼岸に遊んで、穢土を嫌惡する、甚深沒涯の哀觀を、抱くに非ずたい、情波の蕩搖に、まかせて行動するが如き、弊無しとせず。是れ蓋し我が民族の大缺點なるべし。此の如き民族の祖先が、其智的開發の未だ幼稚なりし頃、に於て、短歌の如き、短小窮窟なる詩、身に甘んせしは、敢て怪しむに足らず。また、此小詩形が、三千年の久しきに亘りて、なほ能く我が國民の上に、其勢力を維持せし、所以も、亦怪むに足らざらむ。

然れども時は移りて今や科學の世となりぬ。神祕の雲萬象の影をおほひて、自然の事物ことごとく人格化せられ、古傳中の人物に混入して絶大の勢力を人心に及ぼしし、そのかみの我等が祖先の心は、決して現代のそれに同じからず。智巧の精は天造の妙を嘲り、幽を聞き玄を明らかに餘す所をからむとす。智的活動此の如く盛なるが故に、其精波はみだりに揚り易からず。されば複雑なる現代の人心は情細巧妙なる叙事の筆、もしは人情の幾微を描寫せる世相の詩に適すれども比較的散漫なる抒情詩特に短歌の如き主觀的情懷の一部を表白せる律語によりて、その情波を催起せらるゝこと能はず。國民的詩歌として短歌の不適當なる第一の理由は實に此にあり。我が和歌の現代に於ける詩的効力の貧弱なる所以も亦實に此にあり。人心の複雑多様なると共に、各人の心調は又益背離すること多し。然

るに抒情詩は主觀的傾向を帶び、隨て短小なる和歌の如きは最も主觀的なるが故に、作家自身の感情を裕に表白すとすども、心調を異にする多數の人を以て對して、同様の効力を有すること能はず。比較的齊一なる情に支配せらるゝ古人の心を動かし得たるものも、今に於ては殆んど其價値を失ふに至れりしは當然の理なり。短歌の現代に於て詩的効力少なき理由は、これより來る。

從來の評家動もすれば卅一字の小詩形が充分に自家の詩想を表し能はざるを以て、その價値なき所以たりと説きぬ。余が見る所誤らずば、之れ説て未だ精ならざる憾あり。數句の語もしばく、われ等が詩想の最高點を表し得て、われ等自身に對しては充分の効力あること尠からず。只その缺點は、前陳二面の理由よりして、自家と同一の詩的感興を他人の心に喚起する能はざる邊にあり。又動もすれば、朦朧の

弊を以て和歌を難するものありと雖、亦必しも當らず。美神は明々白地の所にのみ住するものにあらず。これむしろ智の境のみ。末は何處と見へ分かぬ青海原のほとり、月影朦朧なる所無限の詩趣を包むに非ずや。多感多情なる詩人の胸裏、情波しきりに騒ぎて止まず。感極りてライアに向ふとき、言はぬは言ふにいやまざる感興あり。詩人その人の境よりして云へば、短小と朦朧と、必しも憂ふるを須むざらむなり。

嗚呼、開國以來殆んど唯一の詩形たりし卅一文字の短歌は國民的詩歌としては、現代の人心に對して充分の詩的價值なきこと、以上縷述せし所の如し。果して然らば、しばし人の唱ふるが如く、短歌は全然價值なきものなるべきかあらぬか、乞ふ少しく之を稽へむ。

我が短歌が昂揚せる感情を表はす所の抒情詩としても、その詩形の

餘りに短少なるが爲めに、智的活動の旺盛なる、從て情の激昂少なき現代の人心に對して、詩的感興を催起するの力とぼしき由は既に述べつ。況んや複雑なる事件、心情等を、叙説する叙事詩としてはその形式の不完不具なること言を俟たじ。然れどもこの矮少なる小詩形も或る種類の美と、或る場合とにありては、音に過去に於て頗る成効せしのみならず、又現在に於てもなほ豫想外の効力を有することなきにあらず。然らばその種類とは何ぞ、その場合とはいかに。

美なりと云ひ、うるはしと呼べるべきものは、分釋の原理により種々に彙類せられ得む。試みにハルトマンが説に觀るに、美てふ屬性を擔へるもの、換言すれば存在せる所の美は、三つの準繩によりて彙類することを得べし。先づその純主觀的なりや、はた主觀的なりと同時に客觀的なりやによりて區別することを得べく、次に假象の實在に對す

る關係によりて類別することを得べく、終りに美の成立の模様によりて彙類することを得べし第一の分類法に因るときは純主觀的な空想美と客觀的實在によりて擔はれたる美とを分つを得べし。彼は客觀的實在的存在の根底を缺き、此はかゝる根底を有するを異れりとなす。第二の分類法に従へば羈絆美又は不自由美と、自由美との別を生ず。前者はその假象に相應する實在を有し、隨者は其假象と異りたる、無關係なる實在を恃むの美なり。第三の分類法に因れば、先づ全然無意識に生せられたる美と、意識の助をまちて生せられたる美との別あり。就中後者はさらに二小類に分たる。一は即ちその生成に際して、製作者の意識が之に與ると雖、しかも美學上の見解の關與する所なきものにして、他は即ち製作者の意識とともに、美學上の見解も亦之に關與する所のものなり。そのまたく無意識的に生せられたる

るものは、自然美と呼ばれ、美學的見解は與らずして、たゞ製作者の意識のみ與るものは、歴史美または人文史的美と稱せられ、美學的見解と製作者の意識と兩ながら加はれるものは、藝術美と名けらる。這般三種の分釋原理は互に錯綜する所あること、ハルトマン自身の言ふ所の如し然れども此等三種の彙類法は、各異なる原理の上に立せらるゝものなるが故に、その各々の原理によりての分類のみにては必ずしも論理の明確を缺ぐものに非ず。氏はまた此三種をもて、美の分釋原理を蔽ひ悉せるが如く考ふるに似たれども、そも亦必しも然らず美なる屬性を有するものゝ種類によりて彙類せる學者あり。空間的と時間的とを分つものあり、これ各その觀察點を特にし、研究の目的を特にし、分釋の原理を異にするより來るものにして、苟も原理を立てて明瞭判然たる分類を施さん上は、論理上の非難あるべからざる

なり。必しも二分法を取るの要なきなり。必しも不容間位的なるを要せざるなり。また必しも如上三原理中のものたるを要せざるなり。要は唯その研究の目的に恰好ならんことにあり。余が刻下の目的は、短歌なる小詩形もて歌ひ得べき、美の種類を分たんとするにあるが故に、よし理想化の度は低しども、その既に歌人てふ藝術家の所生なる上は夫れ自身藝術美と見るべきこと論を俟たず。然れども、藝術美と雖根底よりして空想の所生に非ず。自然の事物を取て配合案排し、或は人間の行動に結合せしめ、或は人物の動作を錯綜排置して、益之を理想化して、茲に空想の創作を全うするものなり。されば、この空想の創作たる藝術美の材料としての美を彙類せんこそ、余が當眼の希望なれ。

前陳の目的を以て、余は今藝術的技巧の材たるべき美、即ち實在によ

りて擔はれたる美を分ちて、自然美及精神美の二となさむと欲す。この分類たるや、決して一家の私見に止らず、美學者中之に同じき類別を爲すもの少からず。唯その類別の目的必しも余が目的に合せざるを異りとするのみ。此等兩種の美は、ハルトマンが謂ふ所第三の分類によれる三種中の二種に相應し、第二分類法の第一類の多數を含み、第一分類法に従へば第二類に大同なり。更に他の語もていはゞ、知覺假象を爲す所の美と、人間美及史美とに恰當すといふも不可なし。然れども、人間美といふときは、形骸を有する生物としての、則ち人身の美と精神的存在と見ての人間の美とを合するの嫌あるが故に、故らに精神美と呼ばんとす。ハ氏の所謂史美又は人文史上の美と稱するものも、亦此名辭によりて現はさるゝを得べし。

自然美てふものに關しては、古來學者間に論争の存する所にして、シ

エリングの如きは之を美學の外に放逐せまくせり。そは氏が如き抽象理想主義より見ば、或は當然の論斷なるべし。ゾルゲル及びドイチンゲルの如きは、自然的個體の美を否定して、只全體としての自然の美のみを認容せしのみ。若しそれヘーゲル及びトラインドルフの如きに至りては人間以下の自然にのみ自然美を許して人間に於る自然美を認めざりき、然れども是等の論議にありては、自然に美なるもの (Das Naturschöne) と所謂自然美 (Naturschoenheit) とを混同し、若し自然に美なるものでふ義を誤解して、自然的個體そのものゝ上に美あらざるがゆえに、即ち自然美なしと速斷せし憾なしとせず。さればシヤスレルの如きは、ダス、ナツィアシェーネとナツィールシェーンハイトとを嚴に區別せり。然れども、吾人はカリエールと共に吾人の意識上に存在する主觀的現象、又は自然的實在の知覺せられたる像にのみ美

を認めて、自然的實在そのものに美を許さざるがゆゑに、その單に主觀をよそにしては美なしとの理由の爲に、直に自然美を否定するを欲せず、また自然美をもて意識上に存すとはすれども、之を空想美と分ちて存立せしむるがゆゑに、妄りに、キルヒマンに同じて理想化せられざるが爲に美ならずと信する能はず。吾人の意識上に美なる知覺假象を結ばしむるに足るが故に、自然の美を承認せんとするなり。自然美をもて精神美に對せしめんことは、名に於ては或は物議を免れざるべし、若し物質論の立脚地より看ば、精神と雖或る意義に於て自然の所生なり、物質活動の一形式なるべけれども、普通に自然と相對して精神を認容し、自然科学に對して精神科學を立て、物に對して心を説き、感性に對して悟性及理性を許すが故に、今は姑らく通常の用語例に従ひて、自然美に對して精神美と名けたるのみ、自然の物象

に導かれて美的假象を結ぶが爲に自然美と稱し、人心の活動、及之に由來して行動する人物の性格によりて美的假象を認むるが爲に、精神美といふと解して可ならんか。もし強て、美的假象も亦意識中のものとして、既に精神活動なりといはゞ、或はこれを知覺美と人心美と呼ぶも亦妨げず。

自然の美は、之を空間的のもの、時間的のものに分つを得べし。空間的のものは、光線の美なり、色彩の美なり、形骸の美なり。もしくは此等の結合也、時間的のものは、音の美なり、運動の美なり。結ばれては地水風火の四元に寓して、鑛物となり、植物となり、動物となり、又人身と現す。大略に於ては、カリエールのいへるが如く、靜穩の美にして觀者をして激しき動搖を感せしむること少し、之を精神美に比するに、彼は無意識なる自然の所生にして、比較的簡單なれども、此は意識的

なる人間の所生にして、極めて複雑なり。彼は知覺し得べく、此はたゞ感得し得べきのみ。彼は音を外にしては有形に寓し、具象的の物象に宿るが故に、比較的齊一に了解せられ、此は全く抽象的にして無形なるが故に、種々相の解釋を容る。この靜穩なるところ、簡單なるところ、具象的物象に宿るところ、従うて齊一に了解せらるゝところこそ、實に自然美が短歌の如き小詩形によりて歌はれ易き所なれ。

短歌の矮少なる詩形は、唯三十一音字を有するに過ぎず。従うて複雑なる觀念を中に容るゝこと能はざるが故に、知的活動の旺盛なる現代の人心をして、容易に情昂り氣激せしむるを得ず、主我心の活潑なる廿世紀の吾人をして、たやすく同一の心調に歸從せしむるを得ず。詳らに人情の微妙を語り、世相の複雑を解釋すること能はず、抽象的觀念を操りて人間心裡の苦悶を描くこと能はずと雖、轉して自然美



を詠嘆するに至ては、なかくに恰好の詩形たることを得るが如し。自然の描寫に於ても、亦時に精細の描寫を要することあるのみならず、或る場合に於ては、その極めて必要なことなきに非ず。ラスキンが辭苔の美を描きたる如きは、その一例なるべし。然れど、自然の美は之を詩歌の材とするに當りては、繪畫の場合に於けると異り煩なる記述寫實は、美的觀賞に投合せざること多し。ナポリ灣頭の風光を詠じたる詩聖が數行の句は、優に名匠が寫實の繪畫と効果を争ふを得るに非ずや。我が短歌に於ても亦然り。紀記萬葉の短歌は、姑らく措き三代集以下の歌集に充滿せる自然美を詠じたる和歌に在ても、その秀逸なるものに至ては、よく温雅瀟洒たる自然の詩趣を發揮し悉して遺憾なきに近きものあり。想ふに、自然の美は、形象に寓すること多きを以て、云ひ換へなば具象的なるが普通なるを以て、短簡なる詩形

と雖、之を寫すに必しも困難ならざると共に、鑑賞者にとりても、亦能く作家が意中の景物をさながらにおもひ浮ぶることを得べく、自然美そのものは、感官もて寫象せられ得るが故に、到る所の景物により、通常之に親炙する所あり。従うて歌人が作を讀めば、直に自己の意識中に存せる自然美をおもひ出で、茲に美なる具象的觀念を結ぶを得るによるならん。しかのみならず、和歌の短少なる、詩人をして充分に理想化作用を逞うするを得ざらしめ、ただく美なる自然の事物をとりにて配合案配せしめ、或はこれを人事によすることありとも、ほとんどの主觀的感想を表示すること能はざらしめ、自己が感想は辛うじて言外の餘意に寓せしむるに止まり、もしこれを表示すとも、あはれどか、悲しとか、またうれしとか云ふが如き、漠たる感慨を示すに過ぎざらしむるがために、主我的なる人心にとりても、亦主觀的背戻

を免がるゝを得て、充分に平穩なる詩趣を感受するを得しむる便  
あるがごとし。

自然の美は、短歌の詩材として頗る恰好なるものなりと雖、短歌の矮  
少なる詩形は、この比較的簡單平穩なる自然美を詠歌するに於て  
も、亦弱點あるを免がれず。その簡單なるものを畫くを得れども、複雑  
なるものを寫すに適せず。自然の事物をとり來て、美的に配合しうと  
雖、仔細に聲色を描破して趣味を與ふるを能くせず。空間的のものは  
描き得れども、時間的のものを寫すこと能はず。靜止せる自然に寛に  
して、動ける自然力<sup>も</sup>しは自然物に吝なり。試みに歌集を翻して、驗竅  
せよ。霞にくもる和歌の浦、風に蘆ちる浪華江の秋、藻しほやく海士が  
かまどの打けぶる趣はこれあり、月かげくもる春の海、紅葉ちりうく  
龍田川の景色はこれあり、あるは春の夜の夢、曉天の冷氣にさめて、嶺

に分るゝ横雲の空はのかすむ詩興はこれありと雖、些々たる蘚苔の  
形色に天巧の妙を認めて、そが詩趣を發揮すること能はず。時間的な  
る聲音の美の如きに至れば、僅に擬音の語をかりて、形式的に蘂々の  
音、淙々の響をうつすに過ぎず。されば短歌が詠じ得る所は、所詮自然  
の美の一小部に止まり、彼の廣大無邊なる造化の妙巧を觀取して、限  
りなきの詩趣を闡明するが如きは、到底不可能の事に屬す。

次に精神美を材としてそが詩趣を發揮するに於て、短歌にいかばか  
りの價值ありやを考へむ。精神美は無形の美なり、抽象の美なり。感官  
によりて知覺し得べきものに非ず。感官は吾人の形骸に基礎を有し、  
そが組織も亦一定せるが故に、之によりて感受し得べき有形の事物  
に就ては、各人の心には、一の觀念を生ずるを得べし。色盲に非ざ  
るよりは、花は常に紅にして、柳はどこしなへに綠なること、些の疑義

を存すべきにあらず。然るに之に反して吾人が形骸に基礎を有せずして唯精神上にのみ感納せられ得べき精神美に至りては、萬人萬様の解釋をさへ容れ得るものあり。心靈的生命の或る作用により、ほゞ一様に理解せられ、感得せられ、忍容し得らるゝ者と雖、仔細に其しかく感じ、信じ、悟り得る過程および理由を驗し來るときは、亦決して致一なること能はざるを見る。又その複雑なること自然美の比にあらず。此は比較的簡單なる自然の則に支配せられ、彼は變化極みなき心理上の則に支配せらる、故に之を寫し之を描くにも、亦頗る精細の叙述をもてせざるべからずして、而かもなほ之が鑑賞者をして同一の心調を有せしむるに非ずんば、同様なる美的感興を興へ得べきに非ず。各人をしてほゞ同一の心調に歸せしめんことは、短小なる詩形（および詩想）の能くし得べき所にあらざるがゆえに、和歌は遂に精神美

を發揮するに適當ならざるなり。然れども或る場合にありては、この小詩形も精神美の表示に於て必しも不可能なるには非ず。即ち情の最も昂揚せる極點に於て、その最も強き感銘を興へ得べきものをとりて、この小詩形中に巧に表白するが如き場合と、千差萬別なる人心に於ても、ほゞ同一なる情緒を捉へ來りて之を歌ふが如き場合これなり。情波の蕩搖その極に達し、心緒亂れて絲の如きとき、その最も美はしきものを取り來りて、巧に排置せんか、現はす所小なりと雖、之によりて挑發し示る心的作用は豫想外に大なるものあり。和歌の此の如き種類に於て成効せしもの少からず。而してその多くは比喻によりてす。和歌集の大部分を占むる所の戀歌の如きは、むしろ後の場合に屬すべきに似たり。相思戀愛の情は萬人を通じてほゞ同様なるものにして、性格と性格との撞着、又は人情と義理の衝突などの如き、複

雜なるものと異なり、個性の差別、氣質の相違等はこゝに著くそのお  
もかげを顯はすこと少し。その情の激しきこと他の情緒に優れども、  
比較的簡單にして又相似的なり。かるが故に短歌の矮少を以てし  
ても、なほよく之を歌ふこと能はざるにあらず。加之その情の激しき  
ものなるが故に、之が鑑賞者に對して、また強き感興を與ふるの利益  
なきに非ず。然れども、これ亦僅に比喻をかりて情緒をあらはし、又は  
描象的に之を示すことを得るにすぎず。到底之を描き寫して充分に  
詩人的技巧をほしいまゝにすること能はざるなり。  
短歌も亦詩の一種たるが故に、それ自身藝術美たるは論なしと雖、そ  
の形式の矮少なるが爲に、充分に藝術的技術を用ゐるの餘裕なし。自  
然の事物をとりて巧に配合按排し、或は精神的活動の上に認め得べ  
き美を捉へて、之を形式の美に調和し、或は兩者を結合して美なる假

象を意識に結ばしむる點に於て、僅かに藝術の名を値するに過ぎず。  
然れども、藝術的技巧の本領たる理想化の程度極めて小にして、具象  
化階程も亦頗る卑く、變化を加ふること少なく、且つその實在を後景  
とするが故に、假象を遊離せしむるの困難少からず。従うて理想に遠  
きの缺點あり。その自然美を材とするに當てや、知覺假象を旨とする  
藝術(繪畫又は彫刻の類)に近く、精神美を材とするに當りては、具象化  
作用を施すの餘地少きを免がれず。詮する所、詩歌中に在ては最低級  
のものなるべきは勿論、藝術中の地位は恐らくは音樂に伯仲のもの  
なるべし。  
之を要するに、我が三十一音字の詩歌は、其形の小さなが故を以て、中  
に包容する觀念は、小少に過ぎざるの缺點あり。此缺點は、短歌をして、  
その詩的効力を貧弱ならしめ、簡單なる美を現はすか、否かは、複雑な

至るまで一切の事物万般の活動悉くこれムイゼの住地たり艶麗あり  
 温雅あり瀟洒あり悲哀あり勇壯あり陰鬱あり明快あり自然の万  
 物人間の命運すべて詩人の彩毫に任かす然るに短歌の歌ひ得る所  
 は僅にその最小部分に限り最低最薄のものに極まる改良を呼び革  
 進を唱ふと雖のそ矮少の形式は到底複雑なる事件絶大なる景物の  
 描破に適せざるなり年少氣鋭の新歌人何れぞ進んで際涯なき大  
 宇宙の美を歌はざる何れぞ拘々として五句三十一文字の小詩形  
 裡に踟躕せる國風の史を惜むといふか万物流れ方法變す何ぞ従う  
 て推移せざる詩形なしといふか形式は實質の賓なり何ぞ自から新  
 詩形を創めざる類型因襲は望むべき所にあらす願ふ所は新趣味の  
 開發にあり詩美の闡明にあり若し夫れ漢語を交へ洋語を狭んで和  
 歌の改良なりとし新趣味の開發也として得々たるに至ては聾のみ

るものを語る描くに非ずを得れども變化離合定まりなく複雑多方  
 限なきものを取り來て之に詩人の天才を加へ以て燦然たる美を發  
 揮すること能はざらしむ是が爲に小兒野蠻人と同トく殆んど情に  
 隨うて行動するが如き心的状態を有するものには効力あるへしと  
 雖知の力正に盛にして情の流緩かなる人に對してはその詩的價値  
 を有すること極めて少く平凡なる美的感情を表白し又は即興を托  
 するに於ては必しも妨なしと雖或は廣大幽遠の思想を歌ひ或は甚  
 深無邊の詩趣を發揮するに足らず美は天地に充ち満ちたり自然は  
 一大詩境なり六合の中八宏の間到處美あらざるなく碧落の上黃  
 泉の下到る處詩ならざるなし散トては萬象に寓し集りては人心に  
 宿りあるは日月星辰の運行山河水陸の形勢動植の生活春秋の變移  
 氣象の轉變さては邦國の盛衰英雄の興亡才人の不遇佳人の薄命に

盲のみ。盲者は以て文章の觀に與る能はず。聾者は以て聾色の美に與  
 かる能はず。われ亦此輩とどもに謀るを欲せず。只聰明なる新進の  
 歌人に望む。苟くも詩人をもて任せんとせば、決して此究窟なる小詩  
 形に安じて、壺中に天地を築くの徒勞を爲すべからず。荆棘の中は鴻  
 鵠の巢ふべき所にわらず。百里の地は大才の經營に適せず。宜しく九  
 宵の外に飛揚すべく、中原に角逐すべきなり。散文可なり、新律語も亦  
 可なり。唯よく遠大深奥なる詩想を托するに足るべきものを擇んで  
 縦横自在に、卿等が天才を發揮すべし。短歌の如きは、老人婦女子が閑  
 餘のなぐさみに任して可なり。たい即興を托するに止めて可也。  
 さもあらばあれ、これ短歌の實質よりしてその詩的價値を判したる  
 に過ぎず。もしそれ形式の美に至ては頗る見る可きものあり。而かも  
 そは余が本論の目的に非ざるが故に、今は言はず。

経験と批評

For I ma nothing if not critical. — Shakespeare.

Long experience made him sage. — Gay.

批評とは何ぞ。クリチークとは何ぞ。語源に溯りて尋ねればクリチー  
 クは希の *kritikos* に由りてクリチコスは更に *kriton* より來る。さればそ  
 の原義を叩けば批評とはもと分離なり、決定なり、區別なり、判断なり。  
 この分離もしは區別と決定もしは判断とは總ての心的活動に缺く  
 可からざる要素にして、これなくば萬般の事象及道理が理解せらる  
 ること能はざるのみならず、一切の現象概念もしは表象すらも亦認  
 むることを得べからず。區別、判断の作用は實に心的活動の起原にし  
 て、理性的存在としての人の内部生命は判断てふ精神作用によりて

維持れらると云ふも不可ならざるなり。隨うて此判斷力に基ける批評の能力を欠くときは、吾人はこゝにその心的生命を失へるものにして、萬象爰に形を潜め、我と云ひ人と云ふこと何等の旨趣を有することなきに至るべし。

實際上、吾人は日常の談話に際して、平生の讀書に於て、必しも批評すといはず。然れども、味や嗅や視や聽や區別の力なく判斷の作用なうして感受し得らるべきものに非ず、新に見聞せらるゝ所のもの、すべて吾人が既にその内部に有する系統中に入り來るによりて、初めて感受し得るものにして、その系統に入るや、類に同ト異を別ちて而る後、感覺あり知覺あり、表象あり、概念あり、然らばこれ既に如上の意義に於ての、即ち最も廣き意味に於ての批評を経るものに非ずや。既に批評と云ひ判斷と云ふからは、之を判するに標準なきを得ず。事

理の思索辨明には哲理的標準を、行爲の善惡邪正を分たんには倫理的標準を、藝術の批判品隲には美學的標準を必要とす。さばれ余が今述べむとする所は、最狹義の批評を意味し、専ら純文學の上に向けられたる批評に、とゞまり、純粹思惟に關するもの、即ち哲理的批判、および人間行爲に關するもの、即ち道德的判斷は、姑らく不問に附せんと欲す。

純文學の批評にありては、一切の修辭學的及美學的原理と要約との知識を要すべきは、勿論なり。雖、就中尤も重要なるは嗜好にあり。吾人が藝術特に純文學に現はれたる美を享樂するに當り、その作品に對しつゝある瞬間に於ては、たゞ、意識の上に浮び來れる美的假象が、自家の嗜好に投合するかあらぬかによりて、好惡を感ずるのみ。之れを美學の準繩にたゞし、もしくは修辭の要約にあてはめて、詳らに

作品の價值を研究するは、抑も反省的知識の作用なり。決して美感の作用に非ず。作品の美醜は、感ぜらるべきものにして、理解せらるべきものに非ず。されば美の判斷は、又嗜好の判斷なりと云ふことを得べし。

嗜好又は趣味なるものは總ての人に於て同一なるものにはあらず。或るものは理想的記述を喜び、或るものは寫實的叙説を貴び、又あるひは悲哀に偏し、あるひは勇壯に僻す。或は自然の平淡に與するものあり。人情の曲折に著するものあり。艷麗を好むものあり。瀟洒を愛するものあり。同一嗜好の者に在ても、高下あり、深淺あり、一面的なるものあり、多面的なるものあり。古來有名なる藝術的作品に對して、だに、天壤相異の批評を聞くは實にこれが爲なり。然らば藝術の鑑賞に於て此の如き勢力ある嗜好なるものは、如何にして成り如何にして陶

冶開發せらるべきものなるか。

嗜好は一面に於て個人の氣質に基き、その天稟によりて異なり。他の一面に於ては教育により、經驗によりて開發せられ、知識の進歩道德的意識の發達、感情の高上に伴うて進み來るものなるが、その最も與て力あるものを經驗と爲す。理性的知識の進捗と道德的觀念の發達とは各人の嗜好を高尙にし、美學的知識は之を深奥ならしむるに足るべしと雖、之を廣汎ならしめ多方面ならしめむとは、只だ此等抽象的論議のみの能くし得べき所にあらず。彼の氣質てふ者はもと生理的基礎を有し、各人の一生を通じて全然たる變化を爲すが如きは殆んどなきに近しと雖、それすら境遇により多少變異することあるは争ふべからず。境遇の爲に變化すと云ふは換言すれば經驗により左右せらるることなり。若それ嗜好開發に關する經驗の勢力は實に豫



想の外に逸するものあり。蓋し美なるものは理解すべきものにあら  
ずして、感受すべきものなるが故に美なるものを鑑賞するに際して  
は、一切の推理的知識はこゝに暫くその形影を潜む、然るに吾人が絶  
代の傑作に逢着して、その藝術的技巧に眩耀せられ、陶然醉へるが如  
く、我を忘れ世を遺れて、たゞ美神の功德讚嘆に餘念なきに當り  
てや、觀美の心眼頓に開けて、大千世界一點の醜惡を残さず、聞く所は  
悉く美妙の音、見る所は盡く赫耀の色、趣味萬法に遍く、嗜好一朝に高  
まることあり。此時此際得來る所の觀美の眼は、到底抽象的知識の與  
へ得る所にあらざるなり。百聞は一見に若かず。理論は實驗に及ばず。  
嗜好の修養にありて特にその然るを見る。吾人の如き島國的景物性  
情にのみ慣るゝものは、身みづから大陸の地を蹈んで、而る後始めて  
その壯大無限なる風光や、悠々迫らざる大陸的人民の性情を解する

を得て、こゝにその嗜好を高め、趣味を廣うするを得べし。白雪山河を  
埋めて、僅に矮少微細なる蘚苔の趣を留むる極地の住者は、炎熱砂磧  
を鏢かす熱帶の地に遊びて、而る後始めて潤葉常綠なる植物の美を  
會得すべく、松柏、檜杉の美のみになるゝものは、南歐の風光に浴して  
こゝに葡萄樹、チトローネンの美趣を覺るを得べし。  
藝術特に純文學の批評に於て、嗜好の如何が與て尤も力あるは吾人  
の信ずる所、而してその嗜好の開發が經驗にまつ所多きことも、亦吾  
人の疑はざるところなるが、嗜好以外に、なほ批評家にとりて尤も切  
要なる第二の約束あり、空想これなり。  
詩人にとりての第一の約束は、想像力なることは何人も認むる所な  
るが、この想像力なるものは、常に詩人の要諦たるのみならず、また批  
評家の要訣なり。而してこの空想なるものも、決して所縁なうして生

と得べきものにはあらず。空想の翼の自在不羈なる邊を喻へて、之を砂上のバベル塔に比するもよし。之を空中の蜃氣樓にくらぶるも可なり。しかも空想の所生と雖、全然一の實在的根基なくして生ずるものに非ず。その基礎たるものは、畢竟吾人の經驗によりて得來る所の現實的事象に外ならず。吾人は、しかすがに空想所生の全般をもて、直に現實に本くとなすものに非ず。飛行自在、九天の上を究め、九地の下を極むるを得べき想像力は、その成果に於て、到底現實に於て見得べからざる空想的人物を、事件を構成するを得む。然れども、若し仔細にその因て來る所の事實、又は性格の部分を考察するときは、必ずや吾人が日常經驗する所の事物、もしはその比喩的表現を骨子として、之に彩色せる皮肉を蒙らしめたるに外ならざるを知り得べし。加之、この詩人の多角的なる想像力のプリズムを通じて、燦然たる光明を放

ち來る所の此皮肉も、亦現實的事象の變形又は比喩にあらざるなきを見む。既に作家なる詩人の想像にして、まこと此の如きものならしめば、その作品を賞玩して長短を驗數せむとする批評家の側にありても、亦非常に豊富なる想像力を有するにあらずんば、作中の性格、その活動、および全篇の脚色等が自然に合へりや否や、餘りに放縱なる想像力の濫用は、これが爲に却て美に煩なきかあらぬかを判斷するを得ざるべきなり。然り而してこの想像と雖、亦現實的基礎を有すべく、到底經驗に歸局すべきこと、上に述べしが如くんば、經驗は社會の全般を蔽ひ、人世の光明ある一面を知ると共に、その暗黒なる半面に通じ、優美とともに壯大を解し、悲哀とならびて滑稽の趣味を究むるものにあらずば、能く批評の意を盡し得べからず。此の如きは、只推理上のことに非ずして事實たり。看よく世途の嶮難を嘗め悉して、あ

はれむべき人間の運命を覺りたるものに非ずんば、大悲劇の眞趣を解するを得ざることを、浮雲の如き富貴のなか／＼に煩ひ多きを見て、軒ばに月もる陋屋の中、一簞の食一瓢の飲に甘せんことの安らけきを悟れるものに非んば、閑雲野鶴を友として白眼世を見る高士の心事を了會し得べからざる事を。

説き去り説き來りし所粗雑なりといへども、批評家特に輕文學の評家にとりて廣く深く、また多方方面なる嗜好と、作家のそれに譲らざる想像の力の缺ぐべからざることと、而して件の二ヶの要約は主として周到精緻なる經驗に負ふ所多きよしは、ほゞ明なるべし。然れども、人生は朝露の如し、長しと雖百歳にわたるもの極めて稀なり。悠久なる古今數千歳の事象、一人にして知悉し得べからず。一身大なりと雖、方尺を充すに過ぎず。終生を征途にをはるも、身親ら五洲の地を踏破し

得ること難し。是に於てか各人自家の經驗は、充分に評家たるの資格を作るに足らず。間接に他人の經驗をかるの止むべからざるともとよりなり。

經驗に間接と直接とあり。直接なるものは各人自家の觀察なり、閱歷なり。間接なるものは他人を通じて得來る所の經驗なり。換言すれば他人の經驗によりて得る所の智識なり。彼は各自の境遇によりて異り、此は其智識の媒介者の如何によりて變ず。彼は僅に一代の所得なりと雖、親しく見聞し觀察し、歸納する所なるが故に、確實と適切とに於て後者に優り、此は古今に出入し東西に亘る事を得るが故に、博洽と多様とに於て前者を壓す。彼に偏狹の失あれば、此に明瞭を欠ぐの憾みなきにあらず。得失長短容易に定め難しと雖、限りあるの生命を保持して、限なきの世相を極めんと欲せば、勢後者によらざるべからず。

吾人か詩人並に文藝の評家に對して修養の重すべきを説くは、主として此意味に於てす。

間接の經驗は重に讀書によりて得る所なるが、そはたゞ傳記、旅行記又は歴史のみよりして來るものにあらず。又詩的作品によりて得るところ多かるべきは論を俟たず。而して此間接的智識は、上陳の弱點を免がれざるが故に、この目的を以て他人の著書に蒞むや、又批評的觀念を忘るべからず。同一事實と雖、之を觀察するものによりて着眼の點を異にし、記述の趣を異にし、誤謬あり、錯雜あり、切實ならざるものあり、周匝ならざるものあり。もしさながらに他人の見聞に信頼せば爲に却て世相の眞をあやまり、あたは批評の眼をくらまざるゝことあるを免れじ。此時にあたり、能く間接經驗の誤謬をたゞすにたるものは、只自家直接の經驗あるのみ。果して然らば、直觀的人世觀の基礎を形つくるものは、その直接なると間無なるとの別こそあれ、畢竟吾人が經驗に歸着するものなりと云ふべし。

礎を形つくるものは、その直接なると間無なるとの別こそあれ、畢竟吾人が經驗に歸着するものなりと云ふべし。

嗜好の修養と想像の豊富とは、ともに詩人及文藝批評家の要約たり。唯前者にとりては綜合的天才を要し、後者にとりては分析的眼孔に俟つの異なるのみ。而してこれ等二ヶの約束、懇切、丁寧、明瞭にして又深奥なる人世の觀察に依頼するものなるに、世の所謂批評家をもて任するもの、他人の作品に對するや、切實深奥なる觀察に乏しきを喋々しながら、その彼等自身にとりても亦同じく必要なる條件たるを忘れ、動もすれば偏狹なる自家の經驗を杓子定規として、妄りに他の苦心慘憺になれる作を漫罵す。無責任も亦太しからずや。當世の時文評論とか批評とかいふものに對して、我れ頗る慊らざる所あり。こそさらに陳腐なる題目を辭せずして、些か論議するところあるは抑

も是が爲のみ。

崇高と可笑と

今の時、今の文壇に於て、尤も閑却し去られたるものを求むれば、それ崇高の美と滑稽の趣味とにあらずや。肉神二元の間に轉展煩悶せる憐むべき人類が、或は自然に、或は勇者の行動に、偉大なる勢力を看取して、之を渴仰憧憬するとき、宗教的崇拜の素因を爲し、之を怪訝し、之を思議するとき、幽玄なる哲學觀を爲し、ひたふるに之に惛伏せずして、之を美化するとき、崇高の趣を現す。宏壯雄大なる自然と、勇敢なる英雄の行爲と、崇高の資材は到る所に存す。吾人嘗て露伴が五重塔その他の作に、此種の美を認めにき。而して今奈何。

人は涙と笑とを有する動物なり。わけくれ涙に暮るゝとき、別に涙の悲なく、晝夜笑に終るとき、絶えて笑ひの樂なし。悲みて泣き、楽しんで笑ふ。これ人間の常態にあらずや。況んや、我が國民の天性、悲觀よりは樂觀に、冥想よりは談笑に傾き易きに於てをや。其文明は手足不備、長短僅に補綴して一時を糊塗するに過ぎず。細心見來れば悉く滑稽の好資材にあらずや。誰れか我が國民を滑稽趣味に乏しと云ふものぞ。又たれか可笑の對象を缺くとするぞ。而して、何を文學界に滑稽趣味の皆無なるや。夏小袖にモリエールの面影を傳へむとせし、紅葉の輕妙なる筆致今いつこ。

心理小説と云ひ、光明小説と云ひ、あるは社會小説と云ひ、幾多文學上の要求は評家によりて試みられぬ。よし大なる作なきまでも、反響はこれありき。然れども、その性格の描寫や、まゝ精細を極むるものなき

に非ざりきと雖も、もはら悲哀に届し、可憐にとゞまる、幼稚なる哀觀の埒外に脱すること能はず。吾人は戀愛小説を見たり。若き、ちひさき可憐なる少女の胸の、こひにやつるゝ煩悶の狀が、つばらに描かれたるを見たり。青春の意馬、心猿の狂ひ、制するに由なく、一筋に思ひつめては身を忘れ家を遺れ、世にすてられつ、世をすてつ、さても嶮しきうき世の浪風に妨げられて、失望のあまり、次第く零落の淵に沈み行く、こゝろ弱き人物の巧なる描寫に、おはれむべき人間の命運が示されたるを見たり。吾人は社會小説を見たり。強者に對する弱者の、富者に對する貧者の、屈辱に泣くを見たり。時代の惡精神にさいなまれて、弱き者おはれむべきものゝ滿腔の不平も、白癡のたはごと夢裡の囁語と嘲られ、涙ながらに服従し、もしは爲にますく墮落し終るを見たり。然れども、吾人は不幸にして、未だ我が現代の文學に於て、五尺

の小身、膽斗牛を呑み、大勇猛の獅子心を振ひ起して、自然と戦ひ、世と争ひ、社會を敵とし、國家に逆らうて奮闘する底の大活劇と、之に伴う崇美とを認むる能はざるなり。怪むことを已めよ。笑なき所に眞の悲みなし。滑稽の趣味皆無なる文壇は、驚天動地の大悲劇、大葛藤を寫すの能なかりしなり。

此の如き文壇に向つて、崇美と滑稽との缺乏を説き、その出現を望むもの果して狂愚の言たるべきか。

三百年の泰平の夢、はしなくも浦賀の砲聲に破られ、急に鎖國の牆壁を撤し七百年の武門政治と封建割據の制度とはこゝに廢たれて、統一的國家となり、以て萬國共通生活の大舞臺に上りしより、國民の生活と思想とは疑もなく大變動を蒙りき。東西兩洋の趨勢を異にせる文明は爰に衝突して一大施渦を起し、舊理想仆れて新理想未だ立た

す、舊信仰はすたれて、新信仰は未だ成らず。既に理想なく、信仰なし。進で戦はんか、憑む所なく、退て守らんか、據る所なし。人は徒らに五里霧中に彷徨して適く所を知らざりしは過去三十年間に於ける我が國民生活の狀態にあらずや。文學は社會の反映なりとせば、既往の文學に於て、勇壯健闘の人物が描かれざりしこと、必しも以なきに非ず。時勢は推移せり、局面は開展せり。今や我が國民はその勢力を自覺し、また昔日の吳下の阿蒙に非ず。信仰と理想と未だ確立するに至らずといへども、内その實力に頼む所あり、外その地位に憑む所あり。その活動は退守的に非ずして、進取的なり。日清戦争よりは北清戦争、列強の消極的連衡よりは、日英の同盟、歩一步、世界的生活の舞臺に向て勇進し來れり。幕は既に落ちぬ。平和的戦争的健闘の活劇正に是より激甚なるべし。この膨脹せる國民生活は、陰に陽に、社會萬般の事象に向

つて、雄健の氣風を鼓吹せずんば已まざらんとす。社會はすでにその反映たるべき文藝の爲めに、勇敢なる英雄的氣風と事實とを暗示して、壯美の資材を供し、その出現を促しつゝあるにあらずや。吾人今にして我が文壇壯美の缺乏するを説いて、之を要求する所以のもの、豈に癡人夢を説くの類ならんや。況んや最近の矯激なる思想は、切にその出現を渴望しつゝあるに於てをや。その最近の思想が壯美要求の聲たるを説かん前、少しく壯美に就て述べしめよ。

優美と壯美とは共に美の一類なり。兩者に致一なる所は感覺的又は論理的判斷によらずして、反省的判斷に本づき、それ自身快なる點にあり。壯美も亦優美の如く無關心にして享樂せらるべし。されど優美は事物の有限なる形の中に見られ、壯美は之に反して、漠然として形式なきを異りとす。されば前者の享樂は質の寫象に關し、後者の夫れ

は量に依る。量に大と強とあり。大は延長に關し數學的なれど、強は力に關し力學的なり。自然力に關する壯美は時に強に於てし、時に大に於てし、或は兩者に於てすれども、精神力に寓すと見らるる壯美は一に強さに關す。

美的判断は客觀的認識に本づかず、主觀的評量に止る。故に壯美の量を測るべき尺度は直觀中にあり、崇高なる力の尺度は抵抗の力にあり。優美は靜かなる冥想中に感せらるゝに反して、壯美の感が運動心のを伴ふは是が爲なり。これを壯美の特徴とす。されば崇美は自然力に寓すと見らるゝものと雖、亦實は直觀の中に存するに過ぎざるは勿論なり。

美的判断に與るとき、吾人の想像は無限なること能はず。之を過ぐるものは、或は怪奇となり、或は醜大と現す。然らずして想像と無限なる

理性と調和するとき、こゝに快感あり。壯美は即ちこれなり。されば壯美の感は、不快の起らざるを條件としたる消極的快感なり。むしろ驚嘆の感なり。過ぐれば即ち喫驚となり、不快となる。

既に述たる如く、壯美の感は抵抗の感と、理性の自由の感とより起るが故に、又實に勢力と自由との感に外ならず。これ人心最深の所に基するもの、偉大なる事物によりてのみ催起せらる。偉大なる自然力の觀念は意志の崇高なる力を喚起して、道德的壯美を感せしむ。戦争又は英雄の豪健不撓の行爲に見らるゝ壯美はこれなり。されど此種の壯美は、吾人が自由なる直觀中のものとして、實を脱離するが故に心の平和を破るが如き感動を惹起することなし。

されば壯美は心の運動なり、抵抗の力なり、自由の感なり、偉大なる勢力驚嘆の情なり。これ豈に新興國の民衆が趣好に投すべき、恰好の美



にあらずや。七百年來封建制度の壓制の鐵鎖に苦しみたる個人が、今や自由の天地に翱翔して、反動の勢は他の極端に奔らんとする我が民衆の最も喜ぶべき趣味にあらずや。多年の屈辱より、一躍列強と對抗して大飛躍を試みんとする國民の歓迎すべき趣味にあらずや。我が謂はゆる最近の思想とは、云ふまでもなくニイチエ的個人主義を意味す。ニイチエに由來せる極端なる個人主義及び之に伴へる君主道德説、威力意志説、さては超人説の如きものを以て、實世間の行爲の原則として、生活の第一義として、世に推奨するの誤れるは論なし。然れども之を文藝の自由なる天地に移して、單に空想的創作の上に限りにて觀察せば、悲哀の一局に偏し、意志の薄弱なる性格もて充されたる、我が現代文學の病弊を救ふに足るべき刺激劑として、余はむしろ之を歓迎せんと欲す。同じく極端なるニイチエ主義なり。何が故に

生活問題としては之を排し、文藝の天地に於て之を歓迎するか。理由は明白なり。生活問題は實の境なり。故に生活の第一義としての道義の嚴格なる支配に屬すべきが爲なり。文藝の事は純空想上の事なり。こゝに道義の制裁軽く、極めて自由の境なるが故なり。かしこに弊を極めんか、結果は直に社會の全般に及ぼし、少くとも過去數千年の事實として、人生必至の境涯なる、共同生存の危害を招くを免がれず。こゝにその極端に奔るとも、弊は假象の脱實性によりて濟はるべし。藝術の境は空想の天地なり。故に極めて自由なり。然れども絶對的に自由なるに非ず。美感はもとより官能的快感の如き執實性あるものに非ず。然れども心身相關の密接なる、曳て實感を挑發するを免かれざるものあり。又その美を享受すべきもの、如何により、空想的假象を直ちに實に結合するものあり。此の如きはもとより道德の制裁を

免かるゝ能はず。春畫の街頭に掲ぐべからざるが如し。されどこの場合に於ける道徳は極めて寛容のものたるを要す。  
 ニーチェ主義を文藝上の主義として採用するに於ても、亦この見地より取捨する所あるを要す。その捨つべきは極端なる本能主義なり。否むしるニーチェの自由本能より轉化し、もしは之を誤解するより起れる性欲至上主義の類なり。極端なる本能主義若は性欲至上主義は、之を文藝的作品に入るゝとき、却て美感を損じ、或は逆まに醜感を起さしむるとあり。ゾラのチ、イブセンのノラの傑作を以てして、なほその女主人公の或は淫欲に沈湎し、或は一切の義務を抛擲して専ら自家の幸福に走るが爲、却て美感を損ふこと、多くの聰明なる評家によりて夙に非難せらるゝ所なり。只かの君主道徳の説や、威力意志の説や、はた超人説の如き、之を文藝に施すとき、雄大の趣、崇高の美は

之を認むるを得べけん。眞に文藝の爲に謀てニーチェを説くものあらば、必ずや此の如くなるべしと信ず。若し夫れ、更に之を個人より移して國家の上に觀じ、或はその排理性的傾向を去つて、智情融合の上に、理性と本能の調和の上に、大勇猛の獅子心を顯せしめば、一面に於ては團體的競争、帝國主義などに顯著なる、現代の大勢に應ずるを得て更に一段崇高の趣を呈せんか。  
 滑稽は理と背理との衝突より起る。主觀的に自から當然のことゝ信じて、而も背理を演じ、その漸く矛盾を露呈するに至るを見て、不快を感ずと雖、終に背理の微證顯然たるに及び、迷の雲はれて理の勝利に了る。喜悅乃ち生じ、笑こゝに起る。背理は時に情なることあり。時に誤謬の見なることあり。然れども理と背理との衝突に起り、その解消に終るは一なり。敢てことごとくしく言ふを俟たず。不具なる現代の文明

は臻る所に絶好の資料を存するを見る。況んや國民の性質もと涙よりは笑の民たるに於てをや。而も今の文壇に此趣味を缺き、適ま之ありども、地口、語呂の類に非ずば僅に諧謔のみ。情を伴うてなほ能く滑稽の質を失はざるフォームの如きは殆んど見る能はず。知らず當代の作家敢て之を試みざるか。將た之を試みるの才人なきか。抑も又資料餘ありとなすの誤れるか。有心にして檢し來れば、大小天地の史蹟悉く滑稽ならざるはなしと。か資料なきにあらず。之を求むるもの、拙なるのみ。

聖代の文運正に隆々、文壇多士と稱す。而して壯美と滑稽との趣味は求めて得べからず。一世の氣運は之を歓迎するが如く、詩材は既に多きを憂ふ。誰か先づこの方面に筆を染むるものぞ。

### 紫とみだれ髪

(所謂明星派の短歌を評す)

神秘の雲深うして、神代のは分ち明かずと雖も、舊記の傳ふところ據るべくんば、諸冊二尊の天の御柱に邂逅し給ひし時、二神が相思の情は、あふれて二首の歌となりきと。かゆかりは遠き情の小河、或はむせび、或はよどみ、潭となり、淵となり、時には落ちて瀧つ瀬の水、散りて碎けて、くだけて飛びて、むせぶとすれど、又更によどみ、流れく、て春秋五千歳、今なほ一代の才人名媛をして、その錦腸をこゝに注がしむ。浮ぶ紅葉、流るゝ花底の星かげ、波上の月、それくゝの風情すて難しと雖、惜むらくば、細流大魚を棲ましめず、三十一文字は深遠幽玄の想

を宿し難し。詩形の餘りに短少なるがゆゑに。

歌は詠嘆の聲なりとか然り詩は感情の叫なり情は冷かなる状態に  
あらず思惟の果にあらず又觀念の集合にもあらず以て感すべく抒  
すべしと雖も論すべく談すべきものならずされば一片の思想を取  
りて分拆又分拆以てその微を悉くしその精を極めんは詩の目的に  
あらず智の究する所理の絶する所飄然として宇宙の至玄を捉へむ  
ことは哲學と詩との歸を同じうする所なれどさりとして彼の如く此  
の至玄を推釋敷演して大世界の秘を闡かむことは詩の長所にあら  
ず彼はあくまで智にたよりて進み此は偏へに情に任せて動く情に  
任せて動くが故に必しも煩はしき談理を憑まずくだくしき言辭  
を要せず詩人が天稟の彩管軽く人心の底にかくるゝ小琴に振れむ  
とき情波忽ちさわぎて已まず譬へば畫龍に晴を點せん如く俄かに

喚雲呼雨の活劇を現はし得べしと雖もおもへ畫龍のなき所點晴を  
れ何くにか施すべきをいさゝ小川に吞舟の波は立たず五句の小詩  
形豈に甚深の詩想を容れむや。

三十一音字の國歌が能くし得る所は抒情詩たるのみ而かも甚だ短  
少なる抒情詩なり適ま叙事詩的なるものありともたいこれ抒情的  
叙事詩のみ繪畫的叙事の詩のみ美なる自然を按配して後へに作家  
の情を寓し若くは作家の情を談り敢て描くと云はず得るに過ぎず  
平穩はあり激動はなし婉柔はあり勇壯はなし簡單なる自然の景物  
に即興の情を托し得れども複雑なる人心の情の波瀾を寫しその高  
潮を示し微妙の美を描くこと能はず現し得べき美はむしろ托せら  
れたる景物にありて材を自然に取り人間に假りて詩人が天賦の創  
才を擅にすべき餘地少し況んや智益加はりて情愈軽く昂らざる情

智、相、關、の、心、理、の、約、束、は、日、を、追、ふ、て、こ、の、小、詩、形、の、詩、境、を、せ、ば、む、る、を、  
 や、短、歌、の、長、く、唯、一、の、國、詩、の、形、式、た、る、を、得、ず、又、さ、あ、る、可、か、ら、ざ、る、は、  
 見、易、き、の、理、な、ら、ず、や、こ、れ、余、が、短、歌、に、關、し、て、嘗、て、論、じ、た、り、し、趣、旨、の、  
 大、要、な、り、然、り、こ、れ、久、し、く、抱、持、せ、し、見、解、な、り、し、な、り、か、つ、て、さ、な、り、き、  
 今、な、ほ、さ、な、り、

さは云へど、これ唯だ國歌の詩的實質的方面より觀察せられたる弱  
 點たるのみ、若しそれを形式的修辭的方面より看來らむか、かゝる  
 短少なる詩形の中に驚くべき技巧と彫琢とのほしいまゝにせられ  
 たるを否定し得ざるべし。況んやその出色のものに至ては、文辭の優  
 麗、風韻の幽趣を極め得て、入神の技、うたゝ吾人をして恍惚たらしむ  
 るもの少からず、人は徒らに萬葉の素朴、眞摯をめで、いその雄渾をた  
 たへ、後代の和歌の纖弱にして巧に過ぎ、眞情を欠ぐを難すと雖、修辭

の技巧の妙より見て、理想化と藝術的天才との自由にほしいまゝに  
 せらるべきク、ンストたるの點より見ては、萬葉は古今に及ばず、古今  
 亦、竟、に、新、古、今、に、過、ぐ、る、こ、と、能、は、ざ、る、は、疑、ふ、を、須、ぬ、ず、

既にその詩形の餘りに短少なるが爲めに、雄大渾厚の想と綿々とし  
 て絶えせぬこと縷の如き情の小琴のひゞきとさては、幽韻微趣ある  
 はひらきあるは穿ち、ときには叫び、時には想ひ、續きつ、絶えつ、限り知  
 らず變じ行く甚深絶妙の詩的構想とを寓するにたへざる我が短歌  
 が、記紀萬葉より、八代の撰集より、下つては契沖以後の國文學者によ  
 りては、ぐくまれ、育てられたるに拘らず、その詩想の上に於ては、千變  
 一律のそしり、とても免るゝこと能はずして、簡單なる一時の感想を  
 うたひ、美なる自然の景物をかり、僅にその一端を描き、以てその三隅  
 を餘意に托するが如き、即興詩に終れりしは、理の見易き所にあらず

や。かくて猶ほその詩形の妙は、しかすがにすて難きふし少からざり  
き、またすくなからずとせば、短歌の革新を圖らむものは、必ずやそを  
その詩形の上に求めざる可からず。よし詩想の上に於ても、時代の觀  
念、思想の大變轉と、新觀念、新思想、従うて新言語とが、此小詩形中にさ  
へ、なほ多少の改革維新を許すとすとも、その限りは、さまで廣からず  
いて、終局詩形の上に斬新と技巧とに還らざる可からざるは、疑ふべ  
くもあらじ。

曩きに一代の俳才子、規子あり。類型の因襲のもとに委微振はざりし  
俳句の革新を企て、銳意精進數年一日の如く、遂に日本派の俳句をし  
て一朝にして天下を風靡せしめき。清新の調、奇抜の句、よく月並派の  
弊習を洗滌して、眞に革新の實を擧げ得たりと稱す。しかも仔細に見  
來れば、その所謂清新の調なるものは、新觀念、新字面と、逼迫の音、雄壯

の文字とに負ふ所極めて多く、その奇抜の句と云ふもの、主として美  
なる新事物の巧妙なる湊合にかゝる。若し新派の俳句に於ける美の  
階級を云はしめば、その調は形式美の低きものに屬し、その想は主と  
して美なる事物に依憑するに留まり、只之を案配、排置する上に些か  
作家の技巧を弄するに過ぎざるを以て、殆んど自然の美が、もしは低  
級の繪畫が、占め得べき美の地位以上に出づること能はざらん。然ら  
ば、則ち詩的構想は、云はずもあれ、理想化の作用は、た之を用ゐん。場  
所極めて狭少なる範圍内に、踟躕するを免かれず。子規子一派の才藻  
を以てして、なばかつその十七字詩に、改善を加へ得たる所は、此の如  
きに過ぎず。短歌はその形に在ては、殆んど俳句に倍するの長さを有  
す。雖亦僅かに三十一字に、いまる小詩形なるが故に、その所謂革  
新を加へ得べき所亦、ほとほと俳句に同トく、遺憾ながら吾人は、その

俳句に許せし以上の美の地位を以て同じく新派の短歌に許すこと能はざるなりたい幸にして少しなりとも詩形の長さが彼に過ぐるがために美辭的技巧を弄するを得る點とより多くの美なる事物または觀念を包有し得る點とに於て此はいさゝか彼にまさるを得べきのみ。

俳句革新の聲につぎて前にはいかづち會あり後には若菜會の諸氏ありき然れども吾人は此等諸氏の短歌に於てたゞ拮据なる聲音の挿入と新字面の顧慮なき使用との外にさまで著き聲調をも詩想をも見出づること能はざりしなり眞に短歌の革新と許すべき作の見られしはそも明星の發刊以後にあり俳句界に於ける日本派の革新といふに明星派の新調は今や天下に普からむとすなり口さがなき京童をして虎の鐵幹劍の與謝野氏と謠はしめし天地玄黃當時の歌

はさておき所謂明星派の短歌はいちじるしき特色を發揮せり在來の歌風を脱出して別に一体の革新を爲せり看よくその景派配合の如何に古來の歌のそれと異なるかをその聲調のいかに大變化を爲しいかをそが作家の趣味のいかに前代のに異なるかを然り明星派の歌はその落想の上にその聲調の上に形式の上に著目すべき革新を爲しぬ然れども短詩形の爲に妨げらるる詩想の究屈と技巧の施すにどころなき欠點とは亦之をして竟に配合案排して以て作家の情と感想とを寓すべき物及び觀念の撰擇と形式とに聲調の斬新との上に改善の區域を限らしめしに似たり。

陽春三月東風肌にやはらかにして百花野に亂れおらそふにも比へつべき明星派の秀才才媛が詞藻黃なる蒲公英紫のすみれあかきは桃か白きは小百合花それくの色におどるながめおのづから特色

ありて、何れをそれとさだめ難しとは云へ、さはいへ、所謂明星派の特色は鐵幹子の紫と晶子女史のみだれ髪とによりて、ほい遺憾なく代表せられたるが如し。されど今我がこの兩歌集を評せんとするは件の兩著そのものを品隲せんとにはあらで、實に明星派の特色と、その長短とを察せむが爲のみ。何をか紫と亂れ髪にあらはれし明星派の特色と云ふ。乞ふこれより述べむ。

二

聲調の流麗を重するに過ぎ、句法の妥當を失はざらんことに汲々たりし極、遂に平板無氣力の調と想とに沈みはてたるは、我が在來の短歌の宿患なりき。此宿弊を脱して、この短少なる藝術的作品の中に、自由の空氣と清新の調とを與へんとせる新詩の作家は、他の藝術、その他の革新とかなじく、果然まづその改新の緒を形式的方面に見

出しぬ。自由なる語の使用なり。俗語と漢語とは、た中古の雅馴なる言語と、新詩の作家によりて、平等に看做されぬ。究窟なる文法的拘束の蔑視なり。てにはの省略、句の短縮、新語法、新句法の使用、さては新事物と新觀念との挿入。此等のものは新詩作家の好んで用ゐたる所なりき。これたゞに明星派の詩人のみならず、謂ゆる短歌の革新に指を染めしもの、皆試みたる所なりき。されど、或る程度に於ける調和を全うし得たるは、此等のもの、著しき使用とは、特に之を明星派に見得べし。と信ず。さもあらば、あれ、新なる字面、新なる語法、めづらかなる形は、三十一文字の小詩中に幾何の自由と幾何の技巧の妙とを供し得べし。とす。か、は知るべきのみ。唯、在來の歌人が見出づること能はざりし。新なる趣味を、その新觀念中に認め得る底の觀美眼あるに。



至りて始めて能く清新の詩趣に誇るを得し。此を以てその初めに於ては修辭的技巧に專なりし新詩作家は漸くにして新事物新觀念を巧に結合してこゝに新趣味の發揮を企てたりと云ふは、その先づ利用せられたるは謂ゆる俳句の味味にありき。三十一字中にまたき句もしは章を織り成さんとせしめて作家の觀美眼が享樂せる景物乃至は事物の枚擧並列に留め、以て餘意を玩賞者の想像に委ねるにありき。既に玩賞者の空想に委する所あり。こゝに於てか一面短少の詩形中に比較的多种多量の趣味を賦與し得べき所あると共に他面玩賞者が享樂する所の美的趣味は、必しも作家のそれに致一ならざることあり。は或別種の趣味を箇中に見出すことすらなきにあらす。従つて時に詩趣の朦朧と句法の晦澁とを病むこと少からず。

この朦朧とこの晦澁とは謂ゆる明星調の新詩が通弊として屢々評

家の批難を喚びし中核なりしが如し。而してそは唯り前陳の事情のみならず、又實にその文法句法の蔑視と辭句の省略とに伴ひしこと頗る多きに似たり。

此の如き俳句的趣味は、新短歌に於ける叙事的即繪畫的抒情詩と見るべきものに存するものなるが、若しそれ純抒情的のものに在ては意氣に優れるもの始まりて、漸く情に於て勝てるものに移り來りしを見るべし。前者は紫に多く、後者は亂れ髪にしるし。

〔紫とみだれ髪〕一は豪健なるべき男子の作、他は優しかるべき女子の筆、その作品の上、また別あるべきは論なかる可し。此點より見ば、紫に意氣驕りたる歌多く、みだれ髪にやさしき情の聲を聞き、彼は戀を語れども苦悶せず、此はおもひに結ばれて情轉たせまり、彼は冷然として嘯くが如く、此は愁然としてかこつが如き、敢て怪むに足らざらん。

然れども詩歌は畢竟情の産よしその始に於ては革新に急なるが爲めに却てその意氣の盛なるにつれて、ともすれば慷慨家の漢詩の如く、壯士節の歌のごとく、意氣軒昂に過ぎて、情趣爲めにわづらひ多き弊ありとも、その形式の圓熟とも、その聲調の定まると共に、漸く情趣の饒なるに到るべきは當然の理にあらざるや。されば意氣におこれる歌に富める紫と、情に濃なるものにゆたかなるみだれ髪との風致の別は、その作家の性別より來りし相異と見んよりは、寧ろ謂ゆる明星調に於ける草莽時代と圓熟時代との新歌調の別と見るを可なりとすべし。かく云へばとて、こは此歌集の價値を軒輕するものにあらず。たゞその歌調の上に此派の新詩の變遷歸移せる傾向を認め得べしと爲すのみ。

が近什に見よ。如何にみだれ髪調に傾きし所多きか、恐くは豫想の外なるべし。意氣の子、名の子、劍の子が、才あまりて、歌みな奇なりを一世の人におこり、慷慨悲歌の友なりして、二十萬年酒の徒らに冷えたるを憤り、俗輩の嘲罵を笑殺し、身後百年の才名を以て任じたるそのかみの客氣、今いづくにか見るを得べき。否、客氣なきにあらざらん。客氣をかりて格調の壯大を助けざるを得ざらん。當初の新詩が、漸く格調の圓熟と革新の功果とを贏ち得たる進境を認むべき所以にあらずや。

明星派の新詩に、果して紫時代とみだれ髪時代とを分ち得べしとせよ。後者の時代は、その想の意氣に勝りたるものよりして、情に濃なるに歸りたるとともに、その新なる句法、字面、趣味および聲調も亦漸く圓熟に近づきし時代なり。従うて又此等に伴へる病疾も亦愈太だし

く△なり△ぬ△句△法△漸△く△熟△して△意△義△の△晦△澁△も△一△層△を△加△へ△省△略△ま△す△く△巧△  
 に△し△て△詩△想△倍△々△朦△朧△を△病△み△來△れ△り△而△し△て△この△兩△時△代△の△格△調△風△姿△は△  
 共△に△今△な△は△明△星△派△歌△人△中△に△明△か△に△認△む△る△こ△と△を△得△べ△き△が△如△し△  
 更△に△翻△て△明△星△調△の△新△詩△の△特△質△は△い△づ△れ△に△あ△り△や△と△考△ふ△る△に△そ△の△内△  
 容△に△於△て△よ△り△は△む△し△ろ△一△種△清△新△の△格△調△に△あ△る△こ△と△は△恐△く△は△何△人△も△  
 異△議△な△か△る△べ△し△こ△れ△三△十△一△字△の△小△詩△形△が△當△然△免△が△れ△難△き△宿△命△に△過△  
 ぎ△ざ△る△が△故△の△み△加△之△そ△の△形△式△と△雖△亦△固△より△革△新△を△試△み△得△べ△き△多△大△  
 の△餘△地△あ△る△に△非△す△然△ら△ば△明△星△一△派△の△士△が△多△年△の△苦△心△は△徒△ら△に△水△泡△  
 に△屬△す△べ△き△か△  
 余が短少なる國詩の到底當來の詩形として満足すべきものに非ざるを極言せしは實にその内容上よりして詩想包容の器としての短を指摘せしものにしてその修辭的方面より即その形式的方面より

見て、如是短少の形式中に施されたる彫琢の技巧に至りては頗る見  
 るべきものあること、亦同時に認めたる所なりき。若し明星一派の士  
 が奇才よくこの形式的方面に於て更に革新を遂げ得たりとせば、  
 そは實に短歌の革新に於ける唯一の成功と光榮とならざるべから  
 ず。よし舊俳句が舊短歌より遙かに廣く俗間に流行したると同じき  
 理由によりて、新短歌の盛監が新俳句のそれに比して遠く劣れりと  
 すども、其光榮と苦心の事業とに於ては必しも彼に及ばずとはすべ  
 からざるなり。只短歌は竟に短歌なり。詩想包容の器としての短は免  
 かるゝとを得べからずとせば、明星一派の士が苦心と成功とは此處  
 に得たる脩辭的技巧を進めて更に之を長詩の上に試みるによりて  
 一層の光榮を加ふべきは明なる所。これ余が此派の新詩人に向うて  
 切に囑望する所なり。近時新詩社の同人等往々長篇に趣くの傾向あ

るは余の深く同派の諸士の爲めはた國詩の爲めに慶賀する所たらずんばあらざるなり。

方丈記こそが入世觀

「行く川の流は絶えずして、しかも元の水にあらず。淀みに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しく止ることなし。萬法は流轉し萬物奔る。眞理はヘラクライトスが闇黒なる思想よりも古く、意は佛陀が甚深の教説といふに長し、轉々又轉々、暫くも止まざるもの獨り水の流とし限らむや。年々歳々花は咲けども、今年の花はまた去歲の花にあらず。昨は紅顔の美少年、今は半死の白頭翁。人の身の上亦然なり。あらず、一切の世相皆然り。かつ消ゆかつ結びて、生滅刹那を争へるもの、甞に淀みの水泡のみかは。富士の白雪積年の恨も一朝の旭にとけて、溶

けてはやがて刎頸の無二の友となれし例少からず。千軍萬馬の間を往來して、武勇に誇りし阪東一の荒武夫も、おのが愛兒の齡なる花の如き公達を手にかけては、穢土厭離の念荐りに起りて、忽ち代る圓頂緇衣、黒谷の松籟に思を觀念の窓に凝しぬとか。一念發起すれば煩惱即ち菩提たり、凡夫もやがて佛なれど、昨非今是、定めなく、念々動きて安からぬ人の感想は實にかの水泡にぞ似たりける。この變轉極りなき世相人々の心に映じて、こゝに人世觀あり。知らず、長明が厭世の思想はそも如何にして生じ、如何にか變化せる。又知らず、彼が人世觀は如何なりしか。彼が著書あからさまにそを誌せるものなしと雖、幸にして一の方丈記あり。試みに是に依りて、彼が思想の由來と其人世觀とを髣髴の間に探り見む。

個人の威權を重んじ、思想の獨立を尊び、意志の自由を認むるは近代

思想の一特徴なりながら、さすがに人とし生れては、所詮は境遇の奴たること免がるべくもあらず。生れながらの氣質はあれ、教の道の諫はあれ、缺ぐることなき望月の榮花の夢のまなかには、聖者は知らず、誰かは心おごらざらん。逆まに失意の涯に沈みては、誰かはこの世をうしと見ざるべき。あるは泰平無事の世に生れしため、夢かうつゝのか思ひもわかで、あたらし人生の五十年を、水の流ともろどもに送るももあるべく、あるは兵馬倥傯の亂世に長らへて、悲風慘雨の人間の八苦に驚き、上求菩提の機を捉へ、ゆくりなく真如の月かげを望み得たるもあるべし。されば今こゝに長明が厭世的思想の由來と、その人生觀とを釋ねむとするに當り、彼が略歴とその身世の浮沈と及びその時代とを一瞥せむ。

世に傳ふる如くんば、長明は加茂社の禰宜鴨長繼の子なり。幼名を菊

太夫と云へり。和歌を能くし、管絃に通じ、夙に老莊の道を學び、又唯識止觀の旨に達しぬとぞ。應保年中從五位下に叙せられ、後鳥羽天皇の時には、一たび和歌所の寄人となりしが、後辭し去りぬ。彼が和歌の當時に重んぜられしことと、その自ら許ししこととは、新古今の撰ありしとき、彼の歌を召されしに、他の歌人等の數多の歌を詠進して撰者の取捨を経たるに反して、たゞ十首の歌を上りて、悉く撰に入りぬるを見て、も知るべし。彼れ嘗て父祖の箕裘を嗣ぎて、社司に補せられんことを請ひしかども、許されざりしかば、憤りのあまり薙髮して洛外大原の里に退隱しき。これより法名を蓮胤と云へり。後鎌倉右大臣實朝に招かれて、鎌倉に行きたれど、幾もなくして京に還り、更に日野の外山に、みづからささやかなる草廬を引き結びて餘生を送りぬ。方丈記は即ちこの草廬にありて記し、所なり。此他發心集、瑩玉集、長明家集

無名秘抄、文字鎖及び四季物語などの著書ありて傳はれり。此等の事實はくさくさの文に記されれば明なれど、彼れ長明が生死の年月、願のかなはざりし事情とを憤りて薙髮せし時と、さてはそのお歌所の寄人となれりし時との前後などは、その得意失意の有様を推想して、その思想の變遷の路すぢを辿らんには、極めて必要なれども、我が淺學寡聞なる、未だその確なる所を知らず。されば、その斯道に深き博雅の君子に譲りて、こゝには苟且に想ひ定めし儘を述べむ。

長明が方丈記を書き終りしは、自から誌せる如く、建曆二年にして、新古今の撰成りて意宴のありつる元久二年を去ること七年、その家集の成りし承元元年に後ること五年、新制二十一條の發布ありし年なり。彼の雅經の推舉によりて右大臣に謁し、頼朝の墓畔に悽愴の吟

を爲し、は、その前年なること東鑑の明記せる所なり。此記の末つかたに、長明自ら方丈のいほりを結びしとき、六十の露消えがたにしてこゝに五とせの春秋を送りしことをしるせり。

彼が世を逃れしは五十の春なること自記によりて知るべく、さすればそは西行の寂せりし建久九年なるべきに、建仁元年の撰歌合には明かに散位從五位下と記され、同三年七月の八幡若宮撰歌合にも散位鴨縣主とあるは心えず。されど方丈記のまゝにして數ふるに、長明の生れしは久安の四年なるべく、保元平治の争亂以後のことは、幼き菊太夫の親しく見聞せし所なり。生死の年月すら既に確ならぬ程なれば、彼が生れながらの氣質、その父祖の遺傳などはまして明ならぬと、其歌に察し、もしは零碎の記事を總べて攷ふるに、彼また多感多情風流の才人にして、恬淡無爲の道をさはめ、あるは止觀の旨を明らかに

んよりは、むしる歌人(詩人)たるにふさはしき性情を具へたるが如し。千載集の撰ありしとき、彼の歌はたゞ一首を載せられき。彼れ自から「重代にもあらず、讀口にもあらずして、一首たりとも撰まれしはいみじき面目なり」とて、喜び満足せしかば、深く筑州(仲頼か)の稱讃を得たりとは、無名抄に自白せる所なれど、その得意の作なりけむ石川やせみの小川の歌が、一たび頑なる師光に斥けられ、僅かに再度の判におもひやり深き顯昭に認められたれど、祐兼の難じたる如く、隆信顯昭等の亦此鳴川の故き名を歌に詠みし爲め、後の世にはいづれか先と知られざらんを本意ながりて、新古今に採用せらるゝや、生死の餘執ともなるばかりうれしき思せしこと、同じ書に記せるより見れば、執着の念も強かりしこと想見すべく、天下の先を爲さず、鋭を挫き紛を解き、和光同塵を旨とする道家の教、さては止觀の眞義は此時未だ極

め得ざりきとあはし。此せみの小川の歌を詠せしは、光行の加茂社歌合を催したる時のことなれば、建久の二年前後なるべく、長明が三十七八才の時なりけむ。彼れが縁かけ身おとろへて、しのぶかたしげかりしかば、三十餘にして更に我が心と一の庵を結ぶと云へるは、此當時のとなりしならむか。こゝに縁かけ身おとろへどあるにて考ふるに、長明が父祖の後を繼ぎて社司たらんことを請ひて許されざりしも、亦此當時のことにあらざるか。あるは權門閥族にすがり、或は請托これ勉めずば萬事心の儘まならず、才あるも顧みられず、無能も時を得がほなる當代のことにしあれば、さては縁かけ父祖累代の箕裘もえ、繼がれず、財貨また隨て減じ、洛中の住居もなり難くて、せめてもの心づくしに、父祖が仕へし加茂の社のほとり、河原に近き處に居を移し、にて大原山の雲にかくれしは世を捨て、の後はあらず

るか。石川やせみの小川の清ければ、月も流を尋ねてぞすむ」といへる、己が心を歌によせしものとや見るべき。若し然らば、彼が此一首にわきて執着の念ありしは、ひとり舊記中にこの名を見出でたる爲のみには非ざりけらし。

長明が洛外に退きしをその三十七八才の時とせば、これより薙髪の時まで十餘年の春秋をあませり。此間こそ、彼れ長明がたへ難き不平の念を壓へ、名聞を離れん爲め、唯識止觀の教老莊の道にまこと心を潜めしときなるべけれ。夙くよりこれらの道に通じぬと世に傳ふれど、名利の念彼の如く強く、執着亦彼の如く深き身の、まして血氣なほをさまらざるさかりの時代には、文字の義こそはあれ、いかでか死灰枯木の心となり得べき。また思ふに、彼れ此十あまりの年月の間に、妻子の恩愛の絆より離れ得たるにあらずや。彼れ自ら誌して、もとよ

り妻子なければ、捨てがたきやすがもなし、とは云へど、これ必しも初より妻子なかりきと解せずともあるべし。家集のうち、物思ひはべる頃、をさなき子を見て、述懐のこゝろをとほしがきして列ねたる數首の歌は、我が幼かりし時のおもひでのみならず、確かにそのかみ幼くて失せし長明の子ありたることを想見せしむ。されば彼れ、洛外に移りしときより、憤のあまり、直ちに世を捨てんの心はありながら、なほ恩愛の絆にはだされて、五十の春を迎ふるまで、薙髪し得ざりしにやありけむ。

長明すでに父祖の後を繼ぐことを得ず。家おとろへ、産傾き、洛外に隠棲せしかども、年來のこのみは棄つるに忍びず。月明なる秋の夜は、家重代の名管に煩悶のおもひをやよせけむ。霞にまかふ春の花には、おぼぬの琵琶の妙音に、僅かに心や慰めけむ。わきて和歌の道には生來



の堪能なり。建久より建仁に至る頃は、その道の技倆いよ／＼進み、名聲も亦次第に揚りぬとおぼしく、當時の歌合せに長明が歌の現はれぬは少く、俊成、定家、家隆の名手に交りて遜色なし。特に建仁元年の撰歌合には、小侍従に勝ち、讃岐にかけ、具親を壓し、定家をすら譲らしめぬ。雅經がそを實朝に推舉せしうべなり。此時妻子既になく、無爲の道止観の教、漸くその眞諦に悟り入ることを得て、昔日名聞を追ひて心を苦しめたる愚さを覺りぬ。加ふるに彼が五十年來親しく見聞せりし、悲惨なる時世の状態は、ますます／＼現し世のたのみ難く、穢土の厭はしきをおぼえしめ、爰に欣求淨土の念やみ難く、さてこそ全くの世捨て人とはなりはてしか。

保元の亂は長明が九歳のときなり。上は後白河天皇と崇徳上皇と、下は義朝と、爲義爲朝と、清盛と忠正と、あるは父子、あるは兄弟、或は叔姪

の骨肉の親、互に相闘ぎて、兵馬の間に流血の慘を演じ、上皇は讃岐に移され給ひぬ。白鳳、天平寶字の例なきに非ざりしが、彝倫のみだれ是より甚しきはあらず。後三年にして又平治の亂あり。長寛には山僧園城寺を焼き、嘉應には清水寺を焼き、山徒の跳梁極まる所なく、王法佛法と共に衰へ了んぬるぞ淺ましき。頼政先づ敗れて死し、爲義爲朝は義朝と相前後して亡び、平氏の一門は政兵の二權を握りて、莊園七道に半するに至り、保元平治の春の花と共に、榮え満ちにし榮花の樂もげに浮世は夢なれや、頼朝起り義仲立ちて、こゝに壽永の秋の月、傾きそめし平家の命運、やがては壇の浦の波間に沈みぬ。その終さへ定まらぬに、木曾氏は粟津が原の露と消え、さしもに旗風勇ましかりし頼朝が二弟さへ、狡兔死して走狗養らるゝ例にもれず、義經は衣川に自殺し、範頼はた殺されぬ。その無常を争ひ去りしさま、いは／＼朝顔の露

に異らず。或は露おちて花残れり。残ると雖朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず。消えずと雖夕を待つことなかりしこそはかなけれ。頼朝六十餘州の總追捕使となりて、天下の兵權を握り、政權亦その指顧の間に玩ばれて、覇業僅に成りきと雖、骨肉の親をうとみし、因果はめぐる小車のやがてその身に酬むきて、一度瞑目するや鶴ヶ岡の廟宇、丹波の色未だあせざるに政權早くも外戚の老奸に奪はれ、頼家は非命に死し、實朝の器ありと雖、大厦は一木の支ふる所にあらず、まこと草も木も靡きし秋の霜消えて、右府が墓畔の空しき苔を拂ふ山風の音かなしく、源家の命運譬へば風前の燈に似たりしさま如何に長明が心をば動かしけむ。

はかなきは音に武門の盛衰興亡のみかは、世の不思議亦度々起りぬ。安元三年の大火は都の三が一を焼夷して、七珍萬寶さながら灰燼と

なり、死者數千人、馬牛のたぐひ限を知らざりき。治承四年には稀ある旋風起りて、門扉は飛んで四五町の外に落ち、財寶は空に漂ひ、塵煙は天を蔽ひて、物のあいろも見ぬわかず、鳴り動む音に聲も聞えず、さながら地獄の業風にも似たりけり、加ふるに俄かの遷都ありて、數百年來軒を並べし巨殿高樓毀たれて淀川に浮び、公卿が棲家はあさぢか原と荒れはてし、月の光は舊によりて隅なけれど、秋風徒らに身にしむ有様とはなりき。養和には四時風雨時にたがひて五穀實らず、財寶ありとも米粟得るに由なく、翌くる年も引續きての凶歲に、剩へ疫病の時を得がほにはびこりて、斃るゝもの數を知らず、道の邊に食を乞ふもの市に群を爲し、悲泣の聲は都のみかは、七道津々浦々にさへ充ちたれど、民草のなげきの叫びは雲井の高さに達せずとや、俊成は院宣をかしてみて、千載の撰に心を苦しめ、平家の一門は空しく榮花の

夢にほこれり。かくて末世の凡僧どもが徒らの祈禱、何の效驗かあらむ。京の中央のみにて、六旬の間に、四萬二千の餓孍病骨を道に横へし。も理なり。また元暦の二年には、齊衡のそれにも劣るまじき大地震ありて、山は崩れ、川は埋もれ、塔廟たふれ、堂舎とび、人畜悉くたち所を失ひき。それも一日二日ならばこそあれ。一日の中に地の振ふこと二三十度。十日廿日を過ぎてなほ揺りやまず。名ごりは三月にも及びきと  
か。

此の如く天變地異ほどく連年に到り、盜賊は横行して内裡をすら掠め、兵亂相繼ぎて、名門の興亡、榮枯盛衰はうたかたの結び消ゆると早きを争ひ、人間の八苦を悉く眼前に觀たるものよし。一身の落魄なく不平なしとも、誰かは穢土厭離の哀觀を抱かざるべき。

長明多能多才の身を以て、蚤縁なく後援なく三十あまりにして未だ

立つを得ず。不遇を憤り、家業の紹ぎ難きを嘆き、瀬見の小川の清き流が淺からぬ縁をたよりとして、洛外加茂河原のほとりに移り住みしが、身にもてる才能はなまど妄執のきづなどなり。心中の苦悶やるかたなく、四十にしてなほかつ惑を解くこと能はず。僅かに管絃の手づさびに心を慰め、歌道のほまれをせめての心やりとして、幾とせのあぢきなき春とし秋を送りにき。この間つらく世の盛衰、人の身の浮沈を見て、これを我身におもひ較ぶるに、至尊の御身を以て、時利あらず、勢非にして、空しく海南の僻邑に恨を呑みつゝ世を終り給ひしもあり。さしもの平家一門の榮華も春の夜の夢の間にほろび、智勇一世に比びなく禁裡の御おぼえさへ斜ならざりし義經も、あはれ衣川のみなわと浮えぬ。數ならぬ我身の願かなはずとて、そは人の世のはかなき定め、誰をかうちみん。みなこれおのが短かき運のみ。すぐせのつ

たなき因縁のみ。何の爲にか心を苦めん。ざるをなほ悶え苦しめるは  
 妄執なり。ありし世のはかなき轉變を見るにつけ、諸行無常のたふと  
 きみ教ははじめて身にしみてぞ覺ゆる。愚かなる身よ。かねて學びし  
 道家の教止觀の法をばあだにや聞きし。和光同塵の旨をば悟らず。三  
 界の火宅を逃れ出づることの遅かりしこそ淺ましけれ。況して今我  
 れ妻子なく珍寶なし。何につけてか執をといめん。命を知るてふ五十  
 の春、こゝに長明心氣漸く静まり、生ける見聞に法の教を體驗するこ  
 とを得てまたく無明の夢よりさめつ。すなはち家を捨て世を捨て、  
 大原の雲には入りぬ。一切衆生悉く佛性を具ふと佛はときぬとか。濁  
 世末法のころとは云へ、さすがに久しく、かつ深く、人の心に根ざし固  
 めし佛教の思想と、長明が一身の境涯と、時勢の状態とは因となり縁  
 となり、互に相助けて彼が遁世の果をば結びしなりけり。

長明すでに世をはかなみて世を捨てつ。世をはかなむは執心の名殘  
 きえざるを苦めばなり。身世間を出でずして、心世間にあらず。塵の肉  
 體を穢土に止めて、心は淨土に住するは覺者の域なり。住家は淨名が  
 跡をけがせりと雖、維摩が覺りの境地は、長明の企て及び得し所にあ  
 らず。たゞ現し世の悶々にたへずして、家を捨て世を運るゝものは、世  
 間を離るゝに由りて僅かに安心立命を求めんとはするなり。世を捨  
 て、立命の地なほ求め能はずんば、そも何が爲の遁世ぞや。知らず長  
 明如何にして安心を得、いづくにか立命の地を見出でたる。想ふに長  
 明の厭世の思想は、その縁かけ身おどろへて、洛外に去りし頃より始  
 まり、遁世落飾の時までの間は煩悶苦心のまなかにして、厭世の思想  
 の頂點に達せしは正に此間にあるべし。是より後十年の間、大原の雲  
 を友として、かりの宿りも定めず、昨日は東、今日は西、風のまゝなる萍

の生活を送りし間に悲観やう／＼うすらぎて、六十路の露さえがたに更にかりの庵を結びしころは、安心の微光を認め得たるにやあるべき。

日野の山奥のかりの庵は、廣さ僅かに方丈高さ七尺が内なり、たゞ土居を組み、屋根を葺きて、かけがねをかけたのみ。改め造らんにも手敷いらす、他に移さんにも車二輛にて足れり。中ごろの住居に比べて百が一にも及ばず、ありし昔の洛中の棲家にたぐふれば千が一なり。安元のに劣るまじき大火また起りてこゝに及ぶとも、憂ふるに足らず。治承の旋風再びかへすとも、元暦の大なるなほ已ますとも、心にかゝる所なし。執を止めざらん心なり。

南に假りの日がくしをさし出して、竹の簀の子を敷き、その西に闕伽棚を作り、中には西の垣に沿ひて阿彌陀の畫像を安置し、その帳の扉

に普賢并に不動の像をかけり。彌陀の力にたよりて淨土の光明を仰がんとめなり。

北の障子の上の黒き皮籠三つ四つには、和歌管絃、往生要集などの抄物を入れ、かたへにをり箏、つぎ琵琶各一張をたてたり。往生要集は生死の疑をとかん手引とにや。世を逃れ、人を捨てたれば、語らんにも友なく、心無聊に苦しむ折々には、おぼえの管絃に清き樂をもとめて、慰めの助とやせし。今はその道のはまれも願はざれど、時々におもひ浮べる心を種として、敷島の道をば捨てざりしならむ。

藤なみの色に紫雲をおもひ、時鳥の聲に死出の山路をちぎり、ひぐらしのなくねも世をかなしむかときこえ、つもりきゆる雲に罪障をたぐふ。物につけつゝ、教法を忘れぬ志は殊勝なりながら、獨り居のゆゑに、おのづからなる口業をおさめ、境界なきがために、禁戒を犯すこと

なきに安んずるさま、所詮は小乗方便の教に彷徨ひ、他力の本願を希ふにどゞまりて、即心即佛の眞諦には覺り及び難かりけむ。  
 或はつばなをぬき、いはなしを採り、或は芹をつみ、落穂を拾ひ、或は蕨をどり、木の實をひろひて食となす。饑饉また起るとも必しも餓ゆるを悲まじ。衣は藤のころも、麻のふすまに安んじ、住はからく一身を容るゝをもて足れりとなす。財寶なしと云へども何をか苦まむ。風月をたのしみ、古人を友とし、松嵐に秋風の樂を和し、水の音に流泉の曲を寄す。そのたのしみや淡くして極ることなし。樂んで淫せず、悲んでやぶらず。さすがにひたぶるの悲觀より脱し得て、化に乗じて盡くるに歸し、天命を樂んで疑はざる、安身立命の地に達し得たるに似たり。さは云へど、長明自ら人を恐れて荒磯にすむみさごにたとへたるを見れば、げに姿は聖に似たれど、なほ濁りの色の、いさゝかたりとも殘れ

りしや、あらずや。  
 長明が人世觀は佛教の厭世觀たること、今さら云ふまでもなし。彼が遺書は少からずと雖、しかもその觀念の工夫、教義の判釋に就きては語る所あらず。さればこそ、こゝしく彼が思想を剖拆して、こちたき論議をかまふることを爲さで、たゞその厭世の思想の由來を尋ね、その遁世の機を探り、いかばかりの安心を得たりやを揣摩するに止めたれ。佛は卑き拍子に過ぎずと雖、一たび平相國の愛を失ひしや、容色の移るひ易く、恩寵の憑み難きを見て、早くも世の無常を悟りて、こゝに世を背きぬ。盛遠は一介の武辨なりきと雖、袈裟が貞節に煩惱の迷夢さめて、人間罪障の多きを嘆き、こゝに菩提の心を發せり。長明と佛と及び文覺と、一身の妄執を縁として、三界の火宅を逃れえたるはこれ一なり。いづれをか高しとし、何れをか卑しとはすべき。おもふに

長明が厭世的人世觀は、ひとり彼れの人世觀にあらずして、やがてこれ當代の人世觀なりけむ。たゞ人に上根あり、下根あり。佛縁に深淺あり。或は俗塵にうもれて終り、あるは出世の機を捉ふ。境遇は萬別なり。あるは早く妄執の闇をはなれ、あるはあそく淨土の光をあふぐ。親鸞榮西の聖は姑く問はず、無縁の衆生は措いて論せず。當代の佛教的厭世觀は實に方丈記の人世觀なりけり。

長明が管絃に巧なりしことは世に傳はれど、名手の妙音すら梁櫃をめぐりて留ること三日に過ぎず。今は判するに由なし。彼また和歌に堪能にして、聲名當時に高く、みづから任ずること亦深かりき。げにや長明が歌は、よし巧に過ぎて纖弱なる慊なきにしもあらざれども、新古今の調を悉して、絶唱の域に入れるもの少なからず。されどこれはたつひに定家家隆の壘を摩するに至らず。これを彼と時を同うし、境遇

をひとしうせし、西行にくらぶるに、花餘りありて、實は及ばず。ひとり一篇の方丈記あり。文は一世の精粹をきはめ、想は當代の思潮を傳ふ。些か匠氣あるを病めども、流麗簡淨、調は事どもに緩急し、筆は想どもに卷舒す。事を叙するとき、親しく見るが如く、思を抒ぶるとき、直に心を示すが如く、理を談するとき、絶えて乾燥無味に落ちず。這般の文字、上は王朝に溯り、下は徳川の末流を究むども、他に匹儔なけむ。疑ふらくはその堪能なりけむ。管絃の妙音、托して聲調の間にあるかは。た、晩年、悲觀やうやくうすれて、安心の境に近づき、光明を幾微の間に彷彿し得たる高士の遺韻、文字の上に留るに依るか。我れ方丈記を讀む毎に、未だ嘗て秋風の樂、流泉の曲を想見せずばあらず。

石川や瀬見の小河は淺くとも

すみけむ月の影ぞゆかしき。

## 樂詩一體論

昔韓娥と云ふ歌の名手が、その美聲を縦まゝにして歌ふときは、餘音が梁櫃を遶つて止まつて居て、三日の間も消えなかつた。か程の名手であるから歌を嚮で口を糊して居たが、或るとき逆旅を過ぎつて、人々に辱しめられたので、曼聲哀哭した所が、その里の老幼が何處どなく悲しい心もちになつて、涙は流れる、胸は塞がる、三日の間食ふことさへ出来なかつた。そこで遽かに娥の後を追はしめて、陳謝した上で還て復た曼聲を發して長歌を謠ふて貰うたれば、全邑の男女は喜躍抃舞して自から禁ふことが出来なかつたと云ふことである。

又師文と云ふ琴の名人は陽氣な春の季節でも、商弦を叩いて南呂を召すときは、忽ち冷風が吹き出で、草木が實り、秋に當ても、角弦を叩

いて夾鐘を迎ふるときは温風が徐に回り來つて、草木が榮え、夏でも羽弦を叩いて冬聲を爲せば、霜雪が降り、冬でも徵弦を叩いて夏聲をなせば、堅氷が立どころに散じてしまふ。或は四弦を總べて彈ずれば景風吹き、祥雲浮び、甘露が降つて醴泉が涌いたとやら。

如何に名人が謠へばとて、彈けばとて、四季が轉換する恐はないが、音樂歌謠が、人の情を動かすの深い事や、微妙なはたらきを形容して、その功德を賛嘆して遺憾なきものと云ふべきである。實際音樂が管に人を動かすばかりでなく、心なしと云はるゝ禽獸蟲魚に對しても、感化と云はるか、興味と云はるか、兎に角一種の力を有つて居るのは事實である。蟲類や魚類の中には音樂の響を慕うて集るものがある。豺狼の如き猛獸すら、名手の樂のねに聞きとれて、禍害を加へなかつた實話もある。狂人の暴れまはるときでも、音樂によつて氣が靜まるの



は能く知られた事實である。彼の瓠巴が琴を鼓すれば鳥舞ひ魚躍ると云ふ傳説は、決して架空の譚とは云はれない。此の効果が賢愚老幼を問はず、又は蟲魚の類にまでも、度の多少はあつても、及ぶと云ふ點では、音樂は詩歌讀みものとしてのより遙かに勝つて居る。併し美學では、その流派に拘らず、文學ことに詩歌をもて、藝術の最高位に置くのを常とする。その理由はもとより學者により多少の相異はあるが、直接には感官に憑らない事、従うて實の拘束を受くること、が最も少くて、空想の翼を充分にのばすことが分來て、且つ空間時間の兩つに涉りて、静止も運動も變化も名残なく、巧みに描寫し、表示し得ると云ふ點で、自由藝術の粹とせらるゝのである。即ち、單純なる自由藝術の中で、俱在的直觀に關するものには、建築がある、彫塑がある、繪畫がある、繼起的直觀のには、器樂や言語のミミックや、聲樂がある。

此兩つを兼ねたるものには、パントミックや、舞蹈や、歌舞伎及び樂劇の技藝がある。這般は度や類の相異はあるが、悉く皆知覺にたよるものである。獨り詩歌に至ては、空想を以て命として、觀念及思想に依憑して直ちに人の靈覺に想ふるものである。これが詩歌の自由藝術の最高位に置かるゝ所以であらう。なる程藝術の所依から云へば、觀念に依るのは知覺によるのより高等なる方法である。現に生理的に感官の發生から見れば、人間に於ても他動物に於ても、最初が觸覺次が味覺、臭覺、聽覺、視覺であつて、その機關の組織も、機能も共に此順序に隨て精密であり微妙である。かく遅く發達するもの程、より進化したもので、より高等であるのだから、此を類推法でもつて行けば、此等の知覺よりは更に遅く發生したる思惟と云ふ機能は、更に高等であるべきである。さすれば觀念と思想

とに依る詩歌の、知覺によるそれらよりは、一層高等のものだと云ふことが云ひ得られよう。但しそこが問題の潜伏場所である。と云ふのは、藝術の所依は手段であつて目的とは違ふ、所依は高等のもので、その爲に直ちにこれを用ゐる藝術の高等なるを斷ずることが至當であらうか。

藝術の要諦は人の美的趣味に投合し、またそれを喚起するにあるのである。そしてその趣味と云ふものは、知的のものでなくて情的のものである。論を俟たぬ。然すれば、最も能く人の情を動かしてその美的感興を惹起することの出来るのが、最もその目的に適ふと云ふべきである。此點から吟味して觀念に依憑する詩歌は如何であるか。觀念そのものは、元來知的のものである。外來の刺激その他のものが、腦中樞には入つて、こゝに結ばれたる意識上の現象である。彼の喜怒

愛樂の情の如き漠然たる意識の狀態ではなくて、意識の流の中に、云はば浮べる物である。多少判斷の作用を受けて生じたる定形であつて、知的のものである。併らいつれの觀念もこれに伴ふ情調をば持つて居る。又簡單なる觀念のみでなく、複雑なる思想も亦情調を伴うてゐる。故に觀念によりて情に愬ふことが不可能ではないが、どちらかど云へば間接である。直ちに情そのものに愬ふものではなくて、かゝる情を伴ひこれを喚起すべき意識狀態を形くらしむるのである。隨うて、その効果は直接のものよりは少い、と言ふことは争はれぬ。然るに音樂は之に反して、所依はなる程聽覺であるが、情の特有せる精神のリトムスに直訴するのである。觀念を所依とする詩歌の如くに空時間に涉り變化を悉して、自由自在に美感を喚起することは出来ぬけれども、情に愬ふる方法は直接である。精神中のリトムスと絲

竹管絃に宿り得るリズムとの間に、物理的共鳴のやうな關係があるか否かは、分らんが、どに角リズムを以て情のリズムを動かすと云ふ點では、直接である。想ふに、音樂の禽獸蟲魚や、狂人に對しても、効果のあるのは、此故であらう。此點から云へば、音樂は詩歌の敵に非ずと云うてもよい。

併ら音樂は只形式のみによつて情を喚起するので、それ自身に精神的內容がない、と云ふことは大なる缺點であつて、同じ曲が、情の性質さへ同じければ、内容を異にする他の歌にも適用せらるゝことは、之を自白して居るのである。此點より云はゞ、詩歌に到底及ぶ事は出來ぬ。その代り、音樂が内容を有せしめて、形式に止ると云ふことの利益としては、賢愚と老若と男女とを問はず、その音樂のリズムに感應し得る情的リズムを有する限りは、均しくそれに感動を與へ得る

のである。例へば蠻人や小兒やは、その精神的發達の幼稚なる爲め、複雑なる高尚なる曲は解することが出來ないでも、悲哀な曲には同じくあはれを感じ、快活なる曲には、同じく意氣の暢達を覺ゆるのは、之が爲だ。彼の潯陽江頭秋月明なる所、孤舟の嫠婦が弾じたる一曲の琵琶の音色は、聴くものをして同じく、悽愴悲愁の感あらしめたに相違はない。なれども弾する人の心根と、聴くものゝ感想との間には、その内容を異にして居たのであつた。唯その心情を聞くに迫んで、最も事情の似かよひたる江州の司馬が、感慨特に深く、青衫の濕ふこと特に、太だしかつたのである。

詩的民族とも云はるゝ古希臘人の神話では、カリオーペが九人のミューズの最高位に立つてゐる。カリオーペは人間の聲の美を代表して居る。叙事詩を謠ふときの聲の美である。そして文學や歴史やのミ

ユーズより上位を占めて居ると云ふことは、面白い又意味のあることと思はれる。希臘人は詩的の國民である。その藝術的技巧の奥妙にして、而かも典雅なることは、後代の比肩を許さぬとまでも評さるゝ。されどその美論、カロカヤチヤ(善美一體論)の思想は、近世の美學者には斥けられた。カリオーペに關しても同様の説もあらう。それでも余に取つては最も意を得た所がある。即ち樂詩一體論の寓意的表示と見らるゝのである。

前に云うた通り音樂は形式一面で、詩歌は内容で、情を動かすものである。彼を棄つれば切ならず、此を捨つれば漠たるを免がれない。此兩者を併せ備へたものが、藝術の本領を全うするに近いものではあるまいか。詩を謠ふときの聲の美は、やがて此を兼備して居るのである。併ら余が茲に音樂と云ふのは、さながらの音樂とは限らぬ。音樂の精

神があればよいのである。音樂の精神!! 語は少し奇かも知れないが、情のリトムスに直接に想へるのを云ふのである。詩歌が、若し必ず歌はるゝものならば、そこには音樂(本來の)そのものゝ必要がある。然かし、近代の詩歌は必ずしも律語たるを要求せぬ。必ずしも謠はるゝものたるを強いぬ。文の上からは散文のを許して來た。けれども、なほ美文である上は、散文の詩である限りは、口調の好いのが必要である。こゝに音樂の精神が宿つてゐる。想と文體との調和が必要である。そこに曲の精神がこもつてゐる。これが詩の外形に存すべき音樂の精神と云ふものだ。

希臘の哲人ピダゴラスは、み空の星に樂を聞いた。余は詩歌の内容あるは全篇の結構に、あるは叙事の排列に、あるは心理的變化の描寫の上に音樂精神を聞かむことを欲するのである。人間の精神的構

成がリトミツシであるから、情の昂低より思想の變化の上にも確かにリトムスがある。詩人がこのリトムスに相應した描寫法を取るのには音樂の精神を取り入るゝ所以である。全篇の構成も亦そうである。作劇法にて最も重んずるのは、畢竟この人心のリトムスを捉ふる點である。管に劇詩に限らんやで、小説でも詩歌でも、此要意は極めて必要のものとする。

余は現代作家の小説詩歌等は、時の許すかぎり平生愛讀して居る。そして、その作品に對しても、世の評家諸君の如き嚴肅—あるひは嚴酷なる態度は取らずに、随分寛大にも見るし、同情も持つてゐる積りである。又我が小説の發達及び成效も、そんなに英米などの普通の作に劣るとは思はん。或る點では却て優る所あるかとも思つて居る。しかし、文も巧であり、觀美眼も高いらしい作品中にも、不幸にして前陳の

音樂の精神を忘却したものが多いかと思ふ。此は實に遺憾である。

### 心の音樂

嘗て詩歌と音樂との關係に就て述べたときに、詩歌と音樂とは、二つながら律リトムスに愬レふるものであるが、詩歌は實質的に心に愬へ、音樂は形式的に心に愬へるものであると云ふことを述べて、詩人は律語を以てすると、散文を以てするに關はらず、音樂の精神を忘れてはならぬと云ふことを説いた。此度は音樂家が、亦詩歌の精神を忘れてはならぬと云ふことに就て、述べて見ようと思ふ。その前に一寸律リトムスに就てなほ云ふことがある。

リトムス即ち律と云ふものは、物心二界を通じて存するもので、謂はゞ宇宙的原理である。物體の分子の振動にも多少精粗の度こそあら

うが、一種の律が備はつて居る。その最も明なる所では、殆んど一の廣<sup>アリス</sup>袤<sup>オス</sup>のみを有すると云ふべき物質(特に固形の)の振動である。線形のものゝ振動が即ちそれである。

絃樂はこの律を所依として居る。精神作用の方で云うても人の心の活動には、おのづから律をなす邊がある。又心それ自身も律的である。特に、最も生理的基礎の深い情に於て律的である。個人の心のみでなくて、社會現象の様な、多數心意の聯合の現象に於ても亦然りで、或る學者は一切の社會現象の根本は模倣と云ふ事であるが、その模倣は即ち反覆<sup>レネチシヨ</sup>と云ふ働きの一變形に過ぎぬ。そして反覆はやがて物の顛<sup>カシヂ</sup>動<sup>ラシヨ</sup>と同一の事であると唱へて居る。云ひかふれば、社會現象も、根本では律的だと云ふことになる。加之一切の法則と云ふものは悉く律的と云ふことを豫想して居る。居法則と云へば必ず一定の現象の次には

一定の現象がくる、即ち同一順序で反覆さるゝと云ふことを認めて居るからである。

ピタゴラスは、天体の運行などをもちよミシと見て、天体が一の樂を奏でゝ居るとしたのである。此人は純乎たる音樂者ではなかつたが、尙其發明したモノコルドに由てオクターフとクイントとクワルトの關係を明かにして、後の希臘音樂のインターヴル研究者に貢獻したところが少くない。決して想像的な<sup>シフエレンツ</sup>球<sup>シュク</sup>の音樂<sup>シュク</sup>(即ち天体の運動によつて奏でられて、大千世界に響き渡をてゐる)天体の音樂を唱へた許りではない。又此常識から判じて想像的な、怪異的な、音樂論も、更に詳らかに窺がふと、決して單に架空な無意味な説ではなく、その哲學的原理たる無方<sup>トナフイロ</sup>と云ふものゝ見地に立つた數論、世界開闢論及び天文説など、密接な關係があり、延いては輪廻の説となるので、頗る深遠な

所もあるし、また極めて面白い所があるので、詮する所は、リズムと云ふ世界的原理の一つの見方とも解釋することが出来る。

此の天体音楽の主張者の説で特に面白いのは、何人も天体音楽を聞き得るし、聞いても居るのであるが、しかも之を覺らぬのは生れかつるやがてから、終始これに慣れて居るから分らないのであると唱ふることである。實にや吾々は、その心の働きの上にリズムを以て居る心に音楽が備はつて居るが、併しそれを覺つて居るものは少ない。恰かも水と云ふものが生活に極めて缺く可からざるものであるのに、常にその恵に浴して居ながら、吾々はさほどにその利益恩澤を感じないのと同じではあるまいか。また音楽と云ふものが、その内容のない、形式的の音響としてのみでも、能く人の情を刺激して、或は喜ばしめ、或は悲しましめ、或は快活にし、或は沈鬱にならしめる微妙な作

用を爲すのは、畢竟この心の律があるからして、音響から來る律の形式が、之と相呼應する爲ではあるまいか。人のみではなく、或る點までは動物に對しても、音楽の此作用が効果のあるのを見れば、此推測は音に臆測のみでなく、事實であらうと思はれる。いや實際上、近世の音楽の發達と科學の進歩、別しては精神物理学の進歩とは、相俟つて既に多少此根本的問題の解決に光明を與へて居る。

さてこうなつて來れば、如何なる心的状態を現はすには、如何なる調や律を以てすれば有効であるか、情の態のどう云ふ變化には、どう云ふ曲が適當して居たかと云ふことが、だん／＼に明かになつて、作曲上にも、曲の批判の上にも、非常な進歩を見ることが出来るやうにならう。また樂を聞くものにとつても、耳の音楽と心の音楽との間の關係が明かになるから、音楽の効果は更に有力とならう。併がらこの點

は、今はまだ光明を幾微の間に認めはじめたと云ふに止まつて、充分に明かでないのは遺憾である。

學理上には未だ充分明かになつては居ないが、學理はつまり事實の解釋で、事實は學理に先つて存するのである。心が既に律的のものである以上、直觀的に箇中の消息は理會されることは出來まいが、私は或る點までは出來ると思ふ。いや思ふばかりでない、事實はこれを證して居る。音樂の普遍性は即ちそれである。名手の音樂は老幼を問はず男女を論せず、又人と他動物との別なく、或る點まで多少の感動を與へて、その情を左右し得る事實はそれを證して居る。すなはち能く音樂を以て人の心を動かし得る人は、たとひ自から意識せずとも、直觀的にこの消息に通つて居る筈である。此事は聽き手よりは演奏者に對して更に必要が多からうと考へる。

前にも別に出した鄭の師文と云ふ人は、師襄と云ふ樂師に教を受け居た。然るに三年も経つてなほ曲章を爲すことが出來なかつた。そこで師襄は師文が遂に音樂に於て望なきものと思つて、歸らんことを勸告したのである。その時師文は琴を捨て、嘆じて云ふには、自分が絃を調べかねて、曲章を爲すことの出來ないやうに見ゆるのは、その實出來ないではない、自分の志す所は絃に在るのでなく、また聲にあるのでない。想ふに、心と手と樂器と三者相應するを得て、音樂は始めて妙境に達するのである。内に若し心に應じないならば、外に器に應ずる筈はない。それ故未だ指を按じ、絃を調べぬのである。今且らくゆるして、後日に觀てくれよと答へた。後幾ばくに經たないで師文は師襄に往き逢うて既に心に得たと答へて、始めて之を試みた。師文が春聲を爲せば暖風が徐ろに來つて花が咲き、秋聲を彈すれば秋風起て



草木實り、或は夏調、或は冬音、彈するに從て陽光堅氷が立ろに來つたので、師襄は恥ぢ且つ嘆じたこと云ふことである。談はもとより比喩に過ぎまいが、心の音樂と云ふことを解して居る所はさすがに巧妙である。

### 戦後の文壇

●大衆觀察 ●國民活動としての戦争及文學 ●戦捷と國民的意識 ●史上の前例 ●國民自覺の影響  
●國民的特色ある文學 ●戦争の趣味上に及ぶ影響 ●人世に對する眞面目なる觀念 ●文學上の好資料 ●社會状態 ●總結

●大體觀察 ●吾々の社會、即ち多數人が相集まつて成してゐる團體的生活共同生活と云ふものは、その各部分や各分子が多少異つた思想感情を有して目的も亦之に伴はれて、種々異つて居るに拘らず極めて密着な關係を保つてをるので、その一部分に變動があれば、池水の

一小部に起つた波紋が漸次に四方に擴がるやうに、直ちに全體とまでは行かずとも、大部分に影響が波及するものであると云ふことは一般に人が認めて居るが、併し此比喩は實は誤解を伴ひ易いのである。程小部分に起つた變動でも、社會の各方面に擴がると云ふことは此例の通りであるが、社會中に起つた變動が、その社會の各部に波及する模條は水波の場合とは餘程違つて居る。波紋に在ては、その中心點から之に接してをる各部へ、同様に、次第々々に、おなじ變動が傳はるから、その變化の状態やら、法則やらが、見易いのである。然るに社會中の變動は、必しも順次に同様に變動が傳はるのではなくて、空間的には接近した部分へのみ傳はらず、又同様の影響が來るのでない。と云ふのは、社會の分子たり部分たるものは、意識あり意志ある人間であるから、盲目的に物理的に外來の勢力に從つて動くものではない。

からである。他の語で言へば、社會現象は純粹に物質的のものが無いではないが、概して本質に於ては心理的現象であるから、外來の勢力は各人の思想中に入つて多少變化を受ける。即ち同一の勢力でも、或人には多大の影響を與へ、或る人には影響が少い。又は全く現はれずに終ることがある。又同一の變動でも、その與ふる所の影響が人によりては著く趣を異にする様なことがある。のみならず時にはまたく反對の現象を呈することさへ珍らしくない。

そこで或る種類の社會上の變動が社會に與ふる影響に就て、遺憾なき打算を試みるには、先づその變動が社會の一部分に影響を與ふるものか、但しは全體に影響を及ぼす底のものかと云ふこと、換言すれば、部分的變動か、全部的變動かと云ふことを考へて、次にはその變動が一般には如何なる種類の影響を惹起するかを明かにし、第三には

その民族の特質、社會の組織状態、さては時代の傾向、一言で蔽へば、社會の現状氣運を稽查して、さて終りにかゝる現状氣運の下に、此種の變動がどの様な反應を催起するか、即ち該變動の結果如何と云ふことが、始めて論定され得るのである。されば此等の凡ての點が、明確に定め得るなれば、將來の豫想も畧ば間違なく出來やうが、所が實際は至難のことで、一つには研究者の知識の精粗、觀察の行き届くか否かにも因り、又一つには事實そのもの、性質上確かに秤量し難いものもあつて、そこは研究者の直觀的推定に本づく外に道が無いから、さてこそ豫想は當りもし、當らぬもあらう。如何に研究法はよくつても、學理に通じ、史的知識に豊富な人でも、必しも豫言的斷定が當るとは限らない。こゝが困難な所で、又面白味のある所であつて、言はゞ研究者の鑒識、即ち天才的直觀の力に依憑する所が、反て多からうと思ふ。

勿論今述べた所は、一般に抽象的に、社會上の變動と、その社會に及ぼす影響とに就てのことであるが、如上の用意を以て戦争の社會に及ぼす影響に就て致ふるに、戦争特に社會内の戦争でなくて、國家と國家との戦争に至ては、民族の隆替、社會の生存、國家の安危に拘はる大事件であるから、その影響の及ぶ所は部分的でなくて、國民全體に關するものたるは言を俟たぬ野戰の爲めに、國家の財政上の變動を來すはもとより、延いては經濟上政治上の施設にも大關係がある。働き盛りの壯丁が軍國の事に従事する爲め、農業の上にも商業上にもはた工業上にも少からぬ影響を受ける。戦死傷者の多數なるより、人口問題上にも變化を生ずる。醫學上にも關係がある。武器や戰術戰略やその他の武備制度の上にも大變動の來るは云はでもの事。倫理上にも一般社會的事業にも非常の影響がある。戦争の原因、經過及び結果を

引くるめて、云はば、その影響の及ぶところは數ふるに違もあるまい併し當眼の問題は戦後の文壇と云ふことであるから、這般の一般社會上のことは姑らく措いて、愈々本問題に取かゝるとしやう。戦争の文學に及ばず關係を研めて、そして文壇の將來の趨勢氣運を察せんが爲には、先づ國民の實際的活動としての戦争と、その心的活動としての文學との關係を考研して、大體の氣運を察し、次に戦争が社會民心に與へる影響即ち國民的意識時代精神の上に及ばず結果を看て、文壇に起るべき變化及氣運傾向を推測するのが順序でありと思ふ。そこで、  
 國民活動としての戦争及文學の關係を第一に觀察して見やう。個人の事實としては、戦闘に巧なものが、必しも知的活動に長じては居ない。力量の強いものが智慧や學問にも能く人に優るとは定まらん。

否、通俗の思想では、「大男總身に智慧が廻りかね」で、却て反對に考へられて居る様である。アガメンノンやヘクトルや、トロヤ戦争の大立物ではあるが、彼等はイリヤスだのオヂツソイスの作家ではなく、またかゝる作家たる事は出来なかつたのである。逆まにホメーロス（假りに一人だとしても）は戦陣の勇士ではなく、又勇士たり能ふべしとは限らないが、併し、それは事實上から、結果から見ただことで、理論上此兩様の活動は交渉を許さないと云ふことは出来ぬ。若し勢力不滅の物質的宇宙的大法が、人の精神活動にも適用する方が出来るとせば、物質的勢力の強いものは同時に精神上の勢力も強いものだと云はなければならぬ。健全な精神は健全な身體に宿ると云ふ訓言は、此思想の味方らしい。實際上、同じく智的研究に従事するものの中で比較すれば、虚弱な身體のものよりは健全なものの方が勢力がつかく。従うて

大部の仕事が出来、尤も心理學上の事實としては、身體の極めて健全なる状態、活動力の充ち満ちた状態よりは、稍や沈靜した状態にあるときの方が、思考に適すると云ふことを主張する學者もある。なる程活動力の充ち涉つて居るときとか、酒など飲んだ後の興奮に過ぎたときや、及び春のさかりの陽氣な時節には、心もおのづと浮たれ過ぎて、「春の日や達磨大師も尻もだえ」の穿ちの通り、或は冥想的思索には不適當なことがあるのは事實であけるれども、此と同様な關係は物的勢力の變態する場合にも亦存する事で、此事實の爲めに此兩様の活動は全然別種であると斷することは出来ぬ。

此個人に於ける兩様の活動の關係は、同様に民族、又は社會上の事實に對しても認むることが出来る。そして個人の場合よりは、一層眞に近い様に思はれる。個人にあつては、此兩様の甚しく性質の異つた活

動か一方より直ちに他に轉ずる、即ち戰陣の勇士、武藝の達者が知的思索に向ふと云ふやうな急な變化は從來の素養が同時にあるにしても、少くともその一方にのみ向けられた精力丈けば、他へ向け變ふる爲めに、變態の爲めに冗費せらるゝ所が多い、然るに一民族又は社會全體に就て云ふときには、その民族が有し得る、又現はし得る勢力の分量度合に就て云ふに止まつて、別々の云は、専門の人々に依りて爲さるゝのであるから、勢力の變態の爲めに失ふ所は少い道理である。此民族心理上の問題は、學說上では未だ一定の結論に達して居ない。或學者は民族の活動的能力は、凡ての方面に於て、大畧同一程度にあると斷言しやうとして、歴史上より、又は心理上より、説明を企てゝは居るが、まだ、假定も、しは想定の域を脱し得られぬ。愛山氏はタイムズ記者の言を引用して、日本は戦争に強い、戦争に強い國は必

ずその文明を代表する、進歩した文學藝術の發揮を見るべきものである。然るに、今日の日本に、まだその充分なる發揮を見ないのは、恐らく、非常な潜勢力が保たれて居るのであらうと云はれた。すなはち、上述の思想を肯定してをらるゝのであつて、私も至極同感であるが、併し想定に止まつて居るのは云ふまでもない。此考から行けば將來に於て我が文學は非常の發展進歩を爲し得べきであつて、前途頗る有望と云はなければならん様であるが、此考は畢竟民族の活動的能力に就ての事に過ぎぬ。果してその充分なる發揮が實際に現はれて來るか、は別問題である。例へば熱が光に變じ得る事は物理上明かな所であるが、その實際にかゝる變態をなすには、或る條件の下にあるを要するのと同じで、國民の中に如何に大なる潜勢力があつても、此が文學上に現はれて大發展を爲すには、物質的現象の場合よりは更に

さらに複雑な種々の條件が充たされた上のことである。然らば此條件は何かと云ふに、主たるものは、向後の文學の大發展を迎ふるに充分なる國民の文學的趣味や、素養や、はた民族的特質氣風の文學的藝術に對する適否等の主觀的條件、及び社會的境遇に對する時代の必要及經濟上の状態などは客觀的條件等である。併ら此等は唯豫備の條件であつて、文學的天才の出現を俟つて始めて文學の隆盛は希求することが出来るのである。

さて國民の活動としての戦争と文學とに就ては、既に觀察したから次には、

戦捷と國民的意識との關係を見やう。此に國民的意識と云ふのは民族精神と云うても宜からう。社會意識と呼んでも宜からう。詮する所、平たく云へば民心のことである。されば語を換ふれば、此關係はや

がて戦捷が國民の精神的生活の上に及ぼす影響に外ならぬ。そこで戦捷が民心に及ぼす影響は如何であるかと云ふに、最も明白なことは民心の活氣を帯び來る事實である。嘗に戦争のみでなく、一切の社會上の變動は、民心興奮の結果を生ずるけれども、別して戦争は全國の利害上に絶大の關係があるから、一層此點に於て著しい。況んや今回我が國民の戦うた大戦争は、敵は名に負ふ列強中の覇者と目せられた露國であつて、その勝敗は國家民族の安危のかゝる所であるから、國民的活動は空前の高調に達し、民心の興奮はその極に至つたのである。

斯く空前の活動によつて最高調に達した民心の興奮は、戦争の勝利によつて愈々興奮の度を進める。その當眼の事件が終局に臻つても、決して直ちにその平穩沈靜なる舊態に復するものでない。平和は恢

復せられて、戦争の上にはその活動力が現はるゝ途が無いとしても、此活氣を帯びた民心は、他の平和的活動の上に、著き活氣を興ふるに至るのが當然である。戦争てふ實際的活動によりて生じたる民心の興奮状態は、延いて他の一切の社會的活動の上にも感染し行くのである。此れは前に述べたる活動としての戦争と文學との關係と相似て居り、又交渉する所もあるが、全く同一ではない。即ち此は國民的活動力が、何れの方面に發現しても同一程度にあると云ふのでなく、單に一面の活動によりて喚起せられた、精神的生活の興奮は他の方面の活動にも亦及ぶものであると云ふに止まつて居る。此點から見ても、今後の文壇は隆盛に趣いて、少くとも活氣あり精神ある文學の出現するであらうと云ふ希望を抱かしめるのである。

併ら此活氣を生ずると云ふことは、戦捷より來る國民的意識上の唯

一の影響でない。此外に一層大切な影響が二つある。國民の自覺と人生に對する眞面目の觀念との發生が即ちこれ。

兒童の心意發達の状態から考へても、又思想發達の史的事實から察しても、明かな通り、直覺的知識が先づ存じて而る後に、反省的の知識は生ずる。漠然たる認識及自我以外のものゝ認識は先で自我に對する明瞭な思想はその後に出來てくる。反省的知識や自我の認識は、國民的意識の上で云へば、國民の自覺に相當すべきものである。此自覺の發生は、自他の對照比較の結果である。然るに國家や社會の場合に於て、當時自他の對照比較はないではないが、その著しく明かに自覺せらるゝのは、戦争の如き國民間の競争の起つた場合に於て最も著しい。そして國民の自覺と云ふは、強ち國民の實力に對してのみでなく、その國際間の地位や、民族の天職や、特質や、その他あらゆる事に關

しての自覺が、かかる場合に明瞭に民心に映するのである。特に我が國の如き、文明に於て後進を以て認められもし、自ら認もして居て、新たに列強の間に仲間入りした國民に取ては、他の列強に對する度に過ぎた評價やら、自國に對する實以上の抑損やらが先に立つて、充分な國民的自覺はなかつたのである。然るに這回の空前の戰爭に於て、青史に匹儔少い大捷を得たと云ふことは、この國民的自覺の發生に對する無二の好時期に遭遇した譯である。勿論從來の過度の抑損の反動として、特に極端に奔り易い性質の我が民族に取りては、逆まに野郎自大の弊を生ずることが無いと保證は出來ぬが、それは一時の變調で、やがては兩極端が調和しやうから、自他の評價と云ふ點では、少くとも從來よりは一步を進めて、正當な見解に近づいたと云ふて宜からう。文學(狹義)は一面から見れば、民心の反映であるから、その國

國民的自覺の發生は、やがて文學の上に現はれて、新面目を呈するやうになり、又他方には、内外の文學に對する正當なる批判をも下すを得べく、國民的特質の威嚴を認むる結果として、ひたぶるの模倣を離れて自己の民族的特質を帶ぶる文學の發生を見るにも至らうと思ふ。希臘の哲學史が尤も明かに示す如く、人間の最初の思想は主として外界に向けられ、物質界に先づ向けられたもので、極めて素朴な宇宙觀、自然觀に起つて居る。然るに世相の複雑と人智の發達とにつれ、民族間、都市間をぞの競争だとか、生活の困難だとか云ふ、種々の生活上の問題が、漸く注意を引くやうになつて、人生觀は生じたのである。此思想發達の順序は、蠻人の心理研究によりても、兒童心理の事實によりても、證明せられて居る。すなはち人生と云ふものに對する新面目の觀念は、生活の困難や、身世浮沈の悲惨なる經驗に因つて惹起さる



いものである。然るにかくの如く生存競争場裡の深刻なる感想を一般の人々の心に起すことは、戦争ほど痛切なものはない。そこで國運發展の爲めには慶すべき今回の戦捷も、その裏面に伏在する悲惨なる出来事によつて、民衆をして人生に對する眞摯なる觀念を抱かしめる。人世に對する眞面目の觀念はやがて、時代精神を反映すべき文學の上に現はれて來る。此眞面目な人世觀こそ、實に文學の精體を爲すべき要素である。

以上述べた所は、凡て文壇の前途が希望の光に充ちて居ることを想見せしめるのであるが、なほ一つ同じき希望を抱かしめるものが、ある。即ち

史・上・の・前・例・である。新小説にて既に御意見を拜聴した諸君も、大概例に引かれて居る通り、文學と戦争との關係の問題には、常に引き出

されるのは、大波斯の陸海軍を撃退した後の、希臘文學の隆盛時代と、無敵と稱へられた西班牙のアーマダを全滅させた後の、英文學の最盛期との二つである。此點に就ては上田敏君の細心な御議論の通り、單に類推でもつて、此の如き前例があるから、我が文壇の將來も、亦大發展を爲すであらうと論結するのは、極めて粗雑な論理で、其當時の社會的状態や、境遇や、前代との史的關係及び國民の文學的素地、さては時代の氣運が那邊に向つて、居るかを精密に探究した後でなくては、正當の論結が下し得られぬことは、前に活動としての戦争と文學とを論じた所に述べた通りである。併ら此等の史的前例が、將來の文壇に對する好望を暗示して居ると云ふのは、單に史上の事實として我が現下の國情に酷似した例があるから、それで將來が有望だと斷ずるのではない。論理上からは之と全く逆まで、民族心理上の事實や

ら、社會變遷の有様から觀察して國民的活動の點から見て、國民的意識上の戰勝の影響から考究して、文壇の將來に對して下した結論の傍證論據として、かゝる史上の好前例があるために、益々前途の好望を豫想させると云ふのである。

此の如く、大躰から云へば、理論上のみならず、史上の事實に觀ても、大戦勝後の國運の隆盛に伴ふ文學の發達は、ほゞ豫想さるゝのであるが、此に連關して其時期の問題が残つて居る。即ち大なる戰勝後やがて文學隆盛期が來るかどうか。テルモピレーやサラミスの大戰爭で波斯の侵寇軍を希臘が破つたのは西曆紀元前四百八十年で、此から文學全盛期たるペリクレスの平和時代までは殆んど三十五年間の歲月が隔てゝある。三大悲劇家も悲劇の父なるエスキュロスの外は此大戰爭後の活氣ある時代精神中に述作を出してゐて、特にオイ

リピデスは此戰爭の歲に生れた人で、其作物は謂ゆる全盛期に於て著はれたのが多い。喜劇家のアリストファネスは尙さら遅れてゐる。史家のヘロドトスもツキデスもクセノフオンも此時代の兒であつた。即ち我が明治維新後今日迄の發達に要したと、ほゞ同一の期月が文學旺盛期の準備として、勢力變態の爲に要する潛力として費されて居たのである。然るに翻てその前の時代を見れば、七賢は遠いとしても、ホメロスやヘシオドは不明としても、彼の大戰爭の七八十年前にはイオニア、エレアの諸派、ヒタゴラス等の哲學が既に榮ゑて居り、文學に於ては、抒情詩は餘ほ盛で有て、大戰爭の二三十年前までは、アナクレオンが確かに生存して居り、サツポイ及びピンドールは現に大戰爭に遭遇した人々である。エスキュロスはその以前にその天才を作品の上に示して居た。かゝる有様であつたから、業に

既に希臘民族の文學上の素養は思想の發達と共に、著しきものがあつた。此上に大戦勝後の國運の隆盛、民心の活氣が加はつてすらなほ黄金時代までには、ざつと三十餘年を要したのを見ても、戦勝國にはすぐにでも文學の大發展があらうと考へるなどは、頗る早計の至である。英國の方はど一かど考へるに、無敵艦隊を破つたのは千五百八十八年であつて、此時已に名を成して居た文學者では、ブーカリーや、エドモンド、スペンサーがあつた。沙翁やベリオンは壯年に達して居た。けれどもその大名を成したのは此戦争の後であつた。フレッチャーや、ジョンソンは未だ青春にも達せぬ頃で、ボームントや、マッシンジャーは乳臭未ださりやらぬ小兒であつた。ジョージ、ハーバートは未だ生れず、ミルトンやコウリーに至ては、ベッス女王の崩御の後に生れたのである。されば此等の英文學最盛期の大立物は、大戦勝後の鬱勃たる生氣を

呼吸したもので、その思想や感情や、多少はあれ、かゝる活氣ある時代精神の感化を受けて居たに違いない。併乍らシエクスピヤを標準として云へばなほさら、さなくとも、ミルトンとコウリーを除いて、他の作家等に就て云うても、希臘の例に較ぶれば、大戦勝後と文學隆盛期との間の歲月はあまり遠くはなかつたのである。此點は兩方の事情が随分異つて居た爲で、希臘では波斯と云ふ大敵を受けた爲めに、平素は反目して居た各都市の間、別してスパルタとアテネとが、外來の壓力の爲めに團結一致して、民族の獨立を維持するに力めたが、外患去つて内憂ありで、波斯の國勢の衰退と同時に兩者の權力争奪は復た始まり、此方に雅典人の活動力が費された爲め、心の慰藉を求むる方面などへ充分に身を入れる餘力がなかつたので、勢ひ戦争と文學隆盛期との間の歲月が長くかゝ

つたのである。又想ふに財力から云うても、實生活の爲めに急いで、藝術などの方へ向けるべき餘裕が無かつたであらう、之に反して英國の例で云へばベッス女王の治世の前半は蘇格蘭事件があつて、國內の統一も充分ではなく、外は西佛聯合の敵を控へて居て、英國の地位は未だ強固とは云へなかつた。然るに大海戰の前年のメリーの死刑と共に國內の憂もほゞ絶え、翌年の大戦勝で少くとも海上の覇權を取つたから、英國の地位は強固に且つ急に高くなつたので、衣食足りて禮節を知り、生活餘裕ありて娛樂を求め、こゝに文藝の大發展を見たのである。加之英國の此場合では、元來其前から文藝復興期の一代の潮流に掉さして、文學的素地のあつた上に、希臘は當年歐洲唯一の文明の源地で、僅かに「東方より光明」を、而かもかすかな光明を仰いだに過ぎぬが、英では自國の外歐洲大陸の思潮なり、文藝なりの感

化を絶えず齎らすことが出来たので、國力の發達と同時に文藝復興の氣運は既に充分備はつて居たから、其最盛期が早く來つたのである。此等の例で觀察しても、分る通り、國家の發展や文運の隆盛は、急なる變動によつて生ずる者でなく、次第々々に進みつゝある潛勢が何か異常の變動を機として、之に助けられて現はれて來るのである。すなはち戰勝が文學の隆盛と云ふとの原因ではなうて、陪因である緣である。そして其戰勝其者も、亦この潛勢力の顯現に外ならぬのである。さて今までは大勢の上から、抽象的に將來の文運に就て考察したが、此から一步進めて、具體的に戰後の文壇の趨勢を卜して見やう。先づ國民の自覺の影響に就て考ふるに、少くとも二様の結果を生ずるであらう。一つは從來の摸倣的自屈尊他の傾向の反動として、悪く云へば、野郎自大的の思想も文學界の一部には起ると思ふ。否現に戰爭

中などでも此傾向はなきにしもあらずであつた。すなはち、やれ、エクスピア沙翁のやれ、ゲーテのと稱へるが、その實それ程のものでもない、讀んで見れば、と云つて非凡な見識も、人世の秘奥の闡明もあつたものではない。沙翁何するものぞ、ゲーテ何するものぞ、と云ふ様な思想である。嘗て十數年前にもかゝる傾向はあつたが、大勢は之を抑遏した。然るに次第／＼に醒覺して來た國民的自覺は、空前の戰勝を機として急に頭をもたげて、國民の能力の自信となり、自信が過ぐれば自大思想となり、戰爭で證明された能力は、文學の方面でも同様であるべきである。外國の文學だとして、なに左程の事はあるものかと云ふ様な、謂ゆるフォルクソロキック通俗論理が勢力を得ることがあらう。これに沙翁やゲーテの如き大文學者の作物を會得するの苦勞と煩はとに倦厭した捨ばち氣味な思想が合して、一時は文學上の自尊主義が起りはすまいか。戰爭と

云ふ大變動の爲めに、漸次に秩序的理性的になつた思想上の傾向も、多少覺亂されて情感的になるのは普通のとて、謂ゆる群衆心理の勢力が大なるべきは當然であるから、必ず一時的に一小部分のとして、此様な傾向が現はれるだらうと思ふ。また良い方からは、國民的自覺の結果は、内外の文學に對する、正當な評價、正當な理會が出来るやうになる。従來は外國の文學の輸入に急であつて、模倣と尊崇との持ちきりとも云ふべき有様であつた。それ故充分に咀嚼する遑もなく、彼方の批評家が、自家の國民的特質の上に立つて下した批評を、その當否の吟味などはしない、直ちに承服して仕舞ふ傾向が多かつた。即ち盲目的の模倣、因襲的繼承であつた。之が爲に一方自國の文學に對しても、彼の標準をそのまゝに移して觀るから、實價以下に貶評する傾があつたのである。勿論之とは正反對な保守的、攘夷的傾向も一

部には潜在して居たに違ひないが、大勢から見れば外國文學の研究者と輕薄な模倣者流との間には斯様なかぶれ氣味が多い様であつた。然るに國民自覺の發達と共に、近來に至ては、漸くそのかぶれ氣味が薄くなつて來た處へ、今度の大事件で明かに覺醒した國民的自覺は、外に對しては實價以上の尊崇を減じ、内に向ては眞價の認識を爲し得るに至るであらう。随つて、日本の文學必ずしも歐米のに劣らんと云ふ自信が出來て、比較したい競争して見たいの念が起る。弦齋氏などが、自分の著作を英譯して外國人の批評を求めたことは、此氣運を事實の上に見せたものではあるまいか。又他方には外國人の側でも、從來餘り見くびつてた日本の眞價が、意外に大きいのを見て、その文學なども窺ひたいと云ふ念慮も起らう。蘆花鏡花諸氏の作が英譯されたのは、此傾向の發現であるらしい。此外人側の歡迎と、自國內

の今述べた傾向と内外相應じて、今後は日本文學の外譯と云ふことは、盛になるだらうと思はれる。國民的特色ある文學。そこで外國文學に對する批評も眞價を穿つに至り、日本の文學に對しての評價も正鵠を得るやうになつて、正當な理會が出来るやうになれば、彼我の文學の特色も明かになる。随つて文學と云ふ者は他の科學などゝ違つて、世界的の處はもとよりあるが、同時に國民的特色に彩られて居ると云ふことが判明つてくる。趣味でも、氣風でも、思想も、感情も、自づから國民によりて特色を異にして居て、結構や技巧の上にも勢ひ影響を及ぼして居る。批評の見地も此に因つて異なり、讀者の受けも、能く之に觸れてるか否かによつて違ふと云ふことが明かになる。例の新たに明瞭となつた國民的自覺は、之を助けて、國民的特色を帯びた文學、即ち眞の國民文學が現は

るゝに至るであらう。

國民的特色即ち趣味性だの、氣風だの、思想感情だのに現はるゝ特色とても、勿論決して不變のものではない。時代に從て移り、四圍の境遇に依つて變る、國民的意識とゝもに變化するのである。併乍らその根底に於ては容易に變らぬもので、變るのはその色彩である形式である。例へば當時外人に喋々される武士道のやうなもので、帶刀廢止とゝもに、姑らく世上の上つつらな口のはから隠居して居た。代つて紳士道とか云ふ洋服姿が、世を襲いで、ばた嗅い氣焰を吐いて、コルセツトで息が苦しそな束髮連に、やんやを云はせたこと多年であつたが、民族數百年の特色に、しつくりはまりにくいので、兎角下駄ばきの觀が有た。然るに這回の戦争以來、外人間に武士道の呼聲が旅順の陥落と共に擧つたので、急に本家本本の看板を土藏から出して、長持の

中の寶刀は研屋の手助けで床側に威儀を作つて居ならぶ世となつた。かう氣が就て見れば、形こそ變れ、國民的精神の精華たる武士道は滅びなかつたのである。併乍ら時勢とゝもに國民的特色も、根本の精神は變らずとも形は變る。また變へる必要もあらう。文學に現はるゝ上で云へば、國民的特色は認めなければならんが、その描寫の法などは變へねばなるまい。語を換へて云はゞ、國民文學たる所は充分に具へて、さてその態面は變はりもし、變へもすべきである。さうなくては

大發展は難かしからう。

然らばどう云ふ風に變はるかど云ふに、此點では外國文學の影響があらうと思ふ。此點から云へば將來も益々外國文學の研究は盛になるに違ひない。但し從來のやうな丸呑みで、胃弱、腸カタル、その爲め本人は蒼白い顔をして、元氣のない様ではいかないので、能く消化して營

養分としなくてはならぬ、すなはち外國文學を國民的特質に同化させて、發育を謀り、而かも能く國民の特色を保たねばいかぬのである。恰も同一民族又は社會中の各個の人々が、同一の文化を承け、思想感情も次第に同化して行くが、さてその中におのづから個性を保つて特色のあるやうに、國民的特色を有して行かねばならぬ。又實際そうなつて來るだらうと思はれる。さて大體は斯うなつて來ると思ふが、戦争の影響はそうく、良い方ばかりではないので、一方には戦争の趣味上に及ばず影響。などは、多少良くない所がある。前にも度々云ひ及んだ通り、かう云ふ大變動は、次第に統一され理性的になりかゝつた思想感情を攪亂する。事件が事件だけに、かゝる影響は全國民に多少及んで居る。例へば人氣が暴くなる、勇ましい代りには亂暴な事が迎へらるゝ。穩雅な思想や、柔和な情は暴されて、勢粗野にな

る。従つて趣味も下落の氣味があらうと云ふものだ。特に敵前に弛驅して、目的は善美ながら殺戮や詐謀に馴れた軍人にあつて、特に然りである。敵前にあつてこそ、紀律もあり、氣もはつて居るし、君國の爲と云ふ様な念が盛であるため、さ程に現はれぬ。又修養ある上官などは、理性の力や修徳の工夫もあらうから、故國に歸つた後でも思想感情の平調を保つことも出來やう。しかし、修養の少いものでは、平和は克復する、一時の賜金は得る、さらでも金を持つて居る、のみならず郷黨の者の慰勞歓迎が盛んで、自然酒色にも親しみ易いとなると、人の自然の性として、久しい間抑へてをつた、渴きゝつた情慾は一時に迸發する。かうなれば思想は兎に角、情は一時非常に淫さむ患は確かにある。此が軍人ならぬものにも感染して、暫くは一般に感情は暴らされて、趣味の下落は免かれ難いと思ふ。此事實は手近に日清役、北清役の



後の當時に見ても争はれぬ所である。現に戦地でも卑い趣味の甚しきは如何はしい書物や、繪畫が迎へられると云ふ事實を見ても判る随つてかゝる要求に應ずる野卑な趣味の三文文學が一時歓迎され流行するかも知れぬ。併乍らそれは一時の現象で又その範圍も恐く廣くはあるまいから、文學發達の上に左程の障害にもなるまいと思ふ。斯様な惡結果もあると共に、他方には戦争の爲に、  
 人・世・に・對・す・る・眞・面・目・な・觀・念  
 は確かにふかくなるに相違ない。連戦連勝で、國勢は強固になり、國威は揚がり、たとひ媾和談判の結果は希望通りにならなくつて、戦勝國に不似合な程退讓を極めて、國家の借金に嵩み、負擔は重くなつたにしても、韓國を保護國として遼東と樺太南半を回復したから、大體からは人世を樂觀させ、榮花に酔はしむる様であるが、さて戦争の裏面を見れば、人世の悲惨な事實もて充さ

れて居る。第一戦争そのものが悲惨の極である。近世の武器の猛烈な破壊力は、一彈の下に貴重なる幾百の人命を奪つて、忽ち屍山血河の慘を演出する。たとひ君國の爲めとは云へ、多數戦死者の遺族中には目もあてられぬ悲境に陥るものもある。うら若い寡婦が夫の位牌を抱て銷魂するのもあらう。白髮の老夫、愛兒の墓畔に血涙を絞るも幾ばくだらう。此の如き事實を見聞する者は、誰か人世に對する眞面目の觀念を抱かぬであらうか。此人世に對する深刻な感想、眞面目の觀念は文學隆盛の爲には極めて必要な要素である。また戦争そのものは文學上の好資料を供することが少くない。實に事實は想像よりも奇なることあり、今回の戦争中の出來事に就て見ても、悽絶なること、崇高な事件、悲哀の趣、風流の餘韻等の意想の外に出づる出來事も極めて多い。それ自身好個の詩たる活事實すら少くない。是等はやが



る新負債は負うたにしる、平和克復の後、却て以前よりは此種の娛樂に費さるゝ所が、多くならぬとしても減トはすまいと思ふ。勿論これは統計を調べた上でも何でもなく、豫想ではあるが、現に戦争中でありながら、元祿風の流行と云ふ様な奢侈な流行さへあつた位で、演劇などの看客でも就中學生又は讀書力あるものゝ多數を占むる本郷座などは、戦争前と變らぬのみか、却て増加の傾向がある所から見ても、文學購買者たる底の人々には、左程の財力上の打撃が加はつては居ぬ様である。加之實際は知らず日英同盟の擴張の爲めに、少くとも向後幾年かの東洋の平和は保證されたとの信念は、一般國民にある様である。又戦勝の餘果として、外資輸入は既に好氣配を見せて居るから、生産的事業の上の資本は意外に裕になるかも知れぬ。かたゞ實業は發達する。その結果商況は活潑となつて、一時の收縮の反動が

來るでもあらう。されば、購買力の點では文運の隆盛は助けるとも妨ぐる事はなからう。

むしろ文學隆盛の爲めに憂ふべきは、國運進展の結果、新事業は起り新人物の需要は増し、需要のある所供給之に伴ふ様になつて、新進の學識あるもの等が、相援いて實業その外の實生活方面に活動するを好むやうになつて、人物を他の方面に吸収されてしまふことが、上田博士のお説の様になりはすまいかと云ふ事である。併乍ら余とても文學的天才が他の方にかけても天才であると云ふ様な、天才の融通自在を信するのではない、けれども文學的天才となるべき素質を持つた人でも、初めより自己の天才を信じたり、自認したりするものではない。それはその道の天才は幼時から多少鋒銳もその方に現はれやうが、文學の天才必ずしも初めから文學狂で、石にかちり付いても

と云ふ程の熱心があるとは限らぬ。また天才は生れながらその天稟を發揮し得る者でない。天才と雖もその道の修養を俟て甫めて物になる。然るに一世の氣運が實生活を追ふに急であるときには、未だその自己の天才が適する道の修養をしない前に、また此道に於て機會がなく、一世の風潮に引かれて、不適當な方面に向ひ、遂に天才の發揮を見ずして終ることはあらうと思はれる。が然かし、凡ての文學的天才の素質あるものが、皆他の方面に向ふとはさまらぬから、此點に就ても余は悲觀説は持たぬのである。

さて今一つ残つた所は、國民の文學的素養が、時代の風雲に御して向後の大發展に適するまでに至つて居るかどうかの問題だが、あまり長くなつたからざーつと

●**總結** を付けるとしやう。我が日本だとしても古來文學が立派にあつ

た。なる程王朝や鎌倉時代の文學は、左程立派なものもなかつたかは知らぬが、例の拜外宗の人々が云ふ程みすばらしいものではないと思ふ。特に平語の如きは散文叙事詩として、随分價值があると思ふ。戰國時代はもとより皆無に近かつたが、徳川時代に至つては、純日本的小説が現はれてきて、作中の人物の思想感情なども自ら國民的特色を帯びて居た。余は決して草林子を沙翁以上としたり、馬琴をスコット以上に評價するのではないが、また決して普通の外國小説や劇曲に較べて遜色の多いものとは思はぬ。明治に入つてから文學は益々盛運に向ひ、作家も頗る多く輩出した。就中紅葉氏や露伴氏などの作は結構と云ひ描寫の技巧と云ひ、何處へ出しても随分と良い地位を占め得ると思ふ。唯思想の深刻と云ふ點や、結構の偉大と云ふ點で、歐米の大作家に譲る所があるかも知れぬ。此等の點は外國文學の咀嚼、

正當なる評價、及びその同化によつて、補助し培養されて行かれると思ふ。否、現に漸次に此傾向が認められて來た。さすれば新進の國運を負うて、大發達に向ふ素地は既に出來て居ると云うても宜い。又文學思想の根本要素として必要な哲學も、既に咀嚼されつゝあるから往く行く大發展大盛運を來すであらうと確信する。但し戰勝の國勢があつたとて、二年や三年にしてさう云ふ隆盛期が來るとは思はない。此間の時期に就ては希臘の例でも判る通り、特に普佛戰爭の勝者たる獨乙文學の例に鑑みても、國情により且つ社會的事實の發展により相異があるから、豫言者の眼光なき私には、斷言どころか、豫想もつかぬ。唯思ふに當座は或は自大思想も起らうし、一時的ながら趣味の下落もあらう。けれども戰爭によりて多少攪亂された思想感情が再び平調に歸し、國民の文學趣味は新なる形に於て統一された曉には、

一方には正當なる標準、即ち國民的自覺の上に立つた第二の外國文學の輸入咀嚼の時機が來て、世界の名高い文學的著作は翻譯され、之によりて、國民の趣味は愈々高くなり、作家の技倆もその助をかりて上進し、他方には徐々ながら、邦文學も外國へ紹介され、若くは外人によりて研究されて、その異りたる標準から批評を受けて、長短共に明瞭となり、相俟ち相助けて、將來而かもあまりに遠くはあらぬ將來に於て、大發展を爲す希望はあると信する。そして其發達すべき文學の種類は(硬文學は姑く措き)主として小説と劇曲とではあるまいかと思ふ。



附  
錄

筆  
の  
す  
ゑ  
び

歌舞の曲

妙樂子齡弱冠にして夙に道に志し、家を棄て、山に入り、始め明論師に從うて學びき。雪の朝、螢の夕、ひたすら思を觀念の窓に潛め、歸雁來燕等閑に付せしこと三年。心理否を辯じ口、眞偽を裁し、通せざる所なし。乃ち山を下りて天下に週遊せしこと歲餘。智者克く争ふものなく、説者服せざるものなかりき。而して心なほ間然たる所ありしなり。妙樂子再び山に入りて求道子に師事しぬ。この時甫めて老真人の一顧を得たり。心是非を思ひ、口利害をわきまへ、復た理義の煩に苦しまず。落花、殘紅、無心に迎へ去りしこと五年。業を積むこと漸く高く、徳を立つること既に深うして、舉動悉く規矩に合ひぬ。乃ち復た山を出で、天下に週遊せしこと數年。行は一世に師たり、徳は天下に範たりき。

而して心なほ安如たることを得ざりしなり。  
 妙樂子三たび山に入りて更に道を究めんとしき。この時甫めて老真人の破顔微笑を得たり。妙樂真人に教を乞ひぬ。真人の曰く、汝の智、汝の徳、既に足れり。我れ之に加ふるなけん。然れども汝未だ中に安せざる所あり。故に智足りて、しかも上智に到らず。徳備りて、而かも上徳に達せず。説かずして服せしめ、努めずして懐かしむる、此を上智上徳と爲す。汝若し上智上徳に臻らんと希は、當に藝に遊ぶ可きのみと。趣ち隨ふる所の歌舞、絲竹二童子をして妙樂に教へしめき。  
 妙樂子二童を友とし遊びしこと七年。旦暮妙舞を見、妙音を聞き、心復た道德を思はず。口また理義を云はずして、徳おのづから高く、理いよく精なりき。春花秋月等閑に迎へず、朝暾暮雲白眼に見ず。置酒高會の興を樂んで淫せず。愛別離苦の情を悲んで傷らず。故らに身の察々

を願はずして、しかも物の汝々を受けず。敢て物に拘々せずして、しかも性品ますます高かりき。居ること數年の間、遂に自ら歌はず、自から彈ずることなうして、技既に神に入りぬ。是に於てか、心常に舒び、氣長へに爽かに、時に天地の正に乗じ、六氣の辨に御して四海の外に遊び、碧落の上、黃泉の下、到らざる所なく、東隅の端、桑榆の際、極めざる所あらざりき。老真人二童に諗げて曰く、已めよ。彼れ既に藝の神を得たり。汝が儕將に彼に従うて學ぶべし。我今去らんと。真人去りぬ。二童妙樂子に従うて山を出でぬ。  
 道既に通じき。理は既に精なりき。徳は既に備りき。藝は既に神に入りき。智を求むるもの、争はずして服しぬ。心を修むるもの、招かすして懐きぬ。情を樂しむるもの、技を知らずして嘆じぬ。天下靡然として妙樂に従ひ、一世の渴仰尊崇、明論師に越え、求道子に越え、真人に伯仲せりき。



妙樂子嘗て二童を携へて崑崙の西に遊びぬ。國を黒甜と呼び、王を獐猛と稱す。獐猛、人面にして虎身、性残忍暴戾にして、貪婪飽くことを知らず。精力人に絶し、兵を用ゐること神の如く、人の國を滅し、その民を虐し、衆弱を壓倒して快となし、自ら超人と號す。妙樂子の此國に遊びしとき、王會ま東郊に宴せりき。明眸皓齒羅にたへざるもの數人を拉し來りて歌舞せしめんとす。少女王の暴戾を知り、過てその怒にふれむことを恐れ、顔色土の如く、手足戰慄して、音は聲律に合せず、舞は曲節を失ひ、目見るにたへず、耳聞くに忍びず。妙樂二童を顧みて笑ふ。王怒つて侍臣をして三子を捕へ來らしめて、之を詰る。妙樂答へず。少女に告げて曰く、汝等何ぞ王を恐るゝの甚しきや。王の強はこれ北方の強のみ、馮河の勇のみ、眞の強にあらざるなり。汝等の弱は弱に有ざるなり。眞の強なり。我は眞強の佐、弱者の友、我れこゝにあり。汝等何ぞ王

の強を恐れんやと。王益々怒る。妙樂二童に目して長歌せしむ。聲は鶯語の如く、響は玉に似たり。行雲爲に遏まり、落花蝶舞して舊梢に返り、春風更に暖にして、和光頓に濃なり。王顔色を解く。妙樂乃ち王に謂て曰く、王その強を如何。然れどもこれ藝の至のみ。未だその神に至らざるなり。王の執拗、頑強、恐くは我に聽かト。我亦多言を好まず。來れ矣。我れ將に王と衆とをして、眞の強を知らしめんと。妙樂立て西風を麾き、白雲を呼び下して衆と共に乗り、風を驅り、氣を御して、碧霄に攀づること三千里。山河を離れ、人寰を絶し、縹緲たる空間、茫々として際涯を知らず。更に東に奔ること九萬里、絶東海中の仙山に臻りて止まる。仙山名を瀛州と云ふ。五雲空を護りて、遠く俗塵を離れ、青嵐峰におさまりて、櫻雲野に満ち、金闕、玉樓花間に參差たり。宛として詩中の景なり。二童まづ琴を取て鼓す。玉局忽ち開いて、綽約たる仙女三四人、徐ろに

蓮歩を移して來る。雲鬢花顏、膚は雪の如く、眸は星に似たり。二童かつ鼓しかつ歌へば、仙子隨うて舞ふ。春風仙袖を吹て軽く翻り、舞態嬌々として蝶の遊ぶに似たり。妙音花木に振ひ、靈香空に充ち、五彩九天より下る。一曲舞ひやんで羞を含み情を湛えて王を凝睇す。妙樂子問うて曰く、王の勇武、今はた何の用ぞと。王答ふるに能はず。天を仰いで大息す。妙樂子乃ち琴を取り、微絃を控いて蕤賓を召す。炎威俄かに揚り熱風面を打ち、飛禽なほ且つ喘へぐ。更に商絃を控いて南呂を召す。金風忽ち至り白露地に布き、峰頭鹿鳴悲し。更に羽絃を叩いて黃鐘を召す。霜雪忽ち下り、木葉悉く落ち、空山野猿啼く。更に絃角を叩き夾鐘を激ふ。春風再び歸り、花木復た咲き、鶯語綿蠻たり。終らんとして、更に四絃を綜べて一時に拂ふ。景風翔り、慶雲浮かび、甘露降り、醴泉涌く。草木梢を垂れ、飛禽喜び歌ひ、走獸爪牙を收めて臥しぬ。王感泣して妙樂子

に謝して曰く、我れ今にして始めて我が勇の頼むに足らざるを解し得たり。乞ふ是より子に従て學ばむと。妙樂子および二童遂に瀛州に止りて還らざりき。妙樂逝いてよりこゝに五千歳。東海姫氏の國、今に至てなほその流を汲むもの多し。故に藝に巧なり。遺韻長へに残る絲竹の音、仙姿留めてあり歌舞の曲。此の如く我れ聞きぬ、我れたゞ此の如くきゝぬ。その眞偽を知らざるなり。然れども、箇中豈に聴くべきもの無からむかは。

譯文二節

ニーチエは近歐散文の巨匠なり。あらず、彼の文は形散文にして調は實は律語なり。簡潔雄渾の文字、流麗典雅の筆致、音樂の精靈、いか生れ出たるかを疑はしむ。誰かよく摸倣せむや。ツァラツス

ツラは特に精金の文字、之を他國の語に翻して以てその妙を傳へんとせば、同族の國語を以てすと雖、到底不可能の事に屬するが如し。況んや邦語に於てをや。頃者興に乗じて試にその卷頭の二節を譯す。豈に敢てそのおもかげを傳へ得たりと云はんや。閑人酔後の餘興、同好の一笑に値せば足れり。

### 山山の條

ツラツラスツラ齡三十にして、その家と家郷の湖とを棄て、山に入りぬ。こゝに彼れその精神とその寂寞とを樂みて、十年の間厭くことを知らざりき。されど終に彼の心機は轉じたり。一朝彼は東天の紅ともに起さぬ。大陽に面して立ちぬ。これに對うて語りぬ。曰く——  
汝大なる星よ！もし汝が光明に照さるべきものなかりせば、汝が

幸福はいづれにありや。

十年の間汝はこゝに我が洞穴を訪れぬ。若し我ど我が鷺と我が蛇とのあらざりせば、恐くは汝亦なが光明となが天上の坦道とに、厭きたりけむ。

されど我等は爰に朝ごとに汝を待ちき。汝が汪洋せる光明に浴せりき。爲めに汝が祝福を祈れりき。

看よ！靈智の水、今我が方寸の胸に溢れんとす。彼の蜜蜂に似たり。蜜を集むること多きに過ぎぬ。我は人間がこの靈水を掬せんことを欲す。

我は人間を惠まんを要す。彼に靈智の水を與へ盡さんと欲す。かくて彼等の賢なるものをして、再びその愚を樂ましめ、貧者をして再びその富を喜ばしめずんば已まざらなむ。

かるが故に我は深谷に下らざるべからず。夕さりごとくに汝は海の  
彼方に沈めども、かくてなほ下界を輝すにあらずや。我れ亦汝の如  
し。汝赫耀たる星よ！  
人は汝を呼んで没すと云ふ。我れまた汝の如く、没して人園に趣か  
んことを要す。

汝冷靜なる星よ！汝が眼は公平なり、過度の幸福に對してだに些  
の妬心なし。我が爲に祝福せよ！

玉盤既に靈智の水を湛ふるにたへず。水は溢れて到る處に金光を  
たゞよはし、以て汝が悅樂の光明を反映せんとす。希くばこの玉盤  
の爲に祝福せよ。

看よ！玉盤再び空しからんとし、ツァラツスツラは再び人間に歸  
らんと欲するを。

かくてツァラツスツラの下山は始まりぬ。

### 聖者の條

ツァラツスツラ山を出で、獨り下りぬ。山中一人の彼に逢ふものあ  
らざりき。されどその進で森林の中に入るや、忽ち鶴髪の老人ありて  
彼の面前に立ちぬ。老人彼に語りて云ふ――

我がこの放浪者を見るは今を始めにあらざりき。幾年の昔彼れ爰  
をよぎりて去りぬ。彼れ名をツァラツスツラと呼べり。さばれ、今彼  
れまた昔日のツァラツスツラにあらざるなり。

昨は汝、なが死灰の心を山上に運べりき。今は汝、なが滿腔の熱火を  
谿谷中に齎さんと欲するか。汝その放火の罪を恐れずや、煽動の罰  
をおもはずや。

然なり、我れツァラツストラを知れり。彼の眼は鮮かに、彼の頬邊些の憂色なし。その行くや、輕歩楚々、恰かも舞人の態に似たらずや。されど彼は變りたり。彼は小兒となりき。ツァラツストラは覺者となりき。知らず汝、ツァラツストラ、眠れる者に對して、今何をかせんとはする。

汝が寂寞の中に住せしは、譬ふればなほ海中に住せしが如し。海は安らかに汝を擔ひぬ。さるをわゝ汝、今陸に上らんと欲するか。嗟汝、今自らその形骸を擔はんとするか。

ツァラツストラの曰く、――

我は人間を愛す。

聖者は云ひぬ。――

試におもへ、我れ何が故に森林に入り、荒漠に來りしかを。これ我が

人間を愛すること、甚だ厚かりしが故にあらずや。

今は我れ、神を愛するを知て、又人間の愛すべきを見ず。我が見る所を以てせば、人は餘りに不完なり。恐らくは人間の愛が我を殺さんことを。

ツァラツストラは答へぬ。――

何をか我が謂ふ所の愛とはする。我はたゞ人間に恵む所あらんとするのみ。

聖者また云ひぬ。――

徒らに恵むを已めよ。寧ろ人間に奪ふ所あれ。かくてそを彼等と共に擔ひ去れ。汝若し人間の爲に謀らんと欲せば、これ最上の法なり。強ひて與へんとせば、たゞ施物あるのみ。しかも彼等をして乞ふ所あらしむべからず。

ツァラツスツラ更に答ふらく。

否らず。我は施物を欲せず。我に靈智あり、何ぞ恵むに究せんや。

聖者、ツァラツスツラの言を聞いて笑て曰く、

想ひ看よ、彼等よく汝が珍寶を享くる否やを。彼等の隠者に對するや只猜忌あるのみ。焉んぞ我等の恵まむが爲に到れるを信せんや。俗塵の巷に在ては、仙骨の跽音あまりに微なるに過ぐ。若しそれ大陽未だ出でず、夜色なほ深きとき、人の彼等が寢床に近づくを聞かば、恐くは彼等は盜のいづくに往かんと欲するかを怪まむとすらん。

已めよ、宜しく森林に止まるべし。人間に趣かんよりは、若かず、寧ろ獸族に到らんには、汝何ぞ我に倣うて熊中の熊、鳥中の鳥たるに安せん事を欲せざる。

ツァラツスツラ乃ち問うて曰く、

聖者森林に在て何をかなせる。

聖者答へて曰く、

我の林中にあるや、おもひを詩歌に寄せ、詩成れば乃ち謠ふ。時に或は嘻笑し、時に或は感泣し、時に或は吟詠す。如是して我は神の謳歌につとむ。

漫歌と感泣と嘻笑と吟詠と、此を以て我は我が神を神とし頌歌す。然るに汝何を以て能く我等を恵まんとするか。

ツァラツスツラ此語を聽て、一揖して聖者に諗げて曰く、

我よく何をか卿に與へむとはせし。唯願くは速に相別れて、以て卿を損ふ所なからしめよ。

かくて彼第は相辭しぬ。聖者は東、人は西、互に笑をかはしつゝ、恰かも

兒童の夫れに似て。  
ツァラツスツラ復た獨り往きぬ。此とき彼れ自語して曰く、あゝ世又此の如きものあるか。彼の鶴髪の聖者、森林の中に彷徨して、未だ聞く所あらざりき。神は既に死したりと。

配所の月

うき秋とは誰が云ひし。紅葉の色、月の光、さては浦の苦屋の其色としもなき閑寂のをかしみに至る迄、自然の美は秋にこそと、過にし年々はたゞ楽しくこそ遊びくらしか。去歳の秋は、其紅葉の色づく頃より、心地例ならで、その月影も面白からず、虫の音も何とはなしに身にしむやうにてとかくに家にも引こもり居つ。年をろわづらひしことなければ、初は些のさはりぞと、心にもかけざりしが、日々におもわ

のやつるゝはと、親しき友の怪しみとふに、さらばとてさる名高き國手の診察を受くれば、おもひきや、一命にもかゝはるべき重き病なるべしとは。今さらに驚かれて、その勸のまゝに、行李匆々逗子の浦わに覇旅の客となりしは、木々のくちば搖落の音に散りて、滿地の白露に宿る月影のやゝ寒き頃なりけり。

一に金澤、二に逗子、葉山と、名勝の名をこそ聞きたれ。未だその地に遊びしことなければ、日頃都にありて書讀むに倦みし折々は、一たびは往いてその山水風月の美を檀にせばやと願ひし望みの叶ひてか、今は此地に朝夕起き臥しする身とはなりつれど、病苦になやめば心地すぐれざるが上に、海岸のをろあるささへ、誠あればまゝならず。ひとり客舎の一室にこもりて、褥の上に横はりつゝ、爲すこともなきまゝに、窓押し開けて、朝夕浦の景色をのみ眺めくらしつ。朝には雪を浴

びたる富士の高嶺、旭に映りて遠く碧落の上に聳ゆるその雪つきて、山腹蒼烟につつまるゝあたりより、箱根、足柄、豆相の峰巒相接して蜿蜒起伏し、遙かに彷彿の間につく。恰も黒龍の白雲を辭して海に入るに似たり。近く海中に浮べる江の島山は、翠黛の色濃かにして、冬を知らず貌なれど、その懸崖の下は海波岩角に碎けて、消えざる雲の散るかど見ゆるもをかし。深く彎り入りたるこの浦邊は、浪風常に穩にして閑鷗波上の夢とこしへに圓かに、小船こゝ海士が子の歌もいとのかに聞ゆるは心からにや。もし夫れ、夕陽波に洗はれて沈み果つる頃は、西の空もゆる許りの紅に輝くよと見る間に、浮雲何處よりか迷ひ出で、名残りの日かげも漸くうすれ行けば、沖のしほ風や、立ちぬと見へて、歸りを急ぐつり船の白帆波間に隠見し、水禽いつしか飛び去つて跡なく、時にかへる晚鴉のかげも彼方の森にひそみて、水陸一

帯に暮烟の中に消ゆ去れども、富士が嶺はなほかすかに雲表に見えて、さながら淡墨の繪かと思はる。名に歌はるゝ鎌倉山の方に三、四、二、見え初むる星の光、カルデアの古ながらの色に輝きて大磯あたりの漁火に對するなど、何時見わくべしども覺えず。たゞ此景物に心うばゝれて、物おもふこともなかりしが、それも初のうちこそあれ、十日廿日となれては遂に珍らしからず。まして、空うちくもりて、遠山の姿はさらなり、金龜山も雨にかすみて定かに見えず、雨脚斜に窓の戸うつ時などは、障子引きしめて、獨り病骨をかこつの外なければ、平生の我には似で、徒らにすぎこし方のうかりし悲しかりしこといものみおもひ出でられて、慰むに由なし。まざるゝこともやと書とりいで、見れど、こちたきはものうく、然らぬも常よりはおもしろからず。忽ちまたはかなき思ひに迷ふ。かゝる折にはしきは語るべき友なりけり



と思へど、始めての地なれば訪づる人もなし。もしやと宿帳かりて見れば、知れる人の名も多かれど、皆去りし後なるぞ詮なき。夜などは又一きはにて、やどれる客も少き時節なれば、我居る室の近くには人のけはひもせず。恰も二千里外謫居の人の心地す。すぐ世は知らず、此の世にては犯せし罪もなきものをどうらめし。

日數経るにつれて、病もやう／＼おこたりたれば、我は日ごとに海岸にたち出で、里の童べが貝ひろふ群にまじり、或は小舟に棹して、波穩なる海の上をこぎまはりて徒然をまぎれ、又ある時は葉山に遊び、あるときは鎌倉の舊跡を尋ねなどして、いさ／＼か心の慰むにつけても、かゝる折かたりあふべき同伴あらばと、友ほしき心は一しほまさりぬ。

雪や／＼ちりて寒かりし夜のあした、常にもあらであさねしてありし

に、宿の婢のさう／＼しくかけ來りて、見ばやと願ひ給ひし網、今朝はひかれて、えものもいと多きやうなれば、早く行き見て見給はずやと告ぐるに、さらばと褥を蹴りて、顔洗ふ間も急がはしく、朝げさへたべさしたるまゝ、うらの濱邊に立ち出でぬ。さのふにかはる朝げしき、連峰悉く雪をかぶりて、高嶺は全く銀山と化し、朝の風いつよりも身にしみて、一たび息を吐けば俗氣消ぬ。二たび吸へば天地の靈氣身に宿る心地して、宿病忽ち癒へぬるかと思ゆ。右の方の山手に、丹壘日にまばゆき某とやらんの洋人の別墅の前に、今しも網のあがるよと見ゆ。人の群がれるに、急ぎ行けば、早くも網は半ば上りて、潑漑たる鮮魚のかゝれるを、惜げもなく引きしぼりて、れうしらく罵り騒ぎ、女わらべは落たるを拾はんとて、手に手に目籠を持ちて集まれるが、争へるもをかし、魚は後にて拾はるべし。争いて網をな破りそ。早くたぐら

すや、袋の中なるが逃げやせむと、船の上なる漁夫が長の叫ぶに驚きてそなたを見れば、さしも大なる布の袋に溢るゝばかりなる鱈さよりの跳ぬるよと覺えて、音さへ喧しくて、袋のげにも破るべき様なり。常には人のけはひにも、驚くべき水鳥の、數知れぬ迄船のまほりを飛び交ふは、網目もれて逃るゝ魚どらんとてなるべし。そのわたりの海の上に、白泡の浮びて、消えもやらぬを何ぞと問ふに、あれ知らずや、魚の油なるはと、愛敬もなく答ふるを見れば、顔の色潮風にくろみて、着たるぬのこのすそ、はぎもあらはに引あげたる、髪の毛の長からずば男ども見まがふべし。漁夫が妻にもや、我にも問はるゝもうるさげにて、又忽ち魚ひろふに、いそがはしげなり。近頃久しく網引く事もなかりければ、珍らしくてや、同卜宿の客人、老いたる、若き、男女、誰もく此處に集ひ來ぬ。大かたは都の人なると、扮装にて知らる。口ひげいか

めしく、高帽のかぶりさまも鷹揚なる、官吏なるべし。糸織の小袖は、でやかなる縮緬の襯衣の袖もあらはにて、太き金ぐさりこれ見よがしにわざとひねりて、帽はなくて妻揚子くはへたる、相場師にもや。よろづなまめかしくて、着たる衣もしだらなき、かこひものらしき女なども見ゆ。あれかこれかと覓むれども、徒然の談がきとすべき人は更になし。三つの船にあまれる大獵に、漁夫等は喜色満面にあふれつつ、一人二人歸り去るに、我もわが宿の方に足をかへさんとして、と見れば、さきの程には見えざりし二人の婦人あり。一人は、年の頃は二十ばかりにやあらん。顔かたちいとうつくしく、着たるものも立派なれど華美ならず。身のつくり、歩きざま迄いとけだかき、由ある人なるべし。顔のおも少しくやせて、憂ありげに見ゆるは、病になやめるにや。今一人は、母人かどおばへて、六十路にも近からん。さきの人々にくらべて、い

とゆかしくて、つくづくとうち見やれば、彼方にて我を見て何事か語れる様なるに、足を早めて歸りぬ。

きのふにひきかへて、日いと暖かに、都ならば春ばかりの心地すれば、そここゝどそゝろ歩きに暮らして、田越川の流にそひて、細き道たりつゝ歸り來れば道のべの松の木影もるゝ夕月の影いとさやかなり。我が都いでしときは、神無月の居待ちの月、七砲臺邊の波に照りし頃なりしよと思ひて、數ふればこゝに來てしよりはや三句がほどの日子を経たり。年ごろは我れ、明けたらば秋の半もすぎぬべしとて、その中秋の月明には、夜一夜、親しき友と酒くみかはしてあかすが例なりしに、今年身は恙ありしが上には、はしたなき雨に嫉まれて、その月影も見ずて止みしと、今尙ほ口をしければ、まゝよ、友はなくとも、酒あらずとも、せめては今宵の月に嘯かばやと、宿に歸りて食事したゝむ

るやがて、またうらの海邊にいでぬ。一輪の寒月中空に冴へて千里明らか、微風金波を揺して岸にくだくる音靜かなり。日ごどに慣れし此處にて月見むは惜しければ、綱手ひく見し跡を過ぎて、小坪ごえの山に向ひぬ。岩のかけ路のけはしき道を過ぎて、怪しげなる地藏の祠のうしろを、枯枝にすがりつゝ攀ぢ登りて、山の巔に至れば、眼界頓に開けて眺め限りなし。俯して鎌倉の方を望めば、山河依然として舊によれども、七百年前の霸跡、杏として尋ぬるに由なく、只鶴か岡の靈宇かすかに月に輝くを見るのみ。遙かに南の方海波渺茫たる處模糊として浮べるや、伊豆の大島なるらむ。岩かぞに腰うち掛けて、低聲に吟づると數番、恍惚として羽化登仙の思あり。あゝ春の花、秋の紅葉、虹の光、雪の色、自然の美はいと澤なれど、月ばかり人の心に感深きはあらじ。雲にかくるゝ夜はあれ、缺けてよひやみの時はあれ、創世の古の色

とこしなへに變るとなく、おぼろにかすむ春の夜は、憐なる人に暖かき恵を與へ、澄み渡りたる秋の夜は、濁れる心の汚を洗ふ。金殿玉樓の王者の身も軒かたぶけるあばら屋の賤の男も、此清光の前には何の高下かある。入る日の光消ゆし後月東天に照りをむれば、萬樹の枝葉云ひしらぬ光に輝きて、砂石悉く珠玉となる。げに死せるものにも命を賦ふと、詩人が歌ひしも理りや。東西八千里、所は異りとも、古今五千歳時は隔つとも、何人か此月に對して無量の感慨を抱かざる。されば圖南の志八宏を呑む奸雄も、月江上に明らかに、烏鵲南にとぶを見ては、横槊賦詩の風懷あり。氣宇越山を壓する猛將も、霜氣劍の光にさえて、月前過雁の聲をさけば、置酒吟咏の情はあり。大江の上、赤壁の下、一片の孤舟を水の流に任せて、天地の悠久を歌ひ、人生を哀みし高士あり。金樽斗酒、詩百篇の詩人あり。皆之れ月明の夜からずや。或はライダ

ルの山の下、或はレマンの湖の邊り、不朽の音に歌はれしも亦この月ならずや。嵯峨野の秋の月明には、憂にむすばるゝ胸のおもひを琴によせたる佳人あり。潯陽江の蘆ちりて、月影白き波の上、孤舟の嫠婦が一曲の琵琶に寓せし恨あり。我海南の僻村に病を養ひて、さながら謫居の身となりつ。今よひ配所の月を見て、思ひを郷里の父母によせ、情を都の友によす。豈多少の感なからめや。古は居易、潯陽に客となりき。彼に友あり、山歌あり、村笛ありき。又絶妙の音を聞きぬ。我れに友なし。歌曲なし。我を慰むる者、只一片の月あるのみなど、様々に思ひつゝ、るまに、時漸く移り行けば、病後の身に障りやすると氣づかはれて、又の目をたのみにて歸り來つ。裏のさきり戸閉されたれば、表の方にまはらんとて、月を砂上にふみながら、我宿れる旅亭のはなれ座敷の方に來かすれば、珍らしやすが、くきの音聞ゆるに、何人ぞどうかかへば、彼

の晝の程見し人なり。燈の光、わざと小さくして、月に向へる方の障子少しあけて、琴ひける様、心にくし。手の運びいと軽くつま音えもいはずめてたさに、姿かたちまで一きは美しく見ゆ。一曲を奏で終りてうち咲みながら、母人の勸むるにや、復もかふでんとする時、一匹の小犬我を怪しとか思ひけん、二こゑ三こゑ吠え立つれば、見る人ありと知りて、障子はたと閉じて、又弾かんともせず。憎き犬よと、罪なきものをうらみつゝ、我が室にかへりて臥しぬ。

次の日、婢女に彼のはなれなる二人の客はたぞと問へば、ほゝと笑みて、某子爵とて、番町に住み給へる人の姫君と、その母君となり。三四日前に來給へりと云ふ。さりとは供人も無きは如何にと重ねて問へば、そはしり侍らず、何とて深く問ひ給ふぞと詰るもをかし。きのふ見し折、さればこそ誰人ならずけ高き所ありと見えしならめと思ふに

つけても、何事か深きわけあるならんと想はれて、好事の心類なるまゝに、暇多き身なれば手紙認めて、都なるかの君たちの近きに住へる友に、しかくの人知り給ふや、いかなれば、とも人はなくて、姫君と母君とのみかゝる所には來給ふらん。知り給はゞ教へ給へど、問ひやりつ。其の夜、又琴の音もやすると、かの所に到りて、暫し彷徨ひたれど、爪音もせず、戸まで引きたてたれば、中の様も知られず。いと口をし。三日ばかり過ぎての後、宿の主人來て、今日より三日がほど、數多の人の宴會ありて騒しくおぼすべければ、其の間、他の室に移りてよ。事はてゝの後、は必ずこゝにかへしまつらんどいふ。二日三日の程ならば何れにてもよし、事はてなば、必此室に歸るべしと堅く約して、導かるとまゝに行けば、彼の姫君たちの居給へるはなれ家の一間に案内されぬ。かゝる所にては、誰もく無聊にたへかぬるより、自ら知らぬ

人とも交るならひなれば、二たび三たび庭などにて逢ひまひらする中に、彼の母君、久しく此家に居給ふとか、つれづれにやおはさん、我等も同じ思ひなれば、用事もおはさずば、珍らかなる御談承らまほしとの給ふは、宿のはしためより我がと聞き給ひつと覺し、友ほしき折からとて、御言葉のまゝに訪ひまゐらせて、おん物語などしつゝ、姫君を見たてまつれば、たちゐるまひ給ふはさらなり、母君に仕へ給ふ有様いとしとやかに禮ありて、さすがに華胄の姫君なりけり。かれこれの御物語の序に、かゝる處に來給へるはおん病にもやと問へば、否病める身には非ず、些かわけありて、そのみ答へ給ふに、疑はいよゝゝ深くなりぬ。二日をすきて、宿の主人また來りて、さきに居たまひし室に歸り給ふべくやと云ふ。かくと知りせば、主人との約束はせざりしものをもと今さら悔むも詮なし。我から強ひてこゝにと云はんは後めた

ければ、復さきの室にかへり來ぬ。

都の友より手紙つきぬ。我が想像に違はでまことに由あるなりけり。舊は藤門の名族にて、五攝の家につぎて世のおぼえめでたかりし御家からなれど、物變り星移りて、維新の世となりては、時異ればそのかみの榮華あらせ給ふべくもあらず。まして父君の世にいませし頃こそあれ、先きつ年うせ給ひて、今は母ぎみと、當主なる兄君と彼の姫君とのみ居ませど、その兄君も御年未だ若くておはせば、世に用ゐられ給ふきはならず。彼の姫君は、父君御在世の頃より、いとさなき初もどゆひに、同門某家の若君と長き世を契らせ給ふべき御約束、結びこめられておはしき。母ぎみのなで給ひし振わけ髪、の丈のびさせ給ひて年ころにもなり給へば、今歳の秋は彼方にわたらせ給はんとて、御用意もとりくゝなりけるに、その若君、この夏のころ、かりそめの御病重

くなり行き、遂にうせ給ひぬ。かの姫ぎみのおん嘆きはさらなり、両家の人々嘆き悲しみ給へど、弓づるはなれし矢の取りかへさん術もなし。姫君はこれも過世の定めなればとて、長くその若君の御あど弔らひ給はん御心にてまします者を、黄金の光にて今の世にときめきて、都の内に大なる家あまたかまへて、人もなげに世にふるまふ富家の二男、彼の姫君を見初めまつりて、強て請ひうけんとす。財には心の汚れやすきならひ家令どもはじめ、皆のものしかせさせ給へど、勸むれば、兄君も今は傾き給ふ。姫君はいと嘆かせ給ひて、やがては病にもなり給ふべく見ゆれば、母君悲しきとにおぼして、兄君の好ませ給はぬを、強ひて暫がほとて、姫君を伴ひ給ひてこゝに逃れ給ひしなりけり。

あはれ今の世には、才すぐれたる女子こそはあらめ。かばかりの操あ

るは極めて少し。我が知れる地位高き人々の女ごにて、此の姫君に似たるあはれなる人二人三人なきにはあらねど、それすら、一度とつぎての後なり。まだまだ名ばかりの契に、終生の孤閨守らんほどの人は未だしらすと思ふにつけても、かの姫君の御志のほと有がたく覺えて、これより後も屢訪れまゐらせて、事につけつゝ慰めまゐらするに、頼もしとや思ひ給へる様々のと語り給へど、そのことのみは口にはだし給はぬ御心の中こそあはれなれ。あるとき、六代の墓に詣で給うての歸るさなりとて、旅亭の前の橋の上にてあひまゐらせしとき、珠數手にし給ふを見しときは、我はからず涙にくれて一語なかりき。

月華星彩早くも移りて、師走も半ばを過ぎて、月また盈つる頃となりぬ。同ト宿にありし人々も、年の暮なればとて、漸く去りて、或は寒をよ

ぐらん人、或は年の始の煩しき事ども避くる人、代りて來る頃となりぬ。例の姫君だちのもどより、宿の婢女御使にきて、これより葉山の方へそゝろありさせんと思ふ、障るとなくば行かせ給へとありければ、さらばとて伴ひまゐらす。冬なれど日うらゝかにてりわたりて、海南の暖地なれば年の中にも春や立つらむ、不二江の島はいさゝか霞みて見ゆ。浦わの水は例によりて波穩なれど、沖には風吹くと覺えて、江の島の岩窟と見ゆる邊は、激潮岩に怒りて白馬跳り、餘勢右の方稻村が崎に花どちる。われ見給へこゝには波さまで荒しとは見えぬに、彼方には浪風強しとおぼゆ。人の心も亦かくこそ。さまには見ぬすども心の中には荒浪の立つ事もあるべし。久しく疑ひまつるは御身の上のことに侍り。つゝませ給ふを強てとは問ひまひらせぬと、病もなしとの給ふに面わのやつれて見え給ふは、御心の中に騒ぎ給ふ所あるに

やど、それとはなくて問ひまゐらすれば、母君と顔見合せ給ひて、淋しげに笑ひ給ひつゝ、いかならん人の心にも、さばかりのおもひはあるべし。そこに遊べる水鳥の、見かけは易き波まくらも、足にはひまなきが人の思とぞ聞く、どまぎらはし給ふ。談にまぎれて、何時しかもりど、のわたりにきつ。宮のうしろの濱邊危巖亂れたちて、眺いと廣き所に休らひて御物がたりす。もてこし望遠鏡とりいで、見せまゐらす。姫君、かしこ此處見給ひて、母君見をなはせ、過ぎにし日遊びたる鶴が岡のいとよく見え侍りとあるに、母君も見給ひて、げに眼のあたりに見ゆる哉。頼朝邸とか云ひしは右の方の森かげにやとの給ふ。さなりあの森のあなたなるべし。さしも激しかりし鎌倉山の旗手の風も、やがてふきよわりて、二百年の榮華の名残り今はたゞ鶴か岡の宮にのこるのみに侍べり。頼朝の邸は更なり、北條九代の夢の跡も、僅かに一



ぐらん人、或は年の始の煩しき事ども避くる人、代りて来る頃となりぬ。例の姫君だちのもどより、宿の婢女御使にきて、これより葉山の方へそゝろありさせんと思ふ、障るとなくば行かせ給へとありければ、さらばとて伴ひまゐらす。冬なれど日うらゝかにてりわたりて、海南の暖地なれば年の中にも春や立つらむ、不二江の島はいさゝか霞みて見ゆ。浦わの水は例によりて波穏なれど、沖には風吹くと覺えて、江の島の岩窟と見ゆる邊は、激潮岩に怒りて白馬跳り、餘勢右の方稻村が崎に花どちる。われ見給へこゝには波さまで荒しとは見えぬに、彼方には浪風強しとおぼゆ。人の心も亦かくこそ。さまには見ぬすども心の中には荒浪の立つ事もあるべし。久しく疑ひまつるは御身の上のことに侍り。つゝませ給ふを強てとは問ひまひらせねど、病もなしとの給ふに面わのやつれて見え給ふは、御心の中に騒ぎ給ふ所あるに

やど、それとはなくて問ひまゐらすれば、母君と顔見合せ給ひて、淋しげに笑ひ給ひつゝ、いかならん人の心にも、さばかりのおもひはあるべし。そこに遊べる水鳥の、見かけは易き波まくらも、足にはひまなきが人の思とぞ聞く、どまぎらはし給ふ。談にまぎれて、何時しかもりど、のわたりにきつ。宮のうしろの濱邊危巖亂れたちて、眺いと廣き所に休らひて御物がたりす。もてこし望遠鏡とりいで、見せまゐらす。姫君、かしこ此處見給ひて、母君見をなはせ、過ぎにし日遊びたる鶴が岡のいとよく見え侍りどあるに、母君も見給ひて、げに眼のあたりに見ゆる哉。頼朝郎とか云ひしは右の方の森かげにやとの給ふ。さなりあの森のあなたなるべし。さしも激しかりし鎌倉山の旗手の風も、やがてふきよわりて、二百年の榮華の名残り今はたゞ鶴か岡の宮にのこるのみに侍べり。頼朝の郎は更なり、北條九代の夢の跡も、僅かに一

宇の廢寺にそれと知らるゝまでなり。頼むべからぬは榮華にて、ゆかしきは名にぞ侍る。賤しき白拍子の身ながら、判官の情を慕ひて、鶴が岡の舞殿に源右府を鬪弄せし嬌骨の名は、なほ朽ちず傳はり侍り。義經のそれと知りせば、如何に喜びたらしと、心ありげに答へて、そと姫君のおん顔みれば、辭はなく、只うなづき給ふぞあはれ。日も傾きければ、かへさ路につきぬ。日かげの旗亭の前をすぎて、岩間の道を出で、やど近くなりし時は、夕月東の山の上にてりて、波間に浮ぶかげ寒し。姫君の給ふやう、妾たちは明日都に歸らんとすなり。久しく相知りまつりたるを、急に分れまつらんが本意なし。都に歸り給はん日は、また逢ひまつらまほしと、母君もの給へども、語りまゐらすべくもあらぬことありて、それさへかなはぬがうらめし。もし、こと思ふ様になりたらば、消息まゐらすべければ、必ず訪はせたまへとあるに、我も名

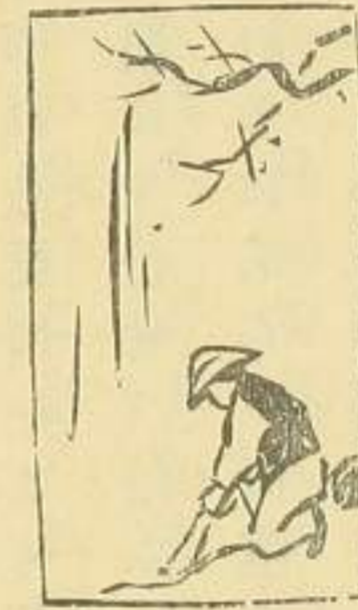
殘をしき心地して、暫しは辭もなかりき。さらば一つの願はべり、聞き入れ給ふべくやといへば、何ぞと問ひ給ふ。外のことにも侍らず、今宵はさきつ夜の如く、月いと清ければ、琴一曲弾きてきかせ給へといふに、さてはかのとさき拙きしらべを立ぎし給ひしは、君かとして、二人して打ち笑み給ふ。宿にかへりて沐浴して、夕げすまして、後、彼君たちを訪れつ。先の程願ひし琴をと云へど、初は辭ひてひき給はざりしが、母君もすゝめ給ふに、拙きを笑ひ給ふなとて、曲一、二つかなで給ふ。今は御嘆きの由をも知りて、明日都に歸りて、後は如何にならんかと思ひ煩ひ給ふけしきも見ゆれば、さる類の曲にては、あらざりしかども、音いと沈むよと聞ひて、恨むが如く、訴ふるが如く、悲しくのみきゝなされて、覺ぬす青衫をうるほしぬ。翌くる日立ち給ふべき時になりたれば、せめては停車場まで送りまゐらせんとて行く。まだ時も遅からねば

とて、徒歩にて語りながら行き給ふ。今朝結ひ給ひし髪のおくれ毛、風になぶらるゝも、心の中の憂の外に現はるゝかと思はれていたはし。流車に乗り給ひて後も、窓より御顔半ば現はし給ひて、こなたを見給ふ。鐵車軋り初めても、御姿かくるゝ迄其場を去らで見おくれれば、彼方にも目もはなたで望み居給ふと見えしが、無情の火龍は姫君を載せまゐらせて地中の道に入りぬ。名どり惜しさ限りなし。

これより後、我は海邊に立ちて月見る毎に、かの君のこと思ひ出でずばあらず。波は金光を浮べて、清きとありし夜に變らぬども、其けだかき御姿は見ることを得ず。その哀れなりし瓜蒔は聞くを得べからず。再び音居の心ちして更に曩日のたのしさを覺ゆるとなかりき。歳忽ちくれて此處に新年を迎へぬ。知れる人々、都より數多つとひ來て珍らしき音づれなとさくにつけて、晝のほとはまぎれもこそすれ、夢魂

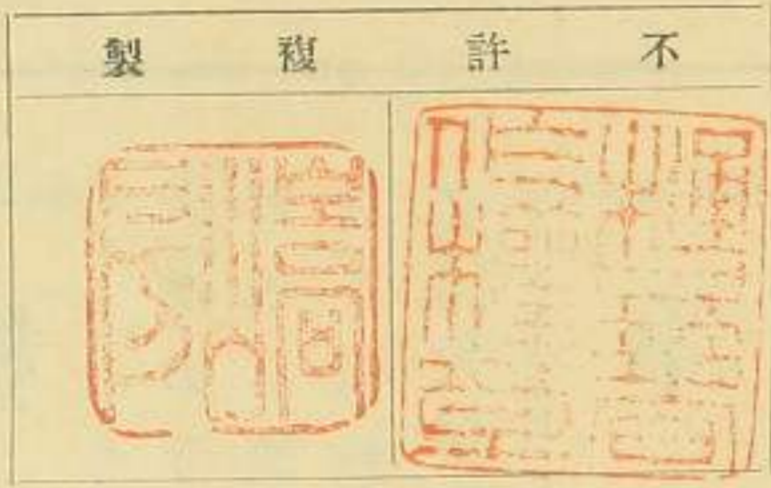
しばし番町の邊に迷ひぬ。居ると又二句ばかり、病全くおこたりたれば、我も亦都に歸りぬ。紅塵万丈の中、短檠の下、今は再び讀書に余念なけれど、月窓前の梅が香に霞む時は、あはれ彼の姫君何處にてか此の月かけ見給ふらむ、おどづれも更におこせたまはぬは、さてはうき世の濁浪に捲かれ給ひて、涙にやむせび給ふかといたはし、さ限なし。あゝ、我れもと彼の君を知れるにあらず。海濱の月明にうかれて、適まそのすがゝきの音をなつかしみ、その高節をさいてよりうたゝ景仰の念にたへず。三句の交夙に十年の知己の如く、月明の夜、別れの曲をささしは縁なればこそ。今に至りてなほ彼の君の心を苦慮するも亦縁なり。たゞその高潔なる貞操を慕ふのみ。何の罪かあらん。我に一片の蓬の心あるとなし。誰に向つてか恥ぢん。あゝ、かの配所の、月我は終生これを忘るゝことなかるべきなり。春漸く深く、鴻雁將に花を見す

てい去らんとす。知らず、いつの時彼の姫君のおとづれをにかけてくる  
べき。あはれ



誤		正	
一八	頁	一八	頁
六	行	六	行
解説	誤	解説	正
酬ふる	終らのんば	酬ゆる	終らすんば
二〇	二七	六九	六九
二九	二九	六九	六九
二九	二九	七二	七二
三〇	三〇	七九	七九
三二	三二	九八	九八
三三	三三	一〇〇	一〇〇
三三	三三	一二二	一二二
三六	三六	一二五	一二五
五〇	五〇	一六八	一六八
五二	五二	一七四	一七四
五三	五三	一九三	一九三
五七	五七	二一三	二一三
五九	五九	二六一	二六一
六四	六四	二九三	二九三
六七	六七	三二三	三二三
四	行	七	行
四	行	三	行
七	行	八	行
一	行	六	行
五	行	一	行
二	行	十一	行
三	行	九	行
九	行	六	行
二	行	一	行
十	行	八	行
一	行	四	行
九	行	十二	行
八	行	八	行
三	行	十二	行
五	行	五	行
六	行	六	行
誤	誤	誤	誤
終らのんば	終らすんば	小我一時	小我の一時
Nietzsche	Nietzsche	貧弱	貧弱
極端なる	極端なる	獨りその	獨りその
なきかた	なきかた	規矩を越ゆ	矩を踰ゆ
争ふて	争うて	だに	に
是よりの後	是より後	訓釋的學	訓釋哲學
ロマンチズム	ロマンチズム	我等を	我等を
されば	さばれ	宏	宏
則を	矩を	天壤	天壤
又これ	これ	生活問題	人生問題
されば	さばれ	隆盛	隆盛
須ひ	須め	あうり	あらう
されば	さばれ	文學隆盛	文學隆興
藝術家文の	藝術家文士の	吝として	吝として
誤	正	誤	正

明治三十九年三月十九日印刷  
 同 三十九年三月廿三日發行  
 同 三十九年四月五日再版



賣 賣  
 東京 如山堂  
 全 東亞堂  
 大坂 前川書店

名古屋 川瀬代助  
 京都 若林書店  
 全 寶文館

大坂 吉岡書店  
 全 杉本書店  
 久留米 菊竹書店

著 者 樋口 秀雄  
 發 行 者 兼 印 刷 行 所 小 林 慶  
 發 行 所 嵩 山 房  
 印 刷 所 明 昇 舍  
 東京市小石川區白山御殿町百十番地  
 東京市下谷區中根岸七十五番地  
 東京市日本橋區三代町廿二番地  
 (電話下谷一、〇〇五番)

定價金六十五錢

120-

# 賜 天 覽

子爵渡邊國武君著

## 機 外 觀

全一冊  
定價 金四十錢  
郵税 金六錢

文學あり哲學あり禪談あり亦詩歌あり書中伊藤に  
留任を勸むる書の如きは所信斷行に勇なる子が面  
目を髣髴せしむ

文科大學生種田豐藏君筆

## 筆 の は な

全一折  
定價 金三十五錢  
郵税 金四錢

右今千蔭とまで稱揚せらるゝ種田君の筆にして假  
名習字帖として最も適當せるものなり

